

25
800



糸

伊

呂

市

郡

名

所

舊蹟

誌

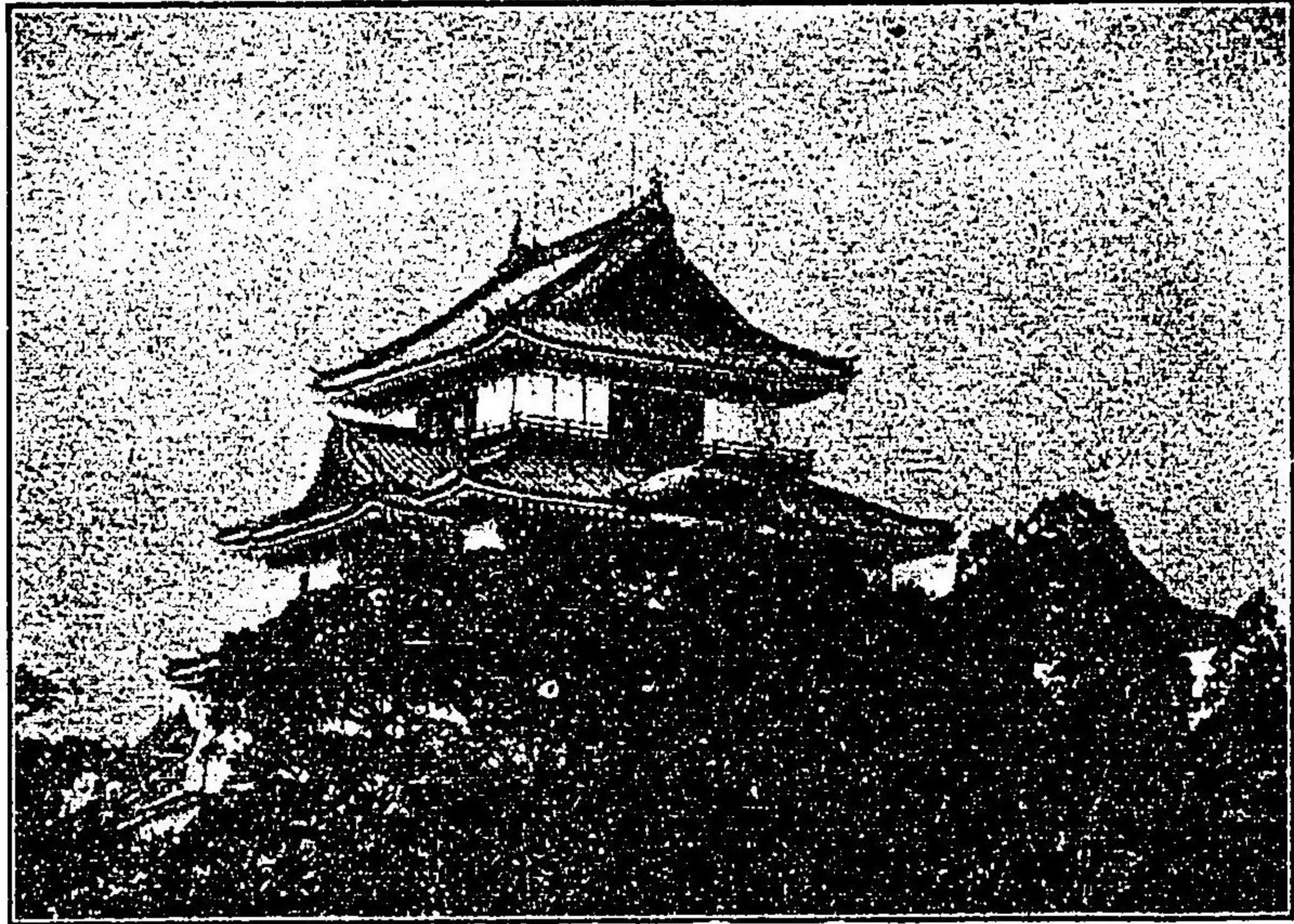
所
室

室

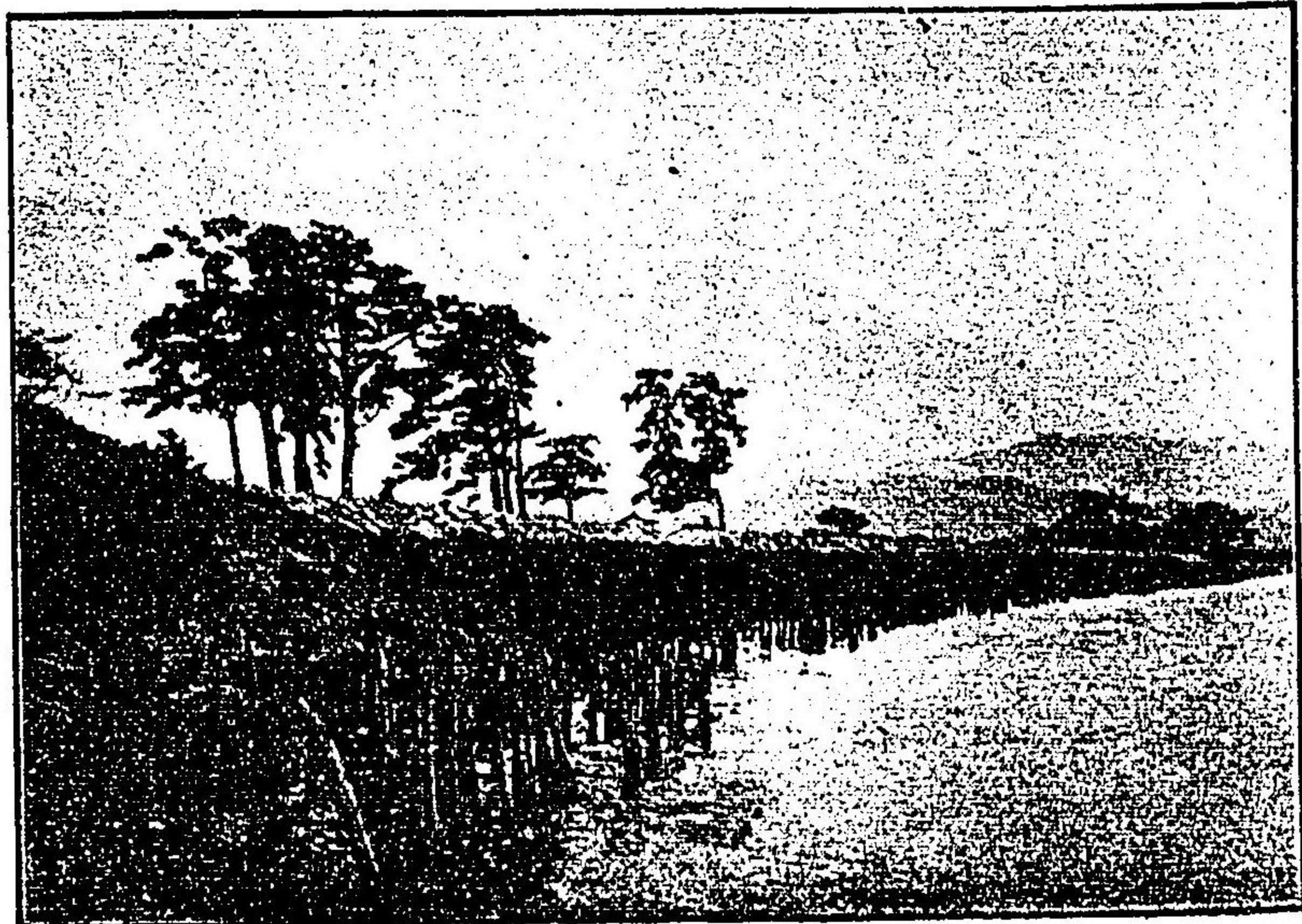


像 肖 者 著

紀伊名所舊蹟



和歌山城



和歌浦片男溟

墨城、人間に落ち、宗教家となり、新聞記者となる、其の間十數年を費す、公益を圖りて遂げず、亦目的を達せず、茲に三年前の舊稿と新稿、漸く此の案内書と爲る、聊か以て、知、未知の人に頒つ、

伊 紀 名 所 舊 蹟



和歌浦下り松

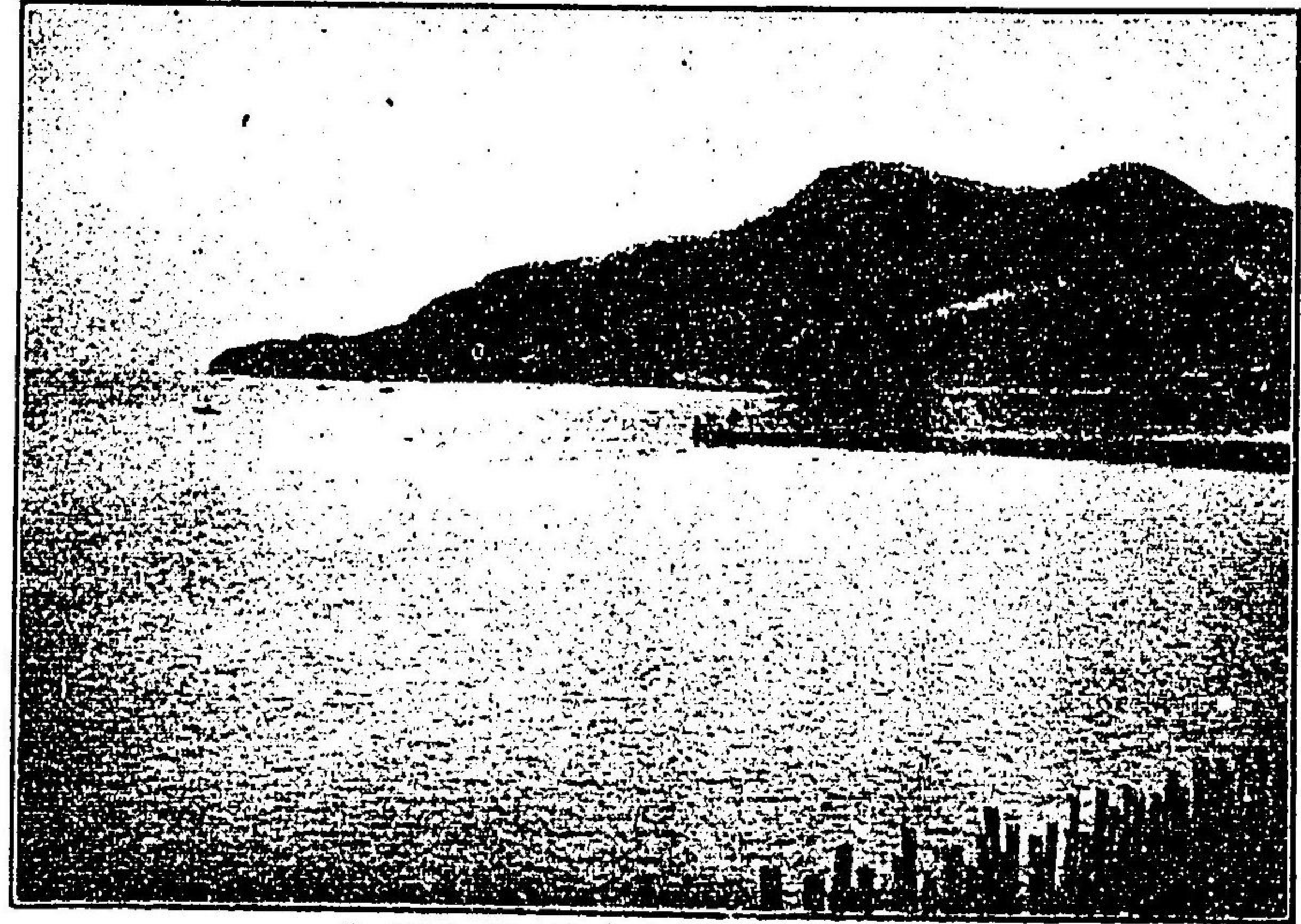


和歌街道根上松

伊 紀 名 所 舊 蹟



和歌浦玉津島神社



和歌浦片男浪上り島を望む

蹟 舊 所 名 伊 紀



社 龍 南 宮 照 東 浦 歌 和



【(舞衣母) 一の祭歌和

蹟 舊 所 名 伊 紀

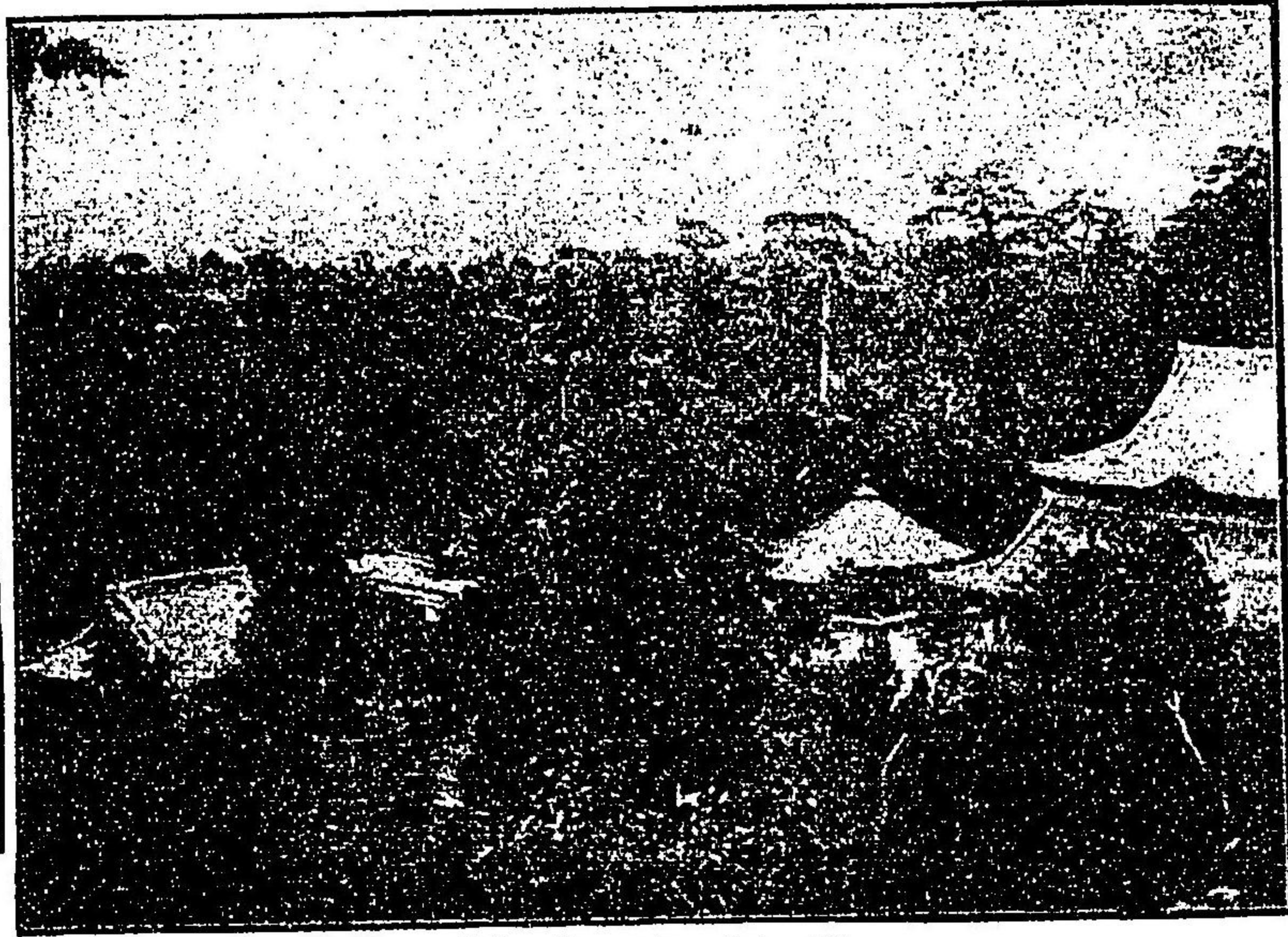


社 神 山 竈 田 和 郡 草 海

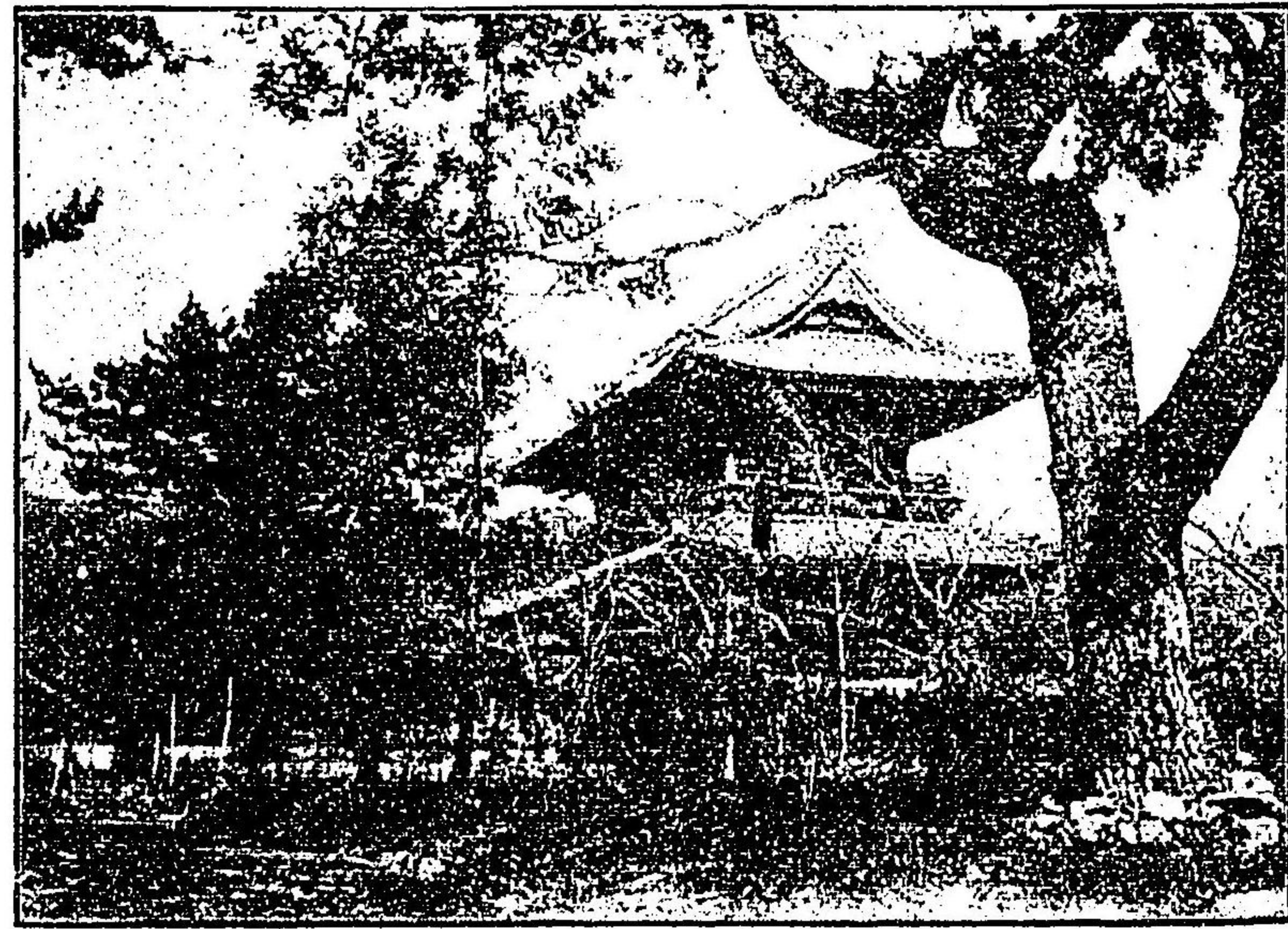


寺 井 三 紀 郡 草 海

蹟 舊 所 名 伊 紀

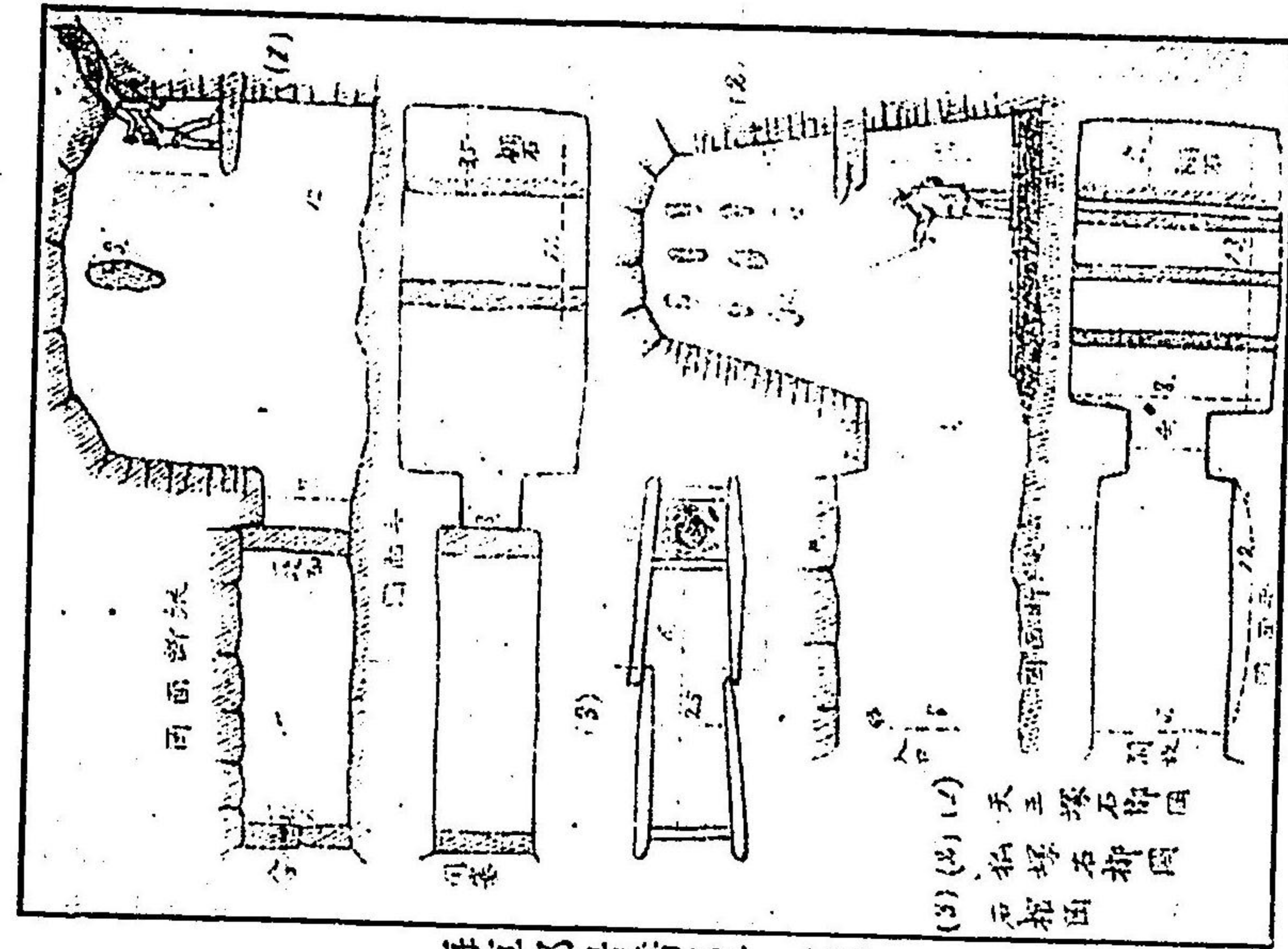


景 全 寺 河 粉

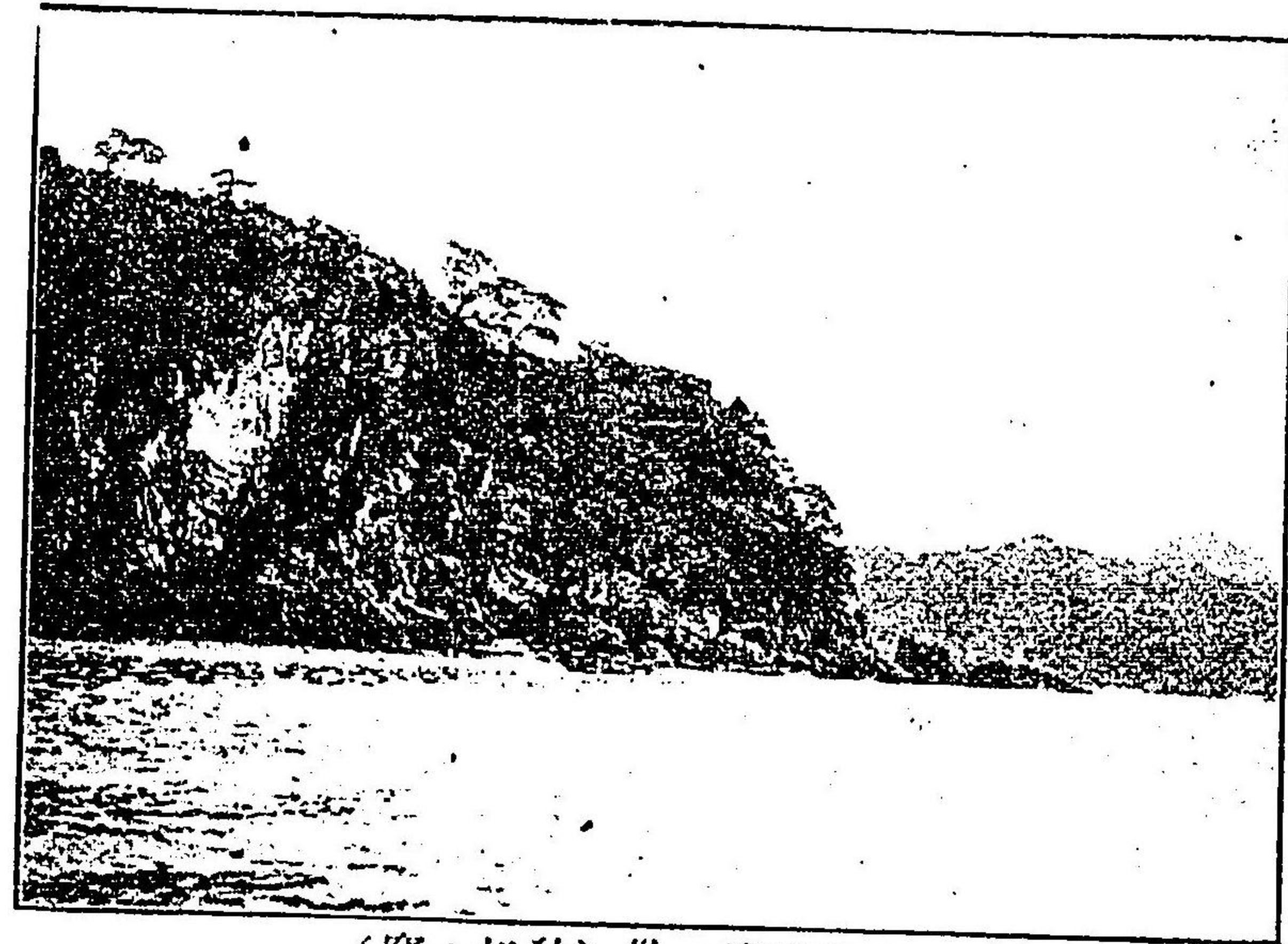


門 大 寺 來 根 郡 賀 那

蹟 舊 所 名 伊 紀

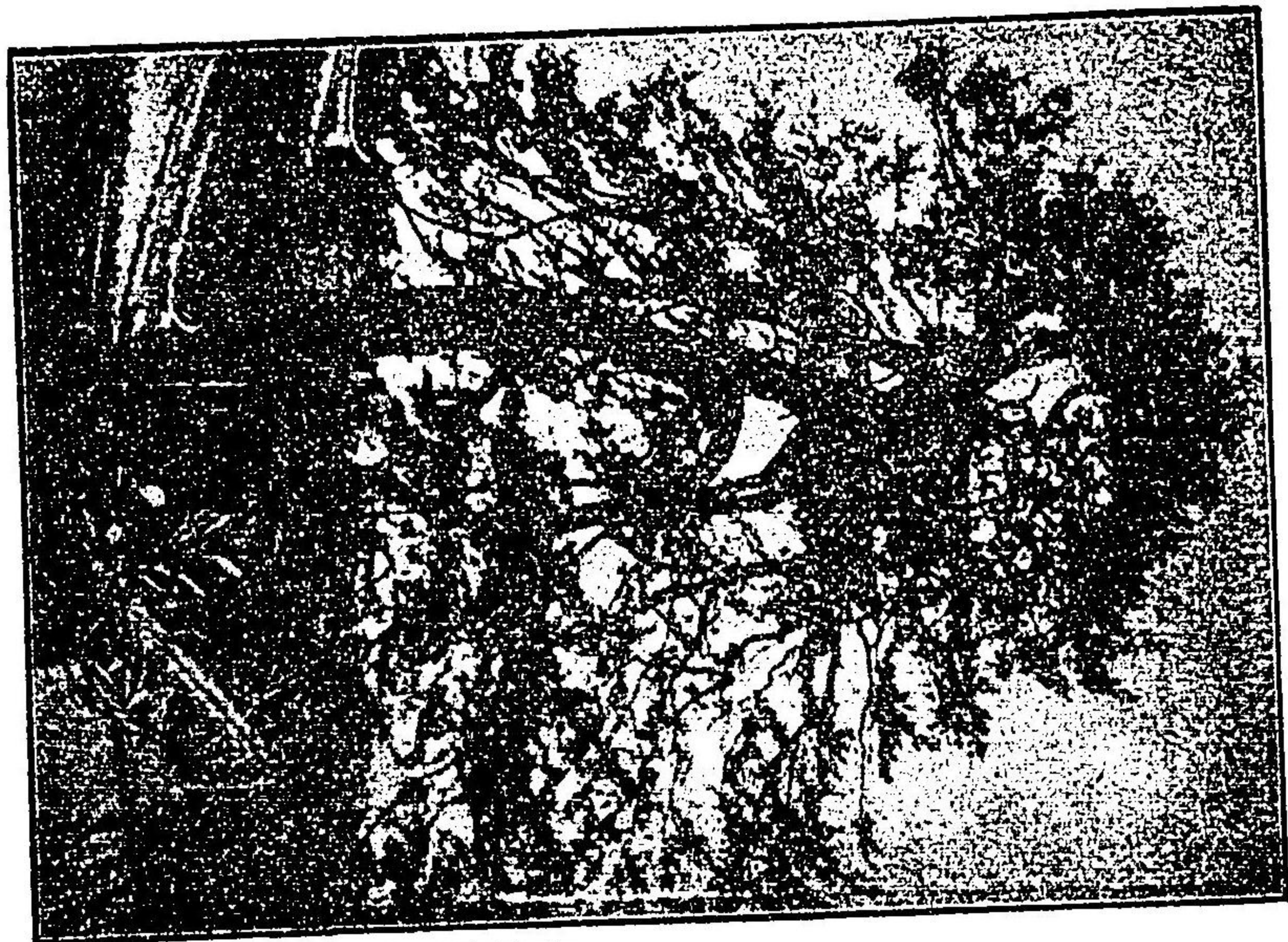


海 草 郡 岩 橋 山 千 人 塚

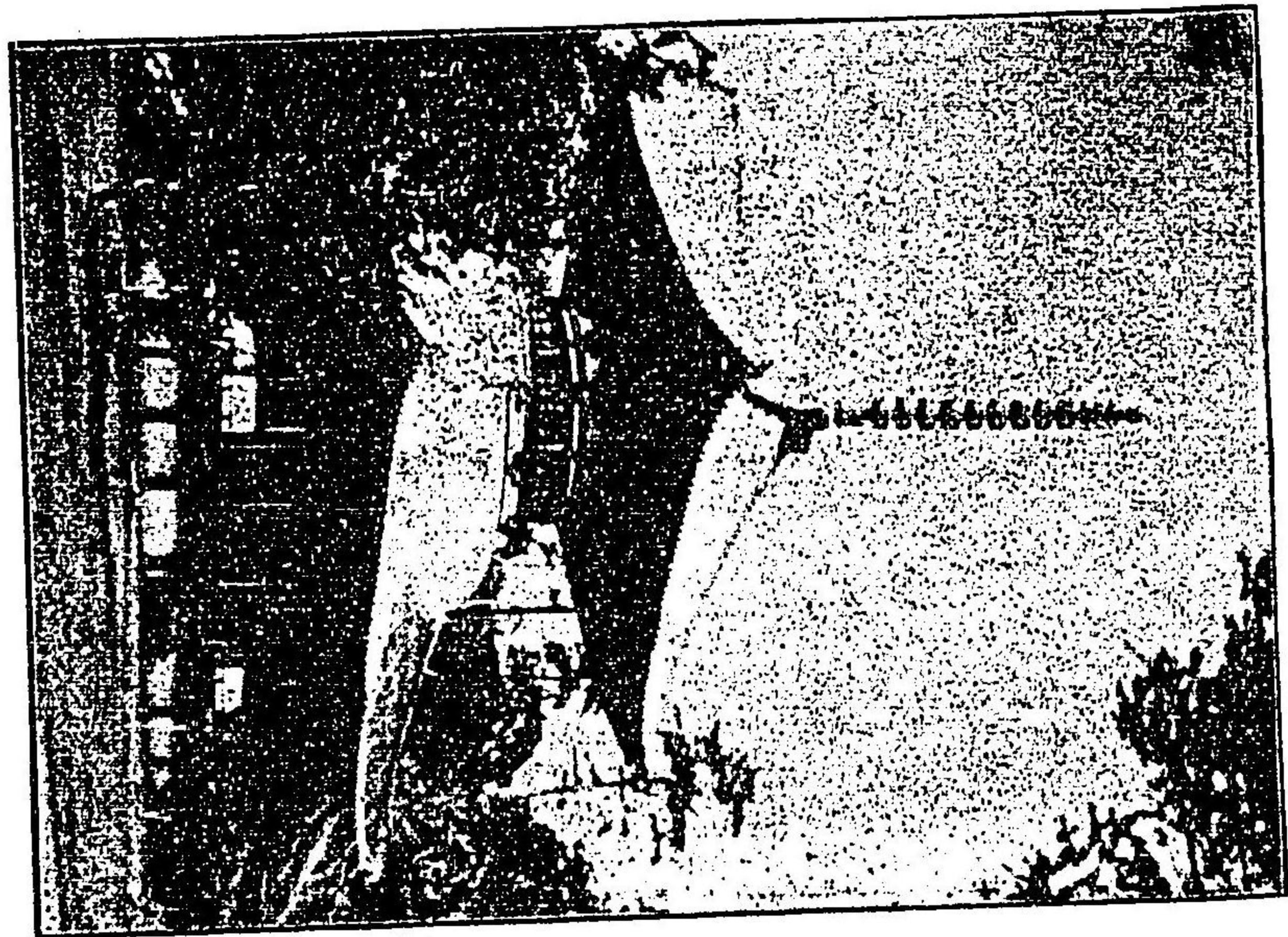


(窟 夕 如 教) 巢 ノ 鷹 郡 草 海

蹟 舊 所 名 伊 紀



伊都郡九度山真田の松



那賀郡根來寺ノ塔

蹟 舊 所 名 伊 紀



那賀郡粉河十律院(前庭)

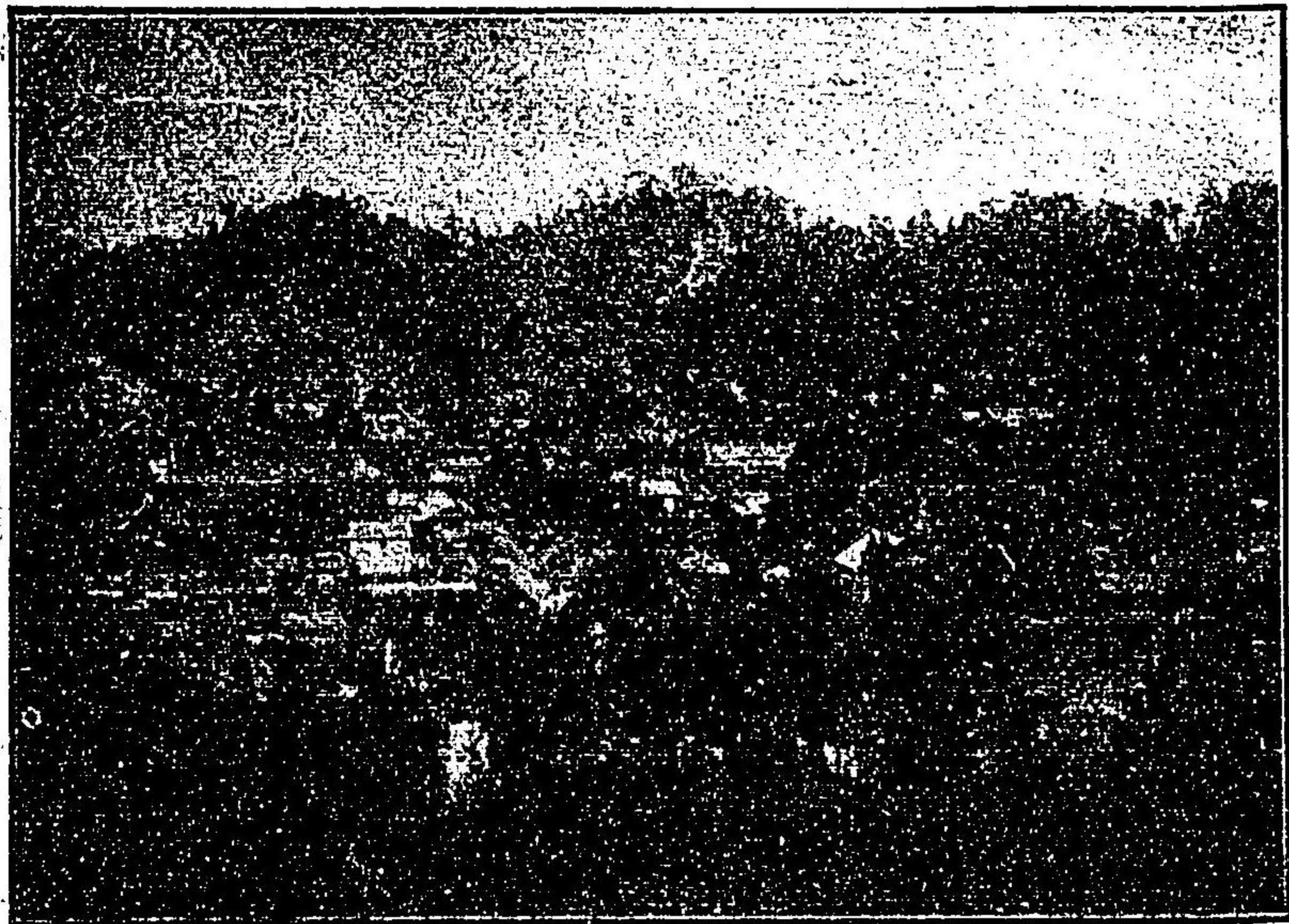


那賀郡富士崎

紀伊名所舊蹟



高野山(金剛峯寺)

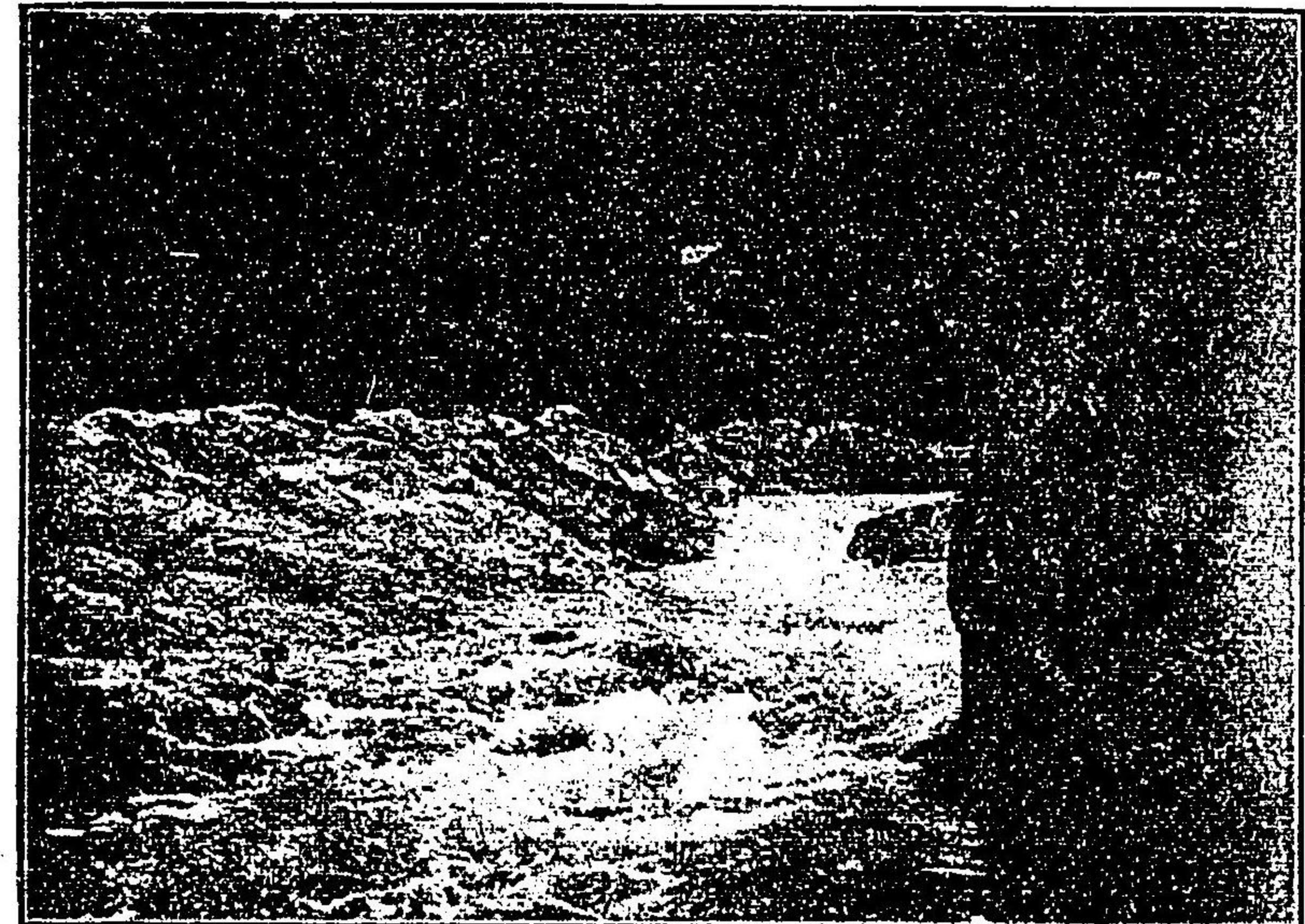


高野山全景

紀伊名所舊蹟



伊都郡九度山 眞田庵 (阿波守墓)



伊都郡九度山龍王溪

和歌山美人



子縫庵月風廓番



龍如月山廓番

和歌山美人



香鶴大廓番

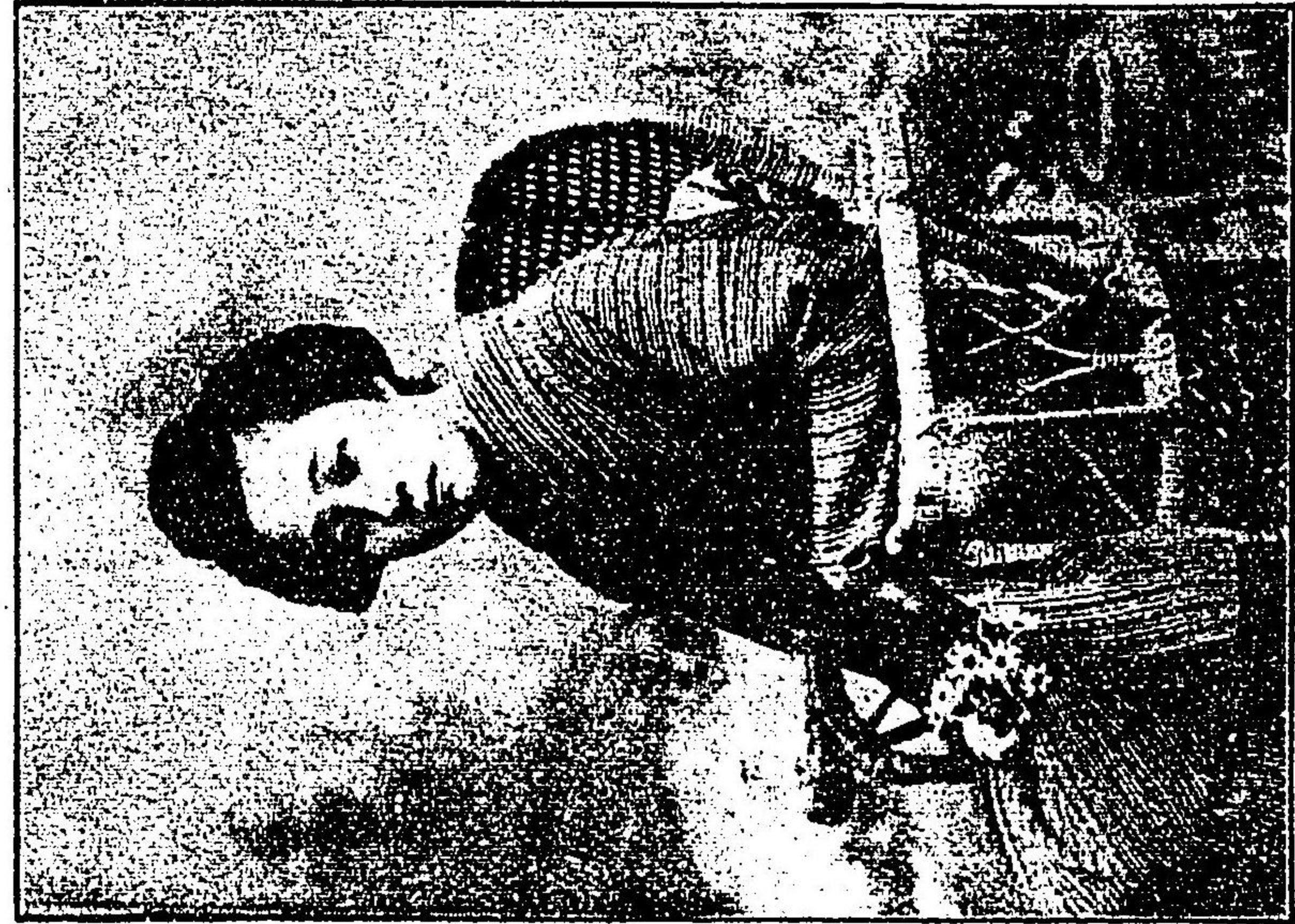


太八保大廓番

和歌山美人



お七の三右衛門 番席



お七の三右衛門 番席

和歌山美人



岩城 春子 東席

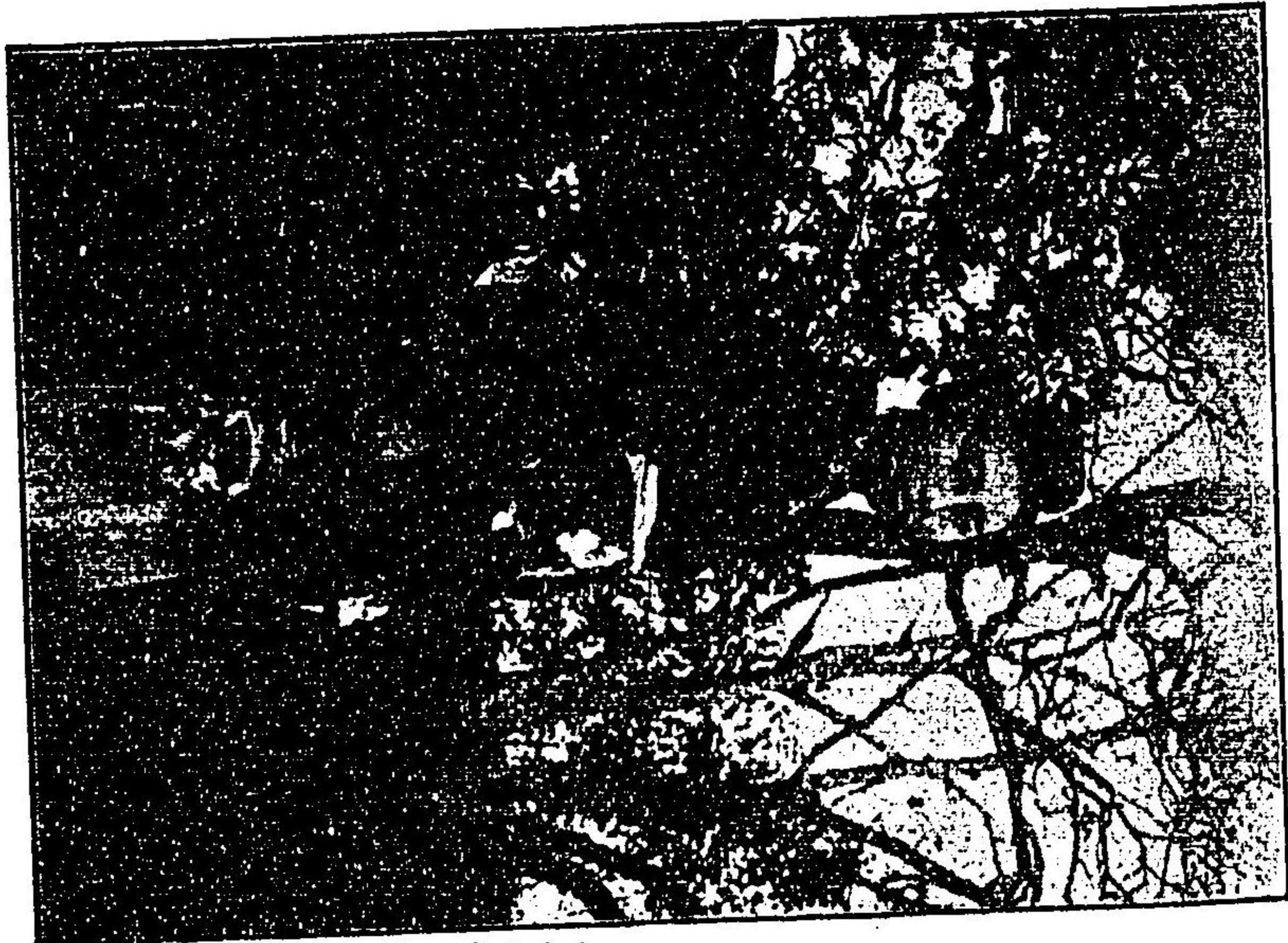


岩城 春子 東席

和歌山美人

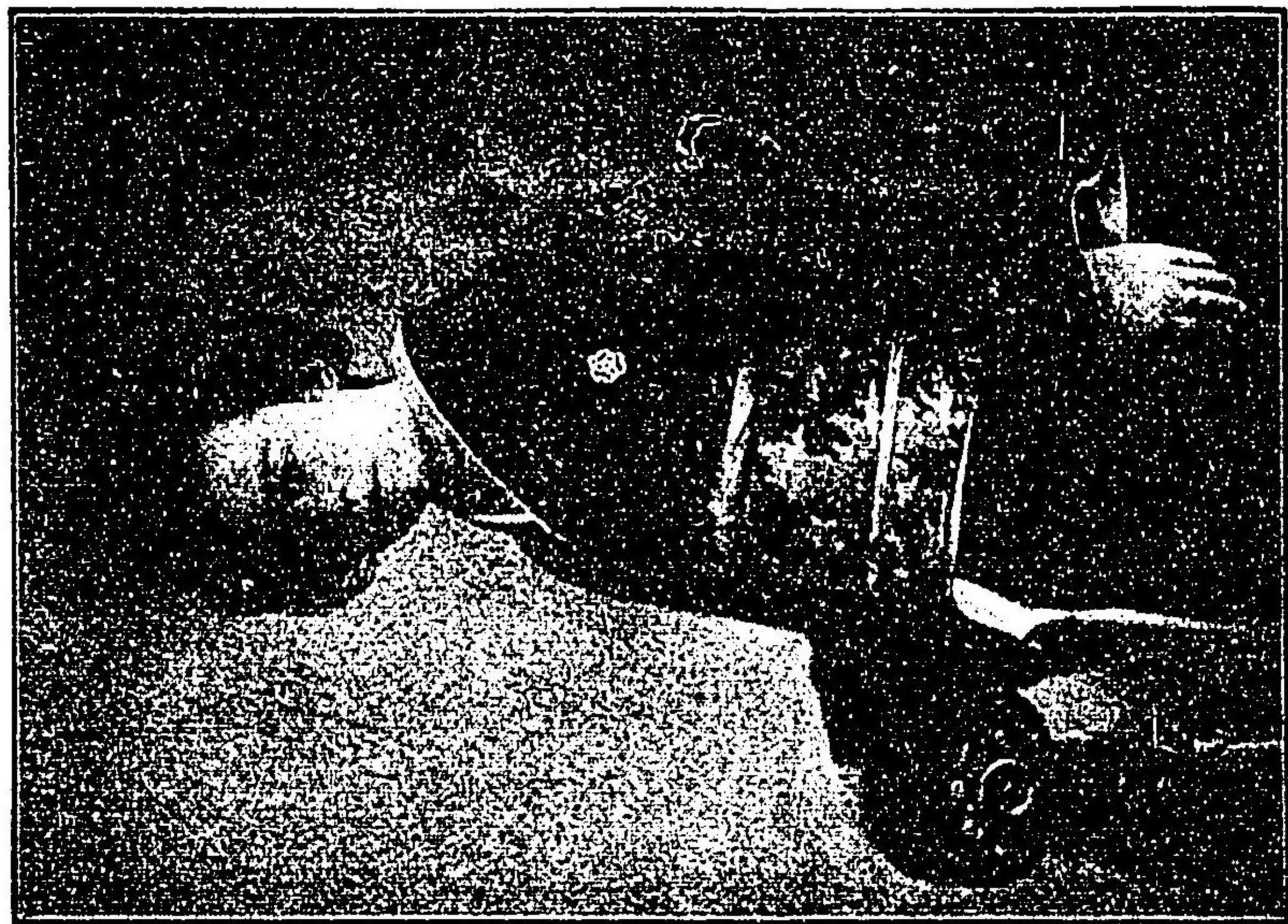


東廓一とく町子

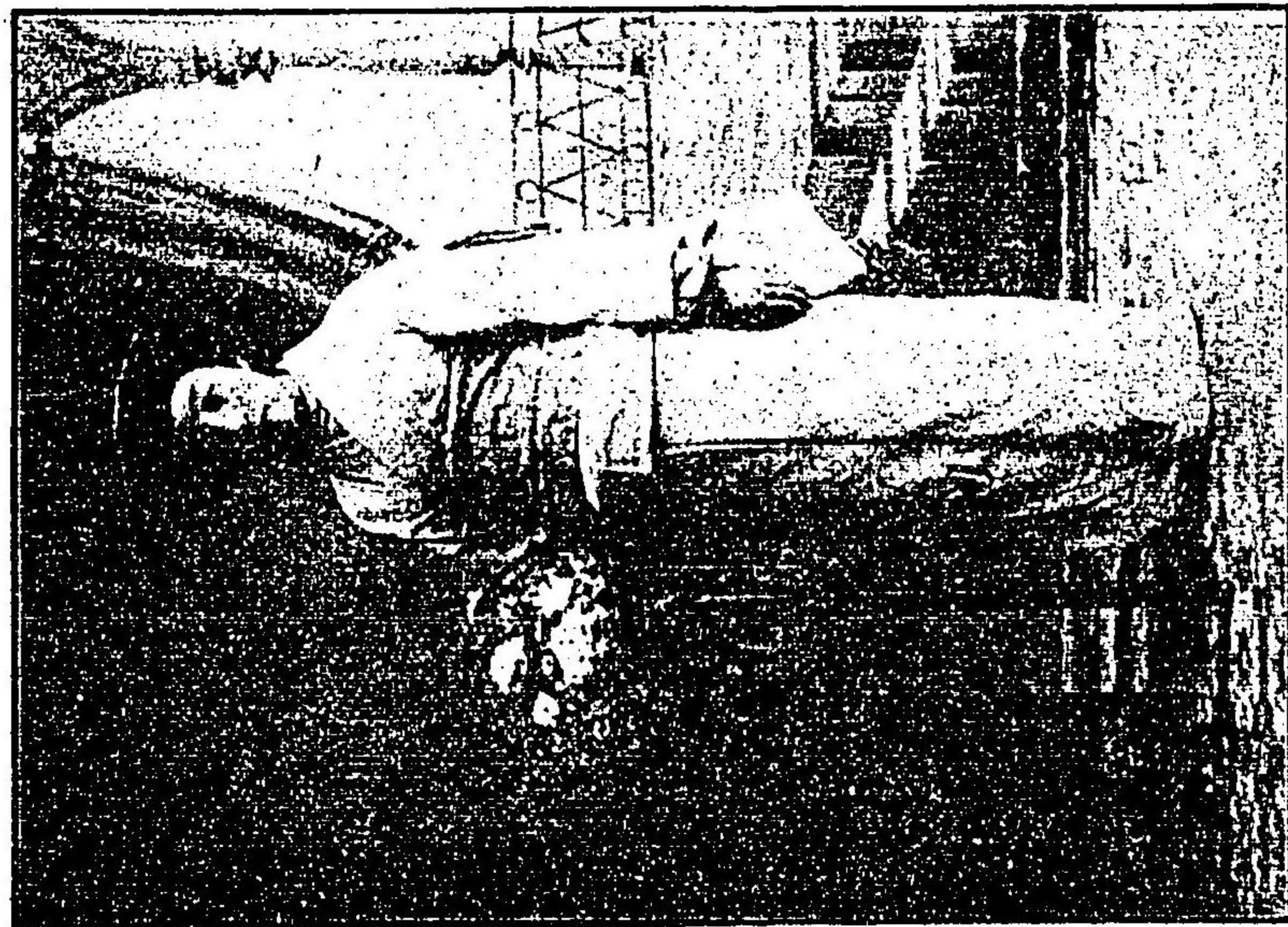


東廓一とく一龍

和歌山美人



東廓四美館君勇



東廓四美館綾子

和歌山美人

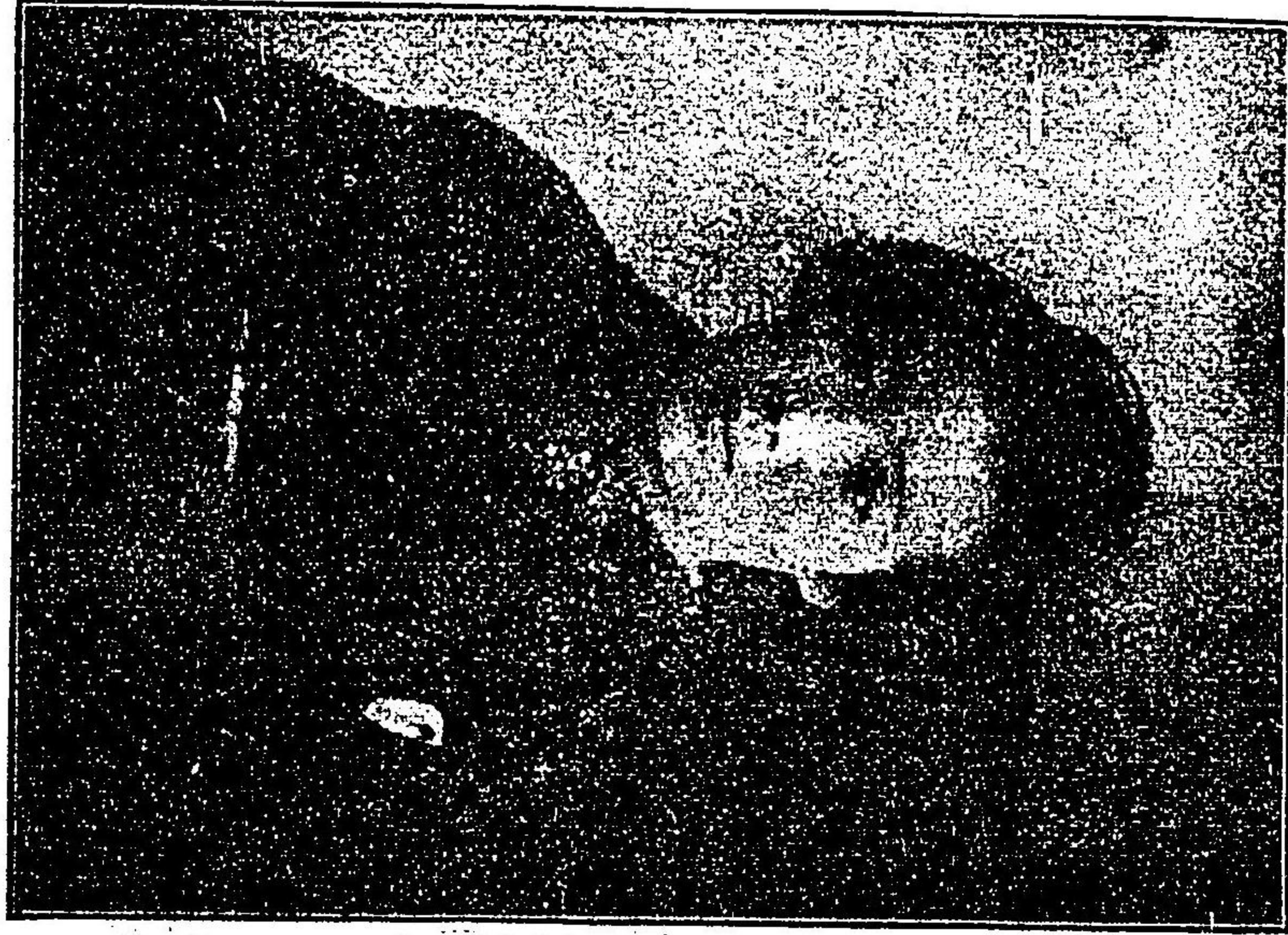


辰若樓萬壽東廓



龍若樓萬壽東廓

和歌山美人

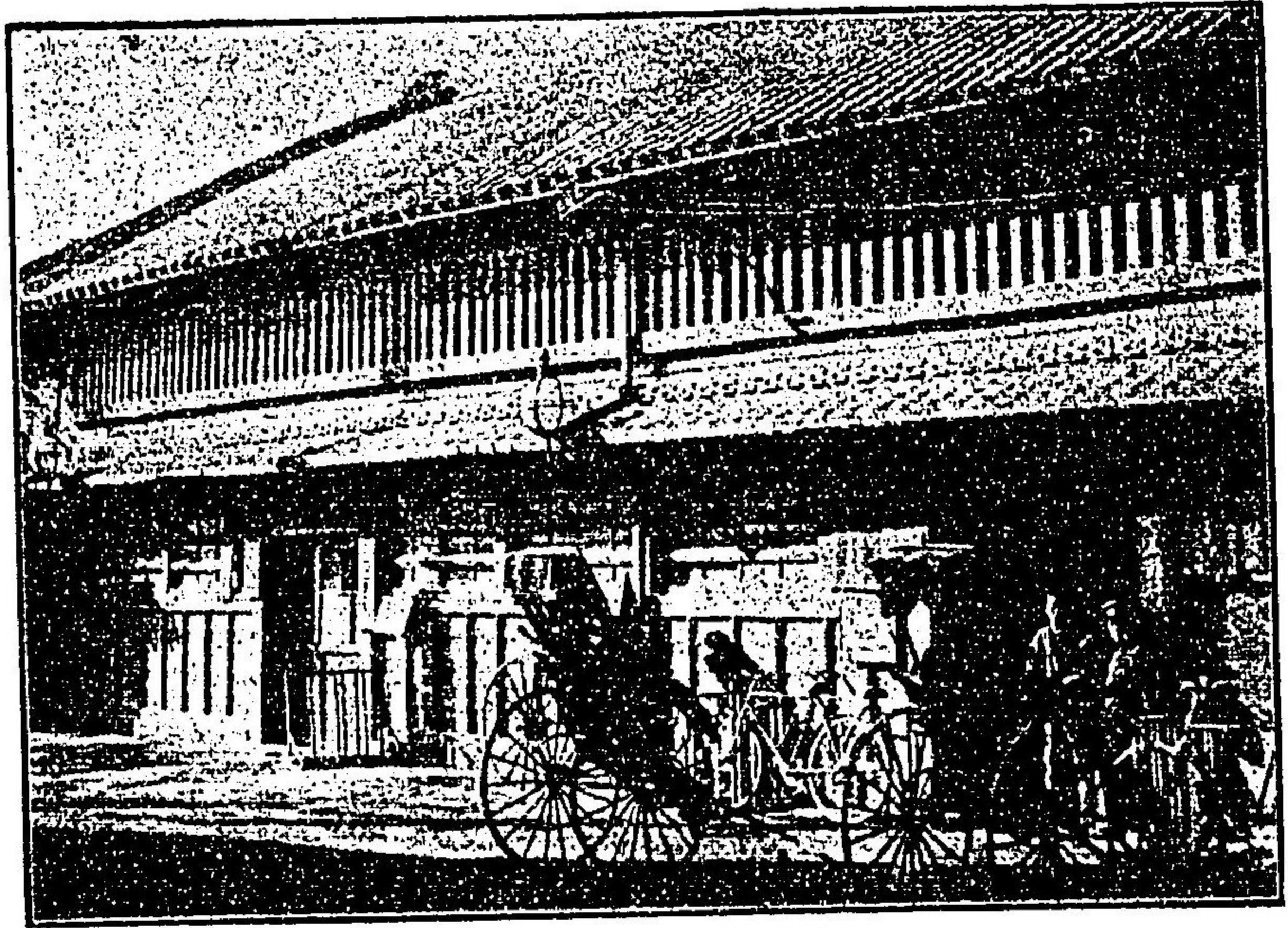
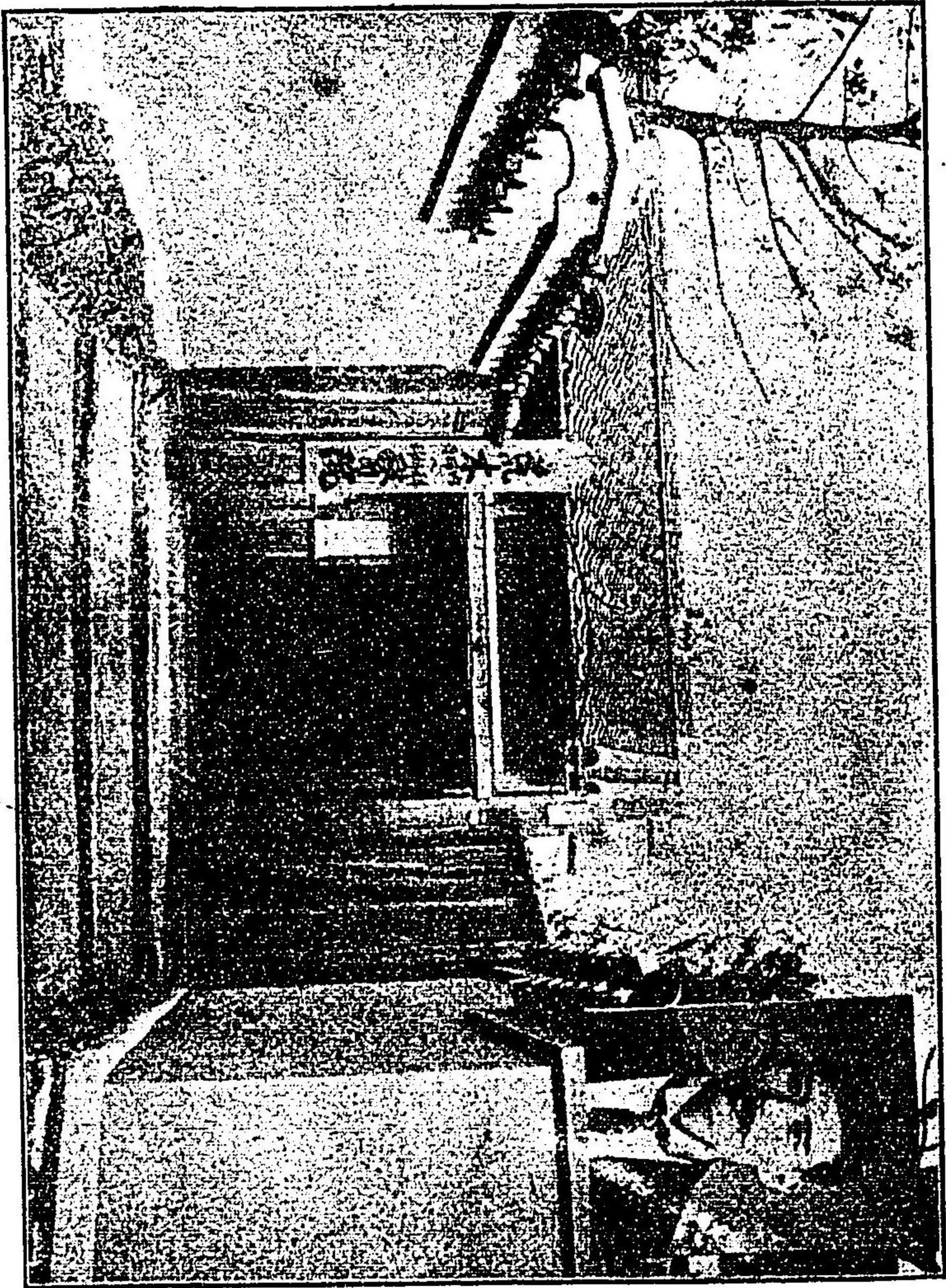


香春し上阪東廓



糸柳花此東廓

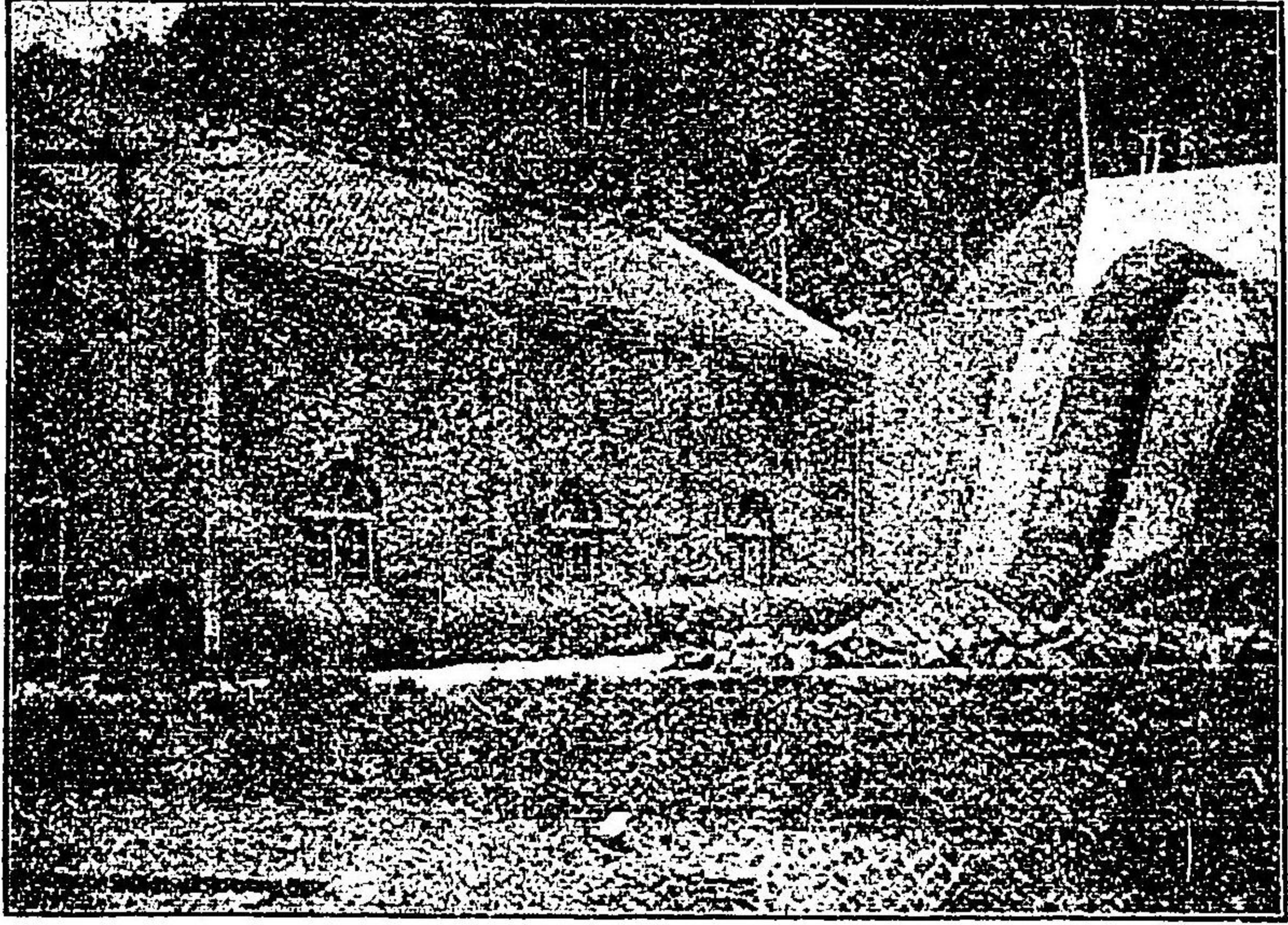
氏耶次新木荒長院醫木荒 三町長東



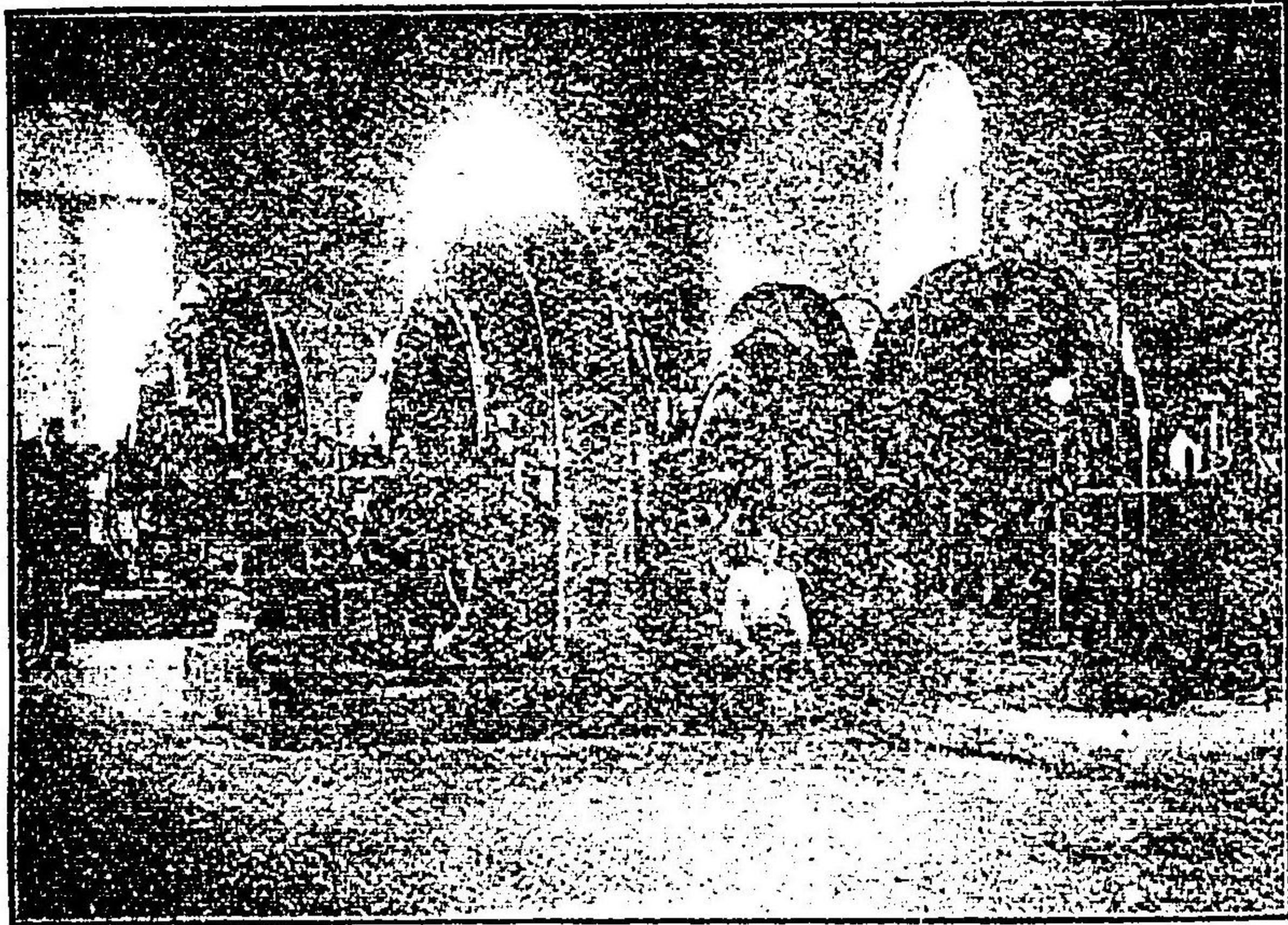
行銀三十四



行銀山歌和



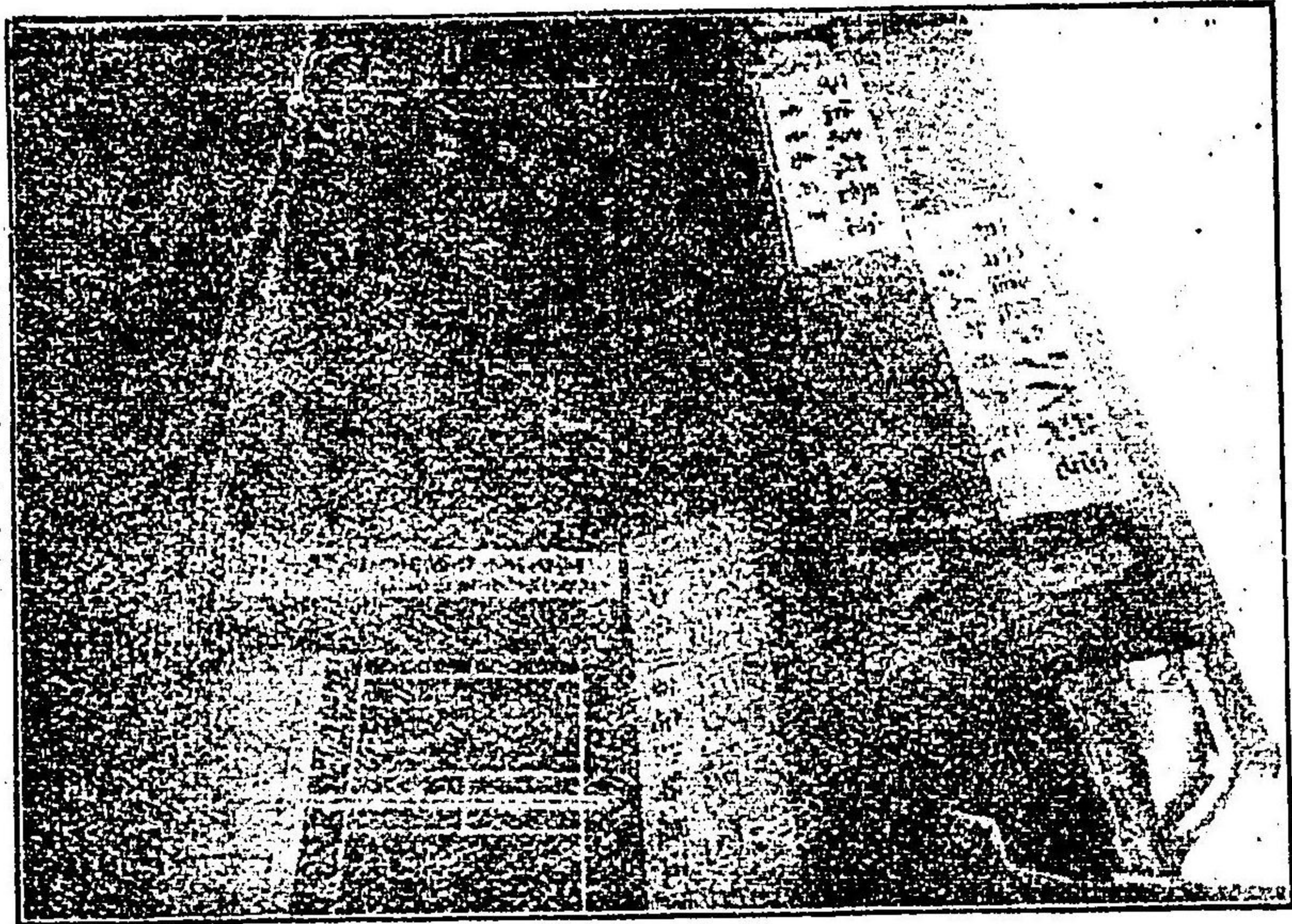
一の所電發社會氣電力水山歌和 (方越上高山)



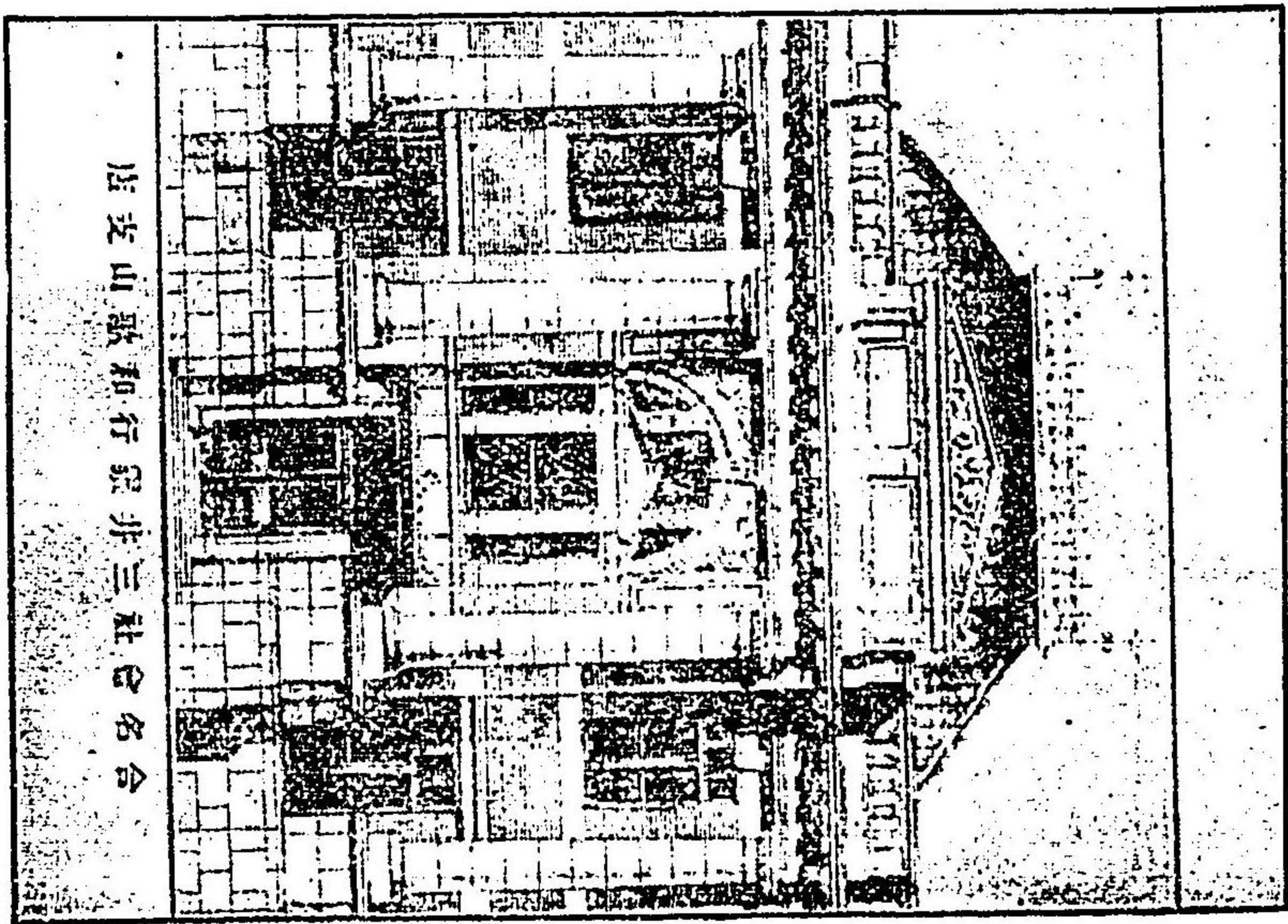
二の所電發社會氣電力水山歌和



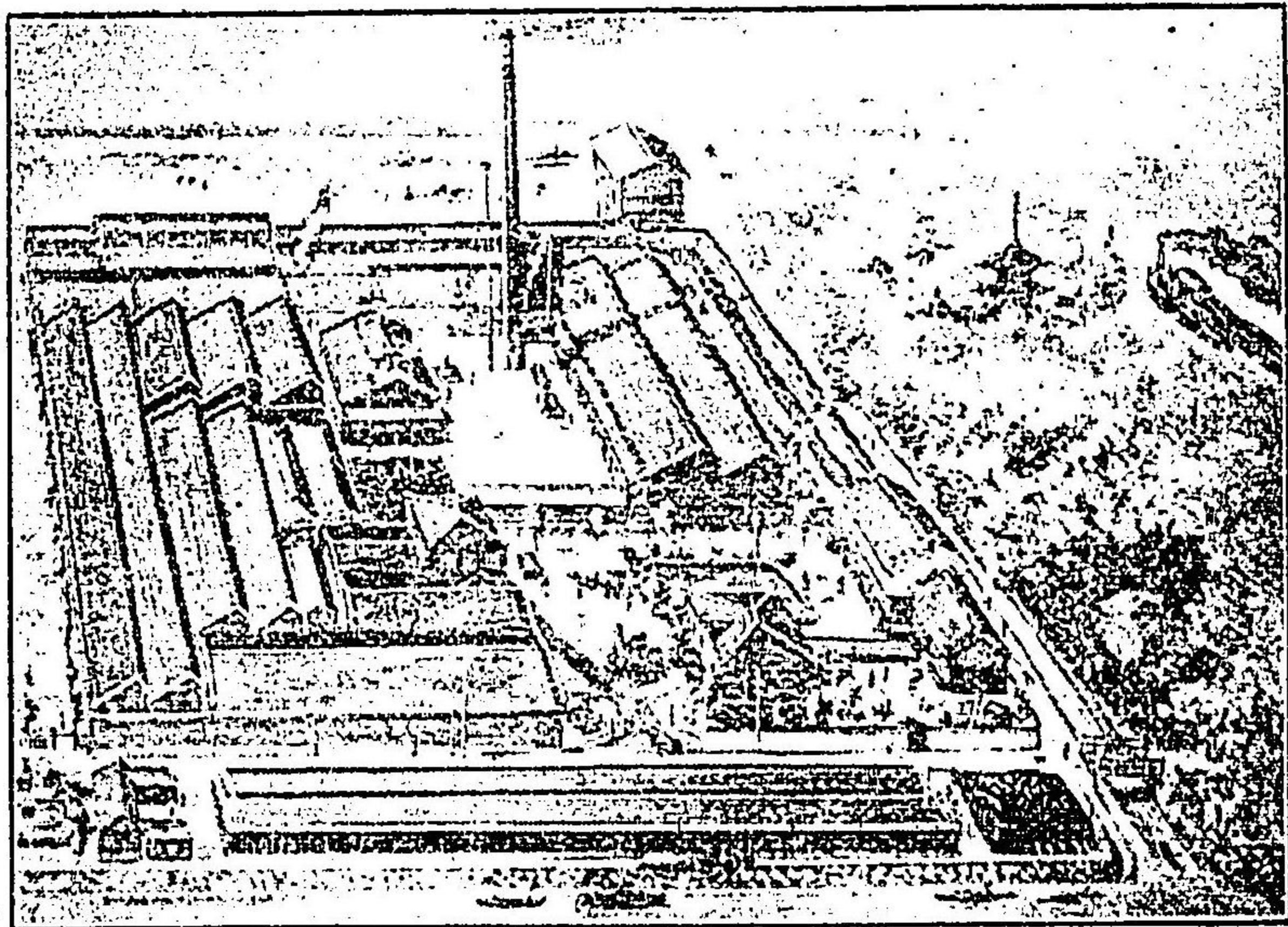
氏郎一村川主館と館真寫村川



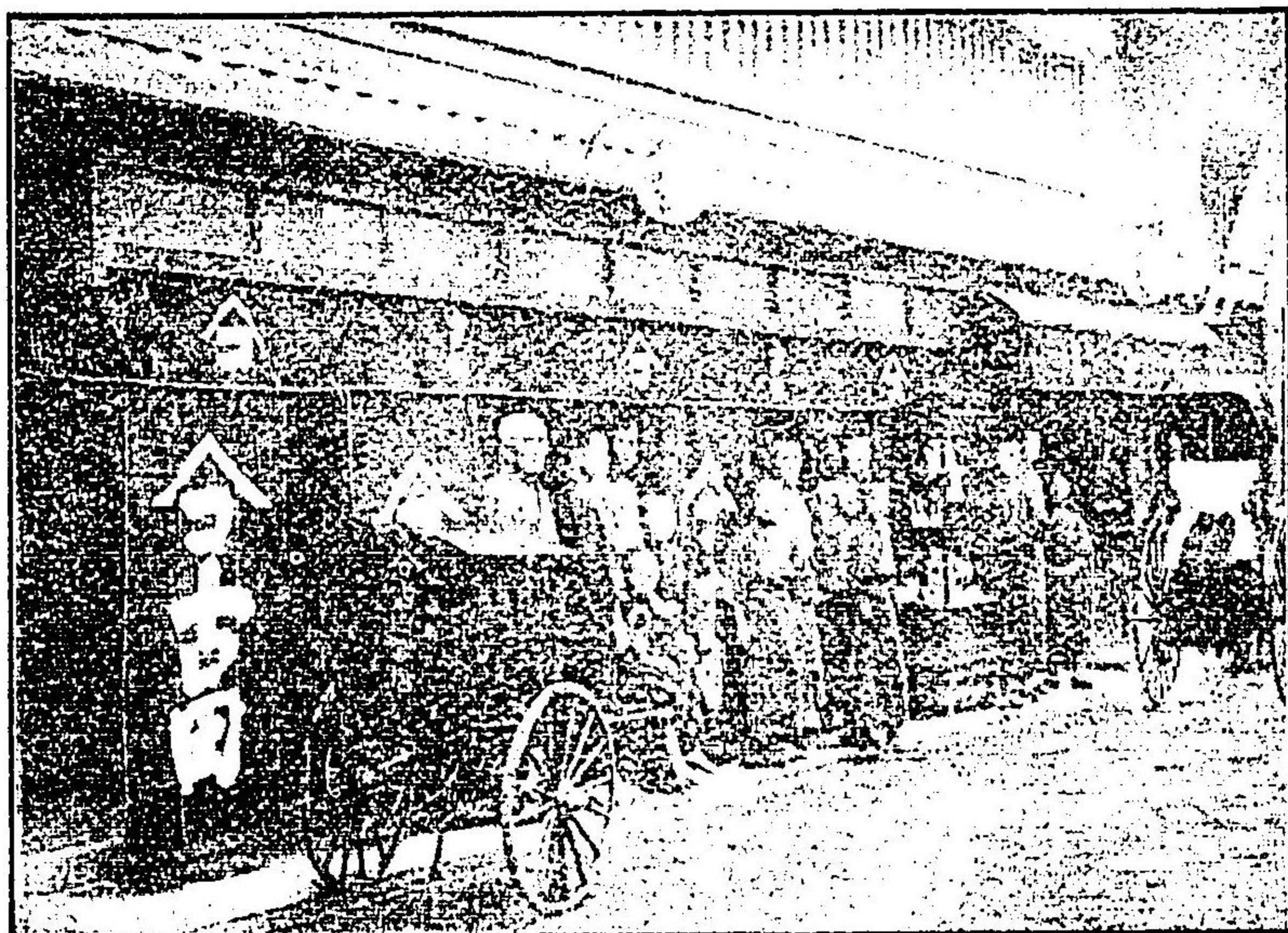
寄合町 南川看版店



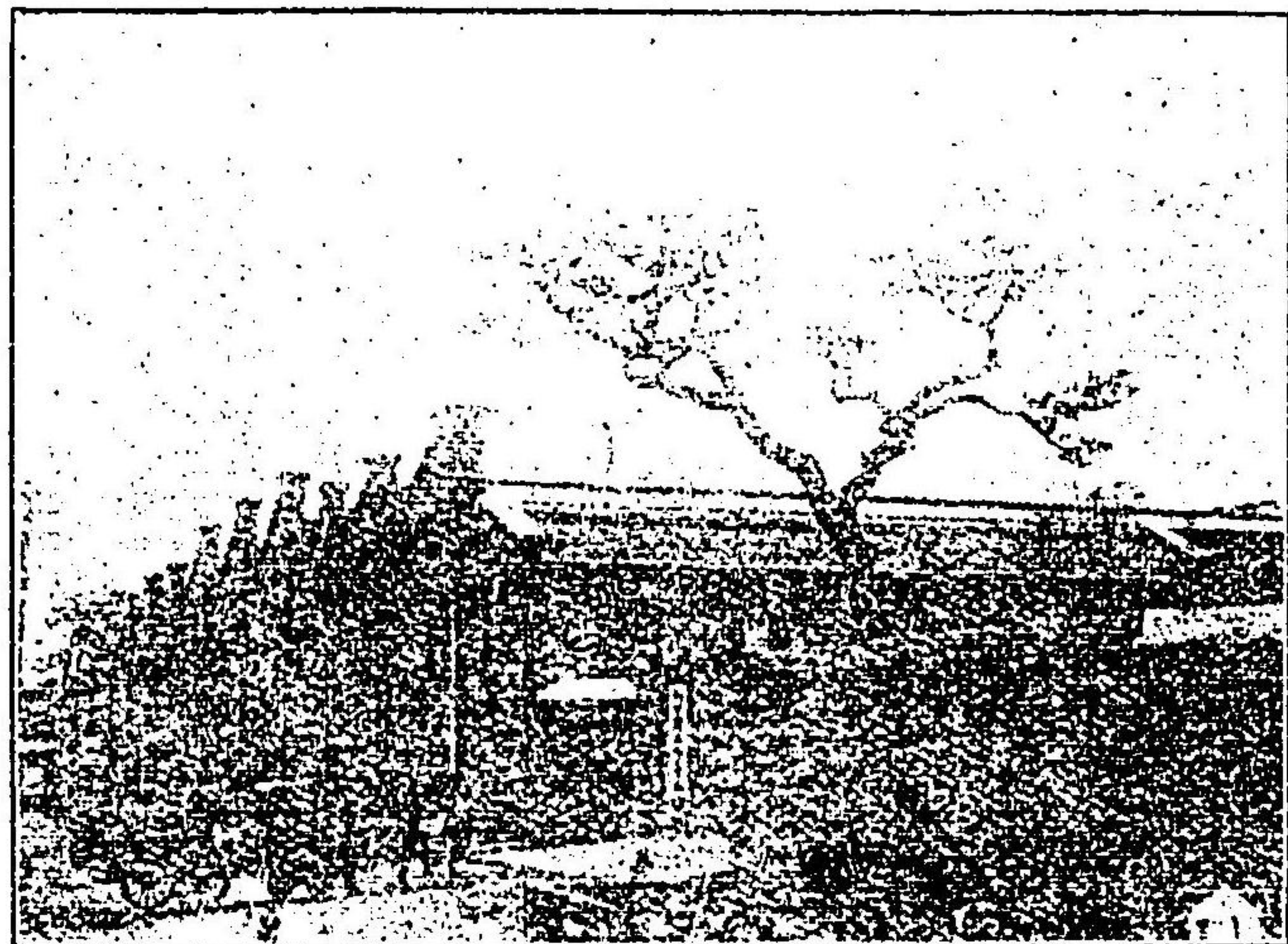
店支山歌和行銀非三社名合



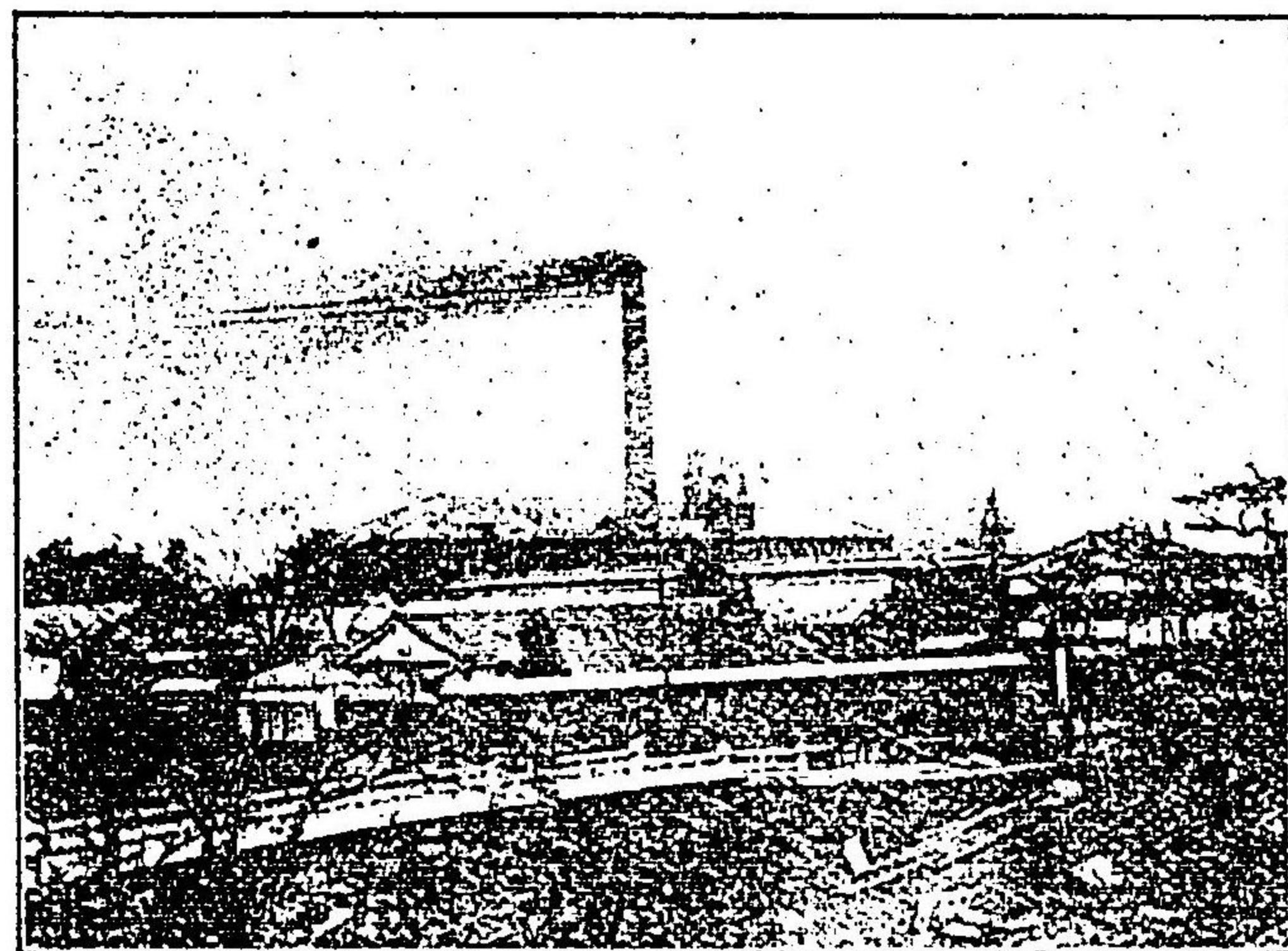
社合式株ルネ綿一第



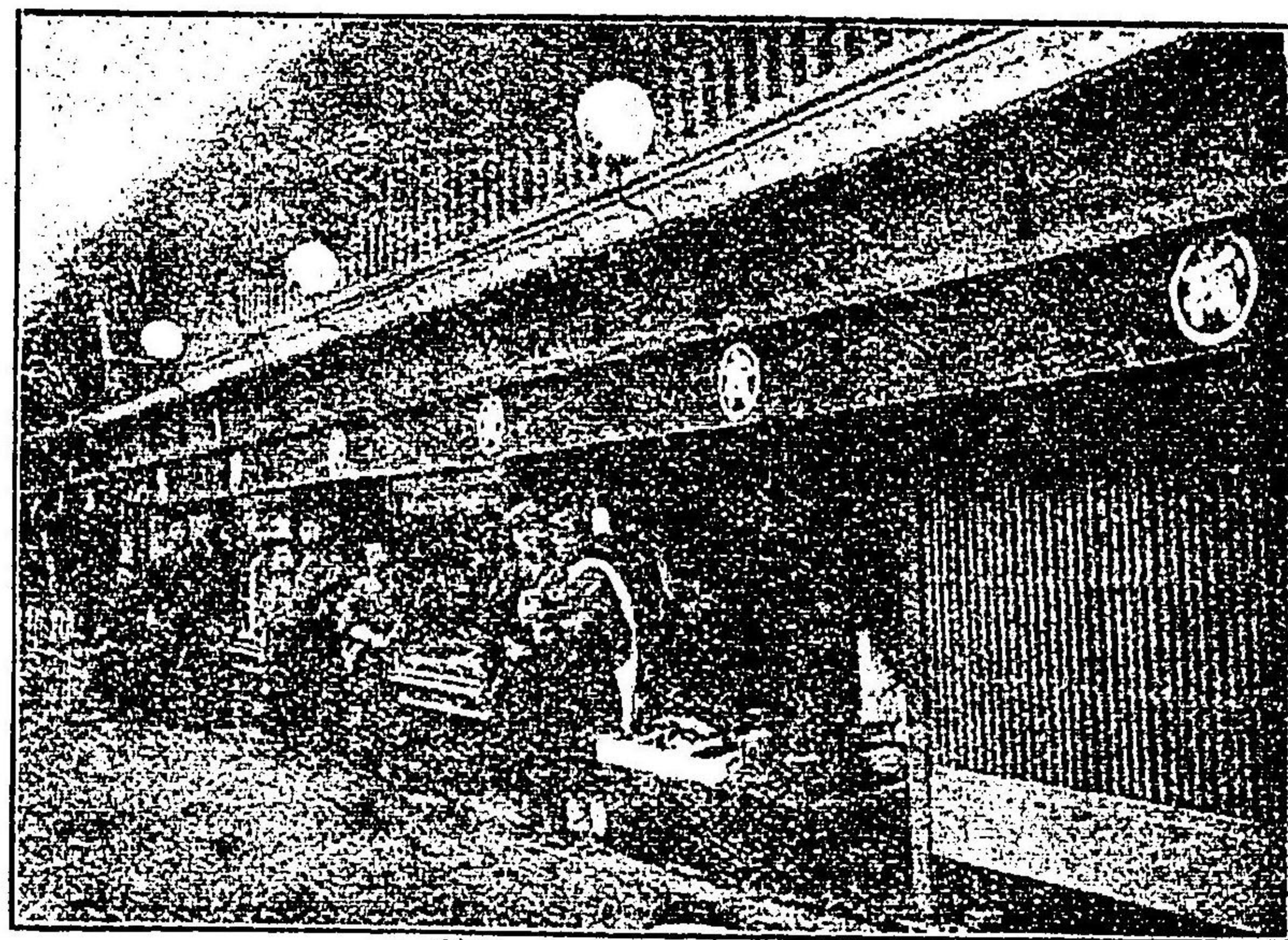
店物間小田古



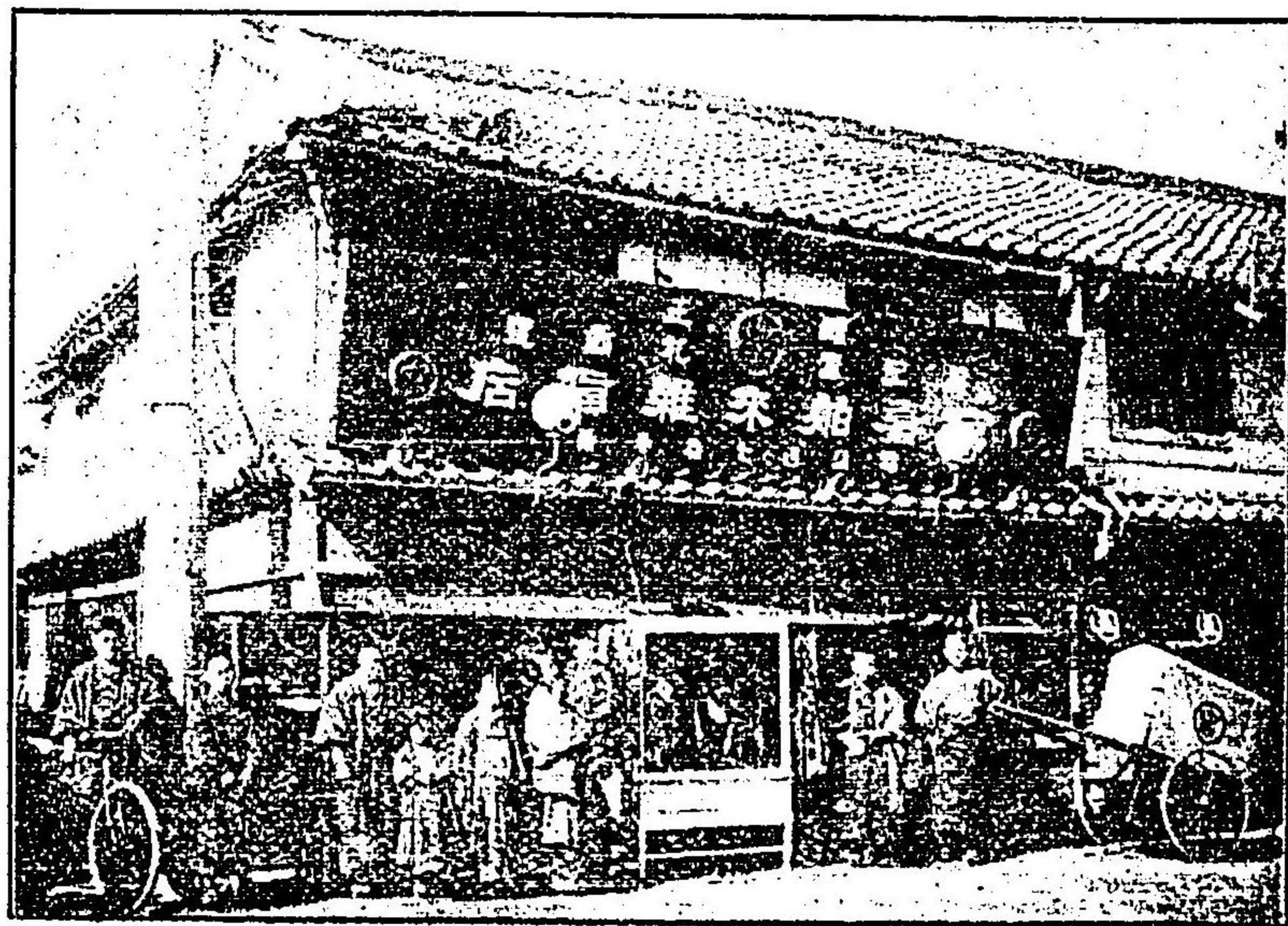
和歌山織布會社



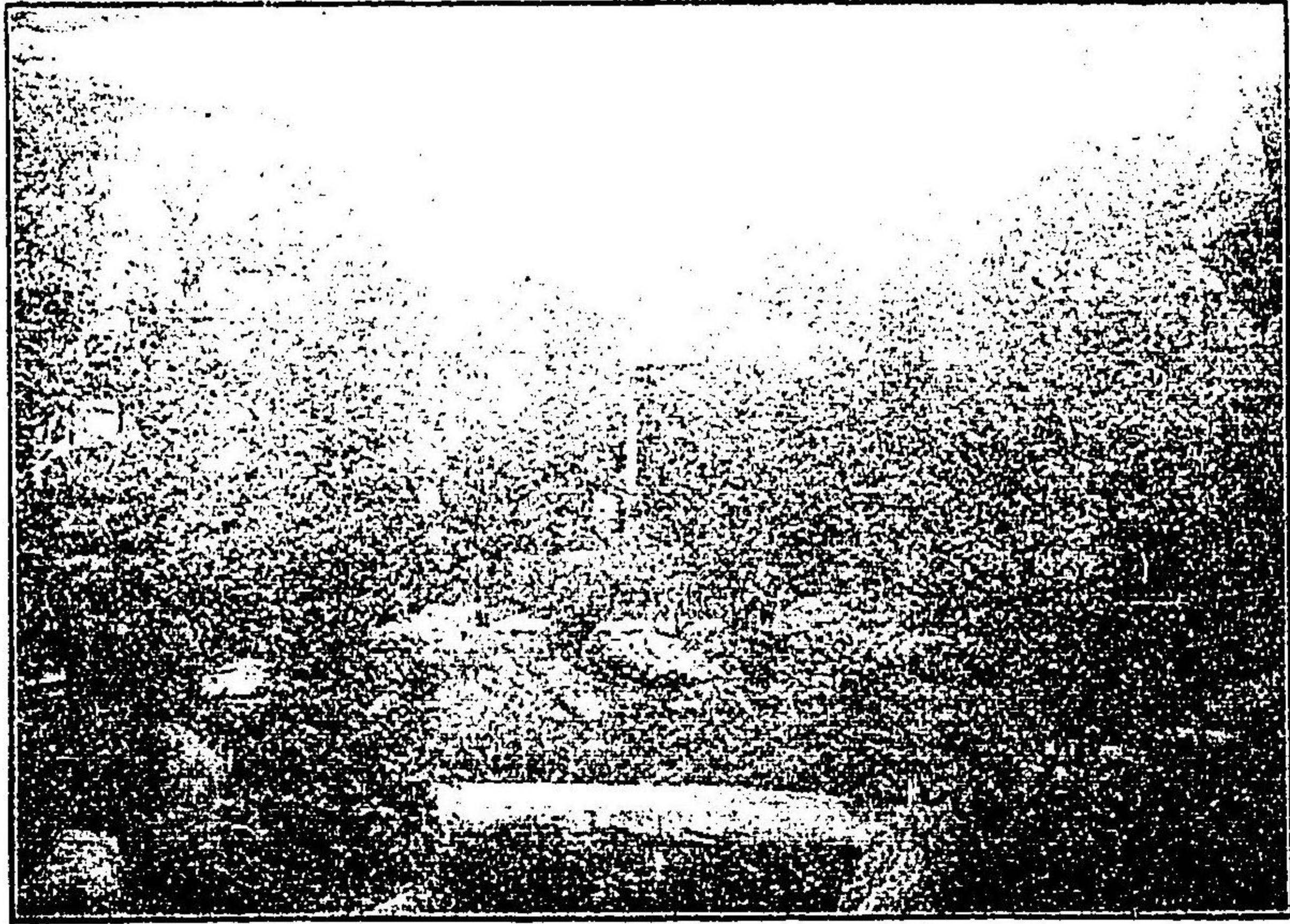
和歌山紡績會社



菊池雜貨店



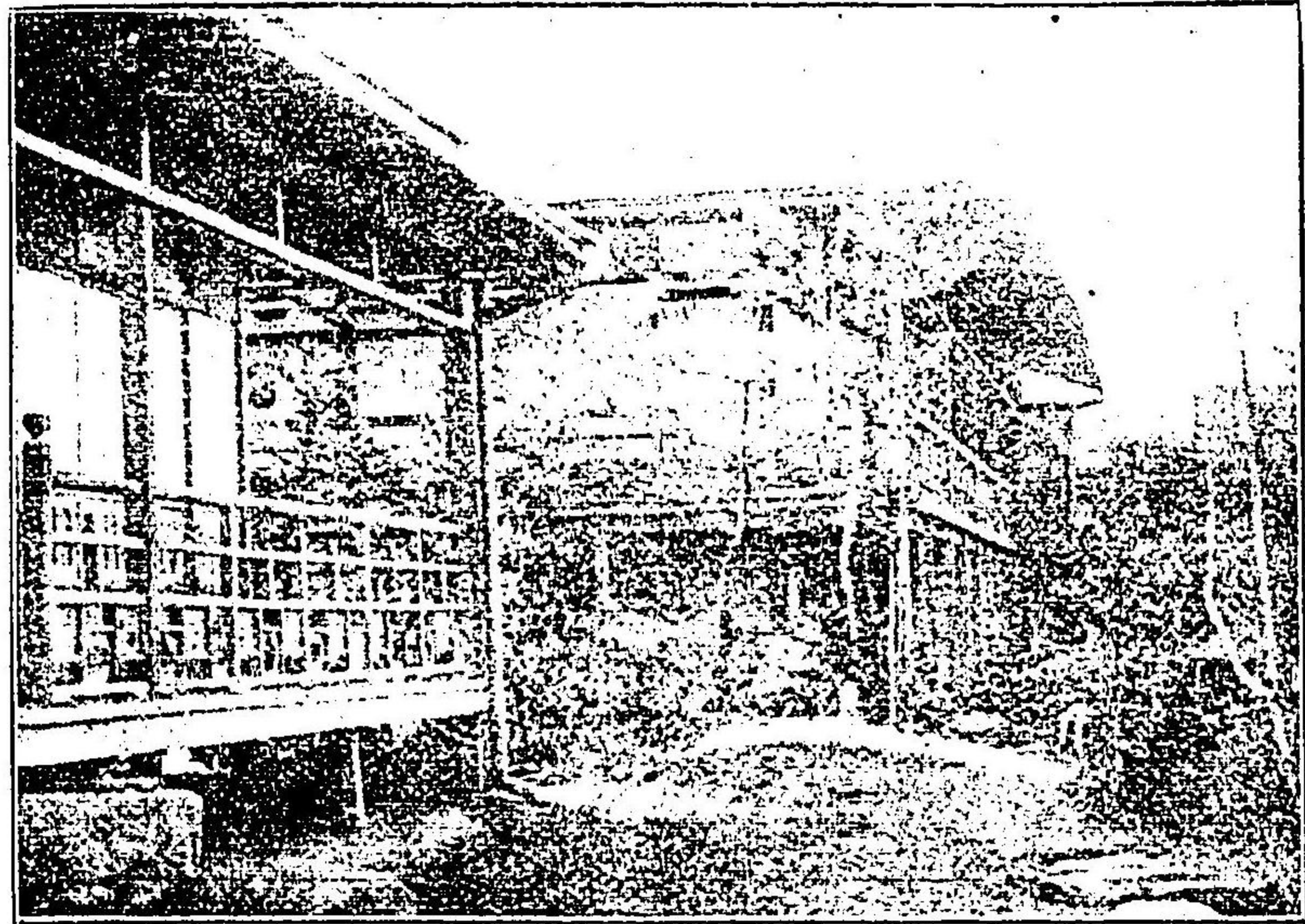
本宮嘉本店 本町二丁目



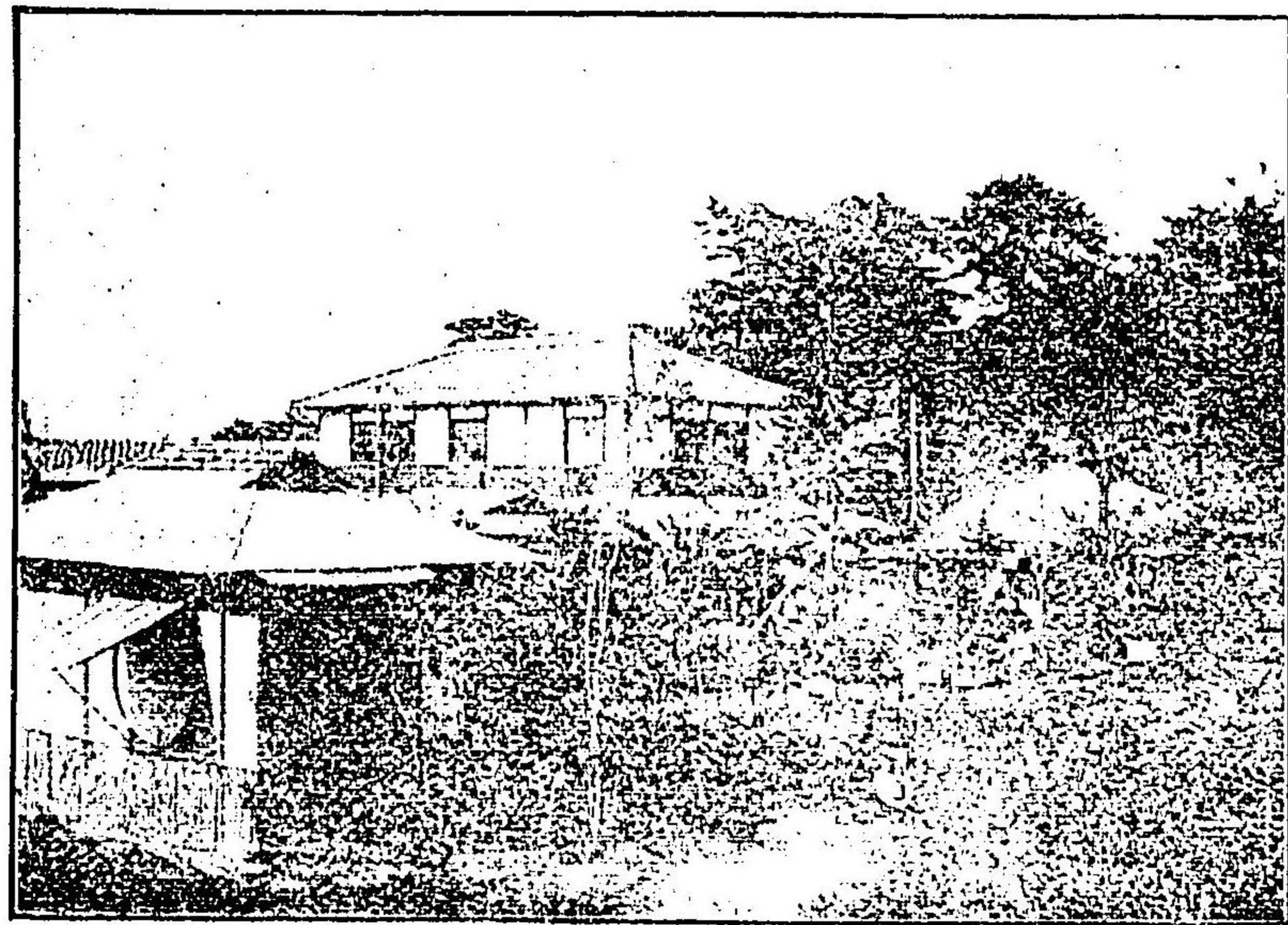
(前庭) 庵月風 廓番



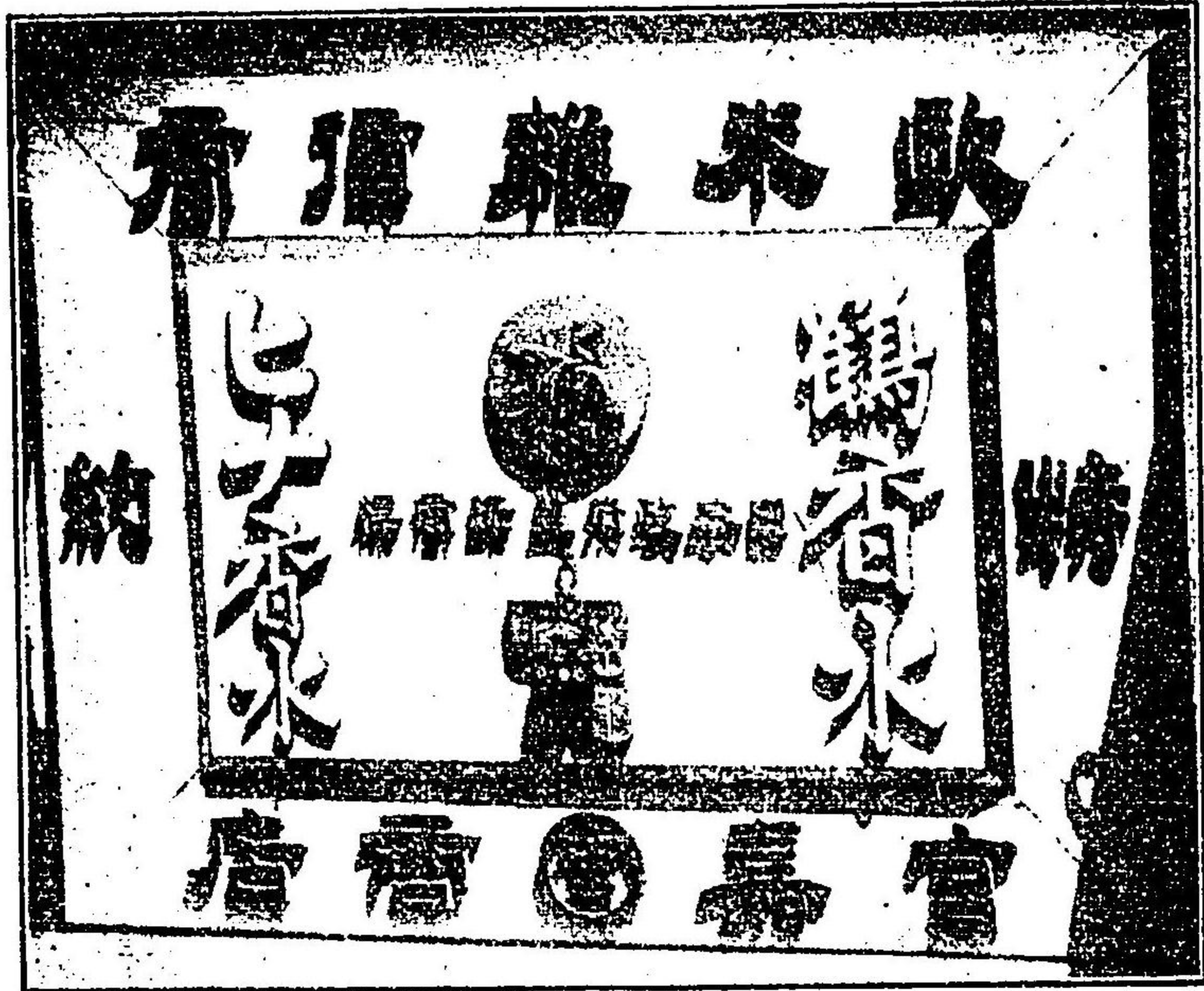
屋邊 盧 浦歌和



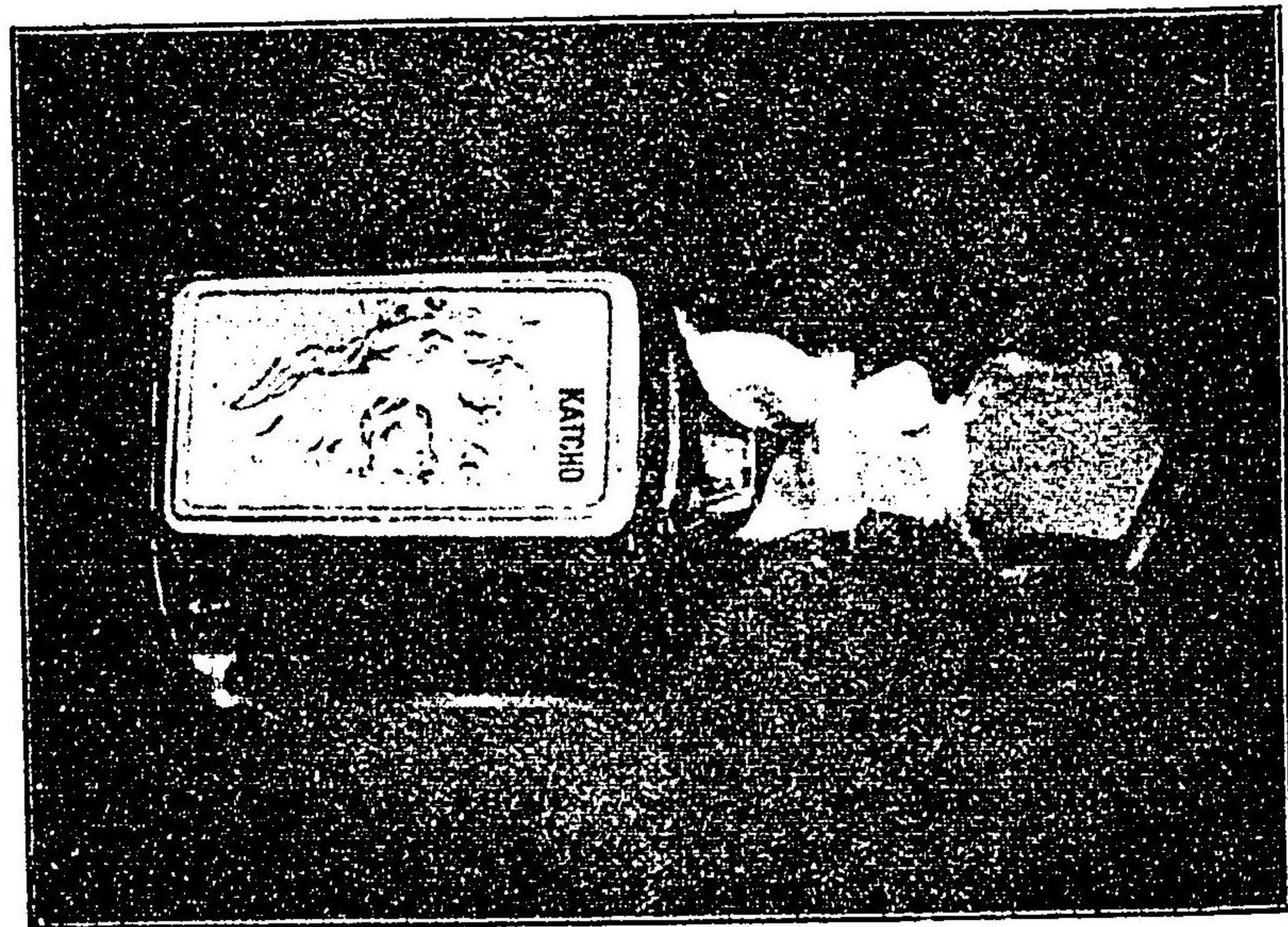
部樂俱山歌和



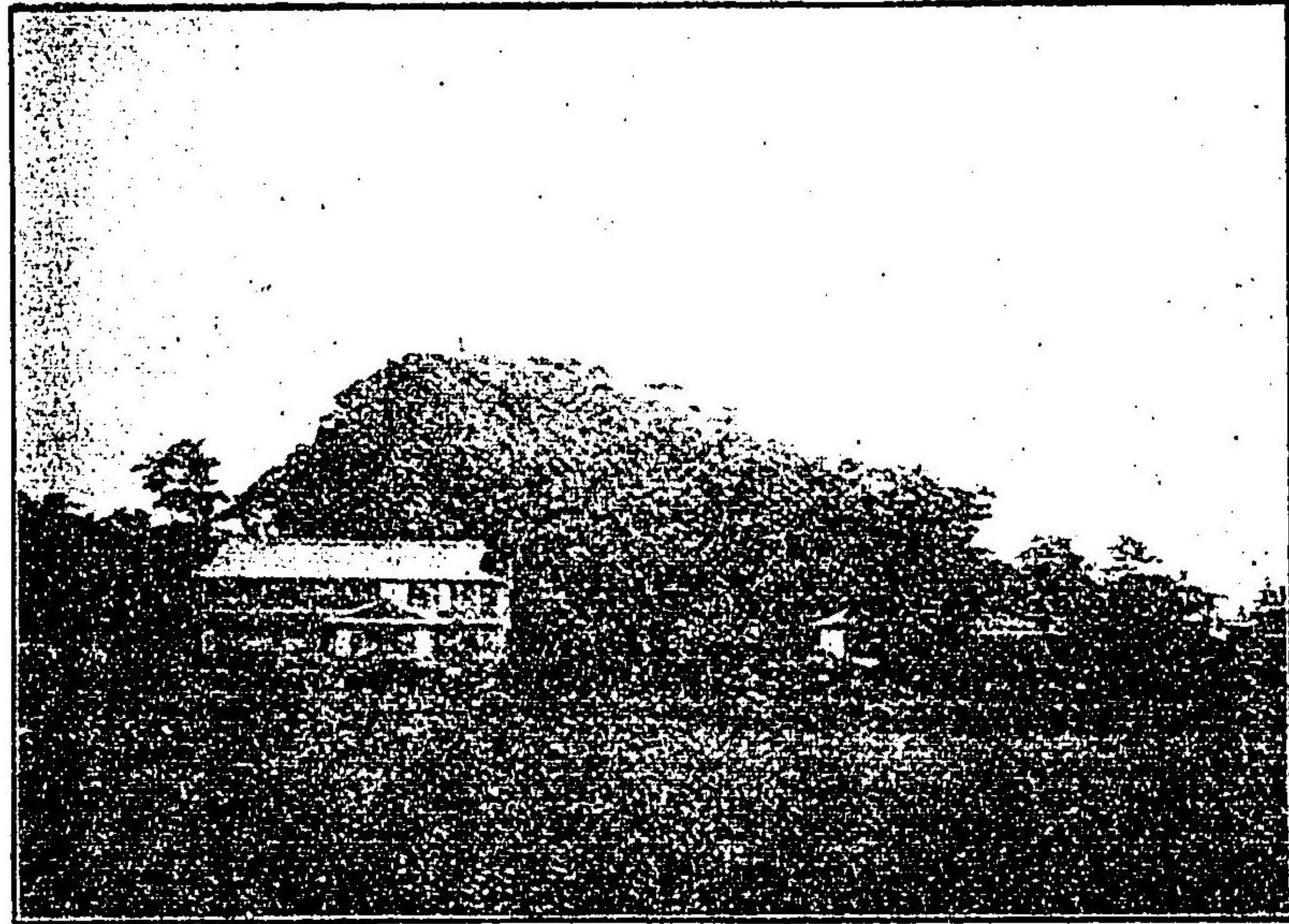
園 虎伏 芝の扇



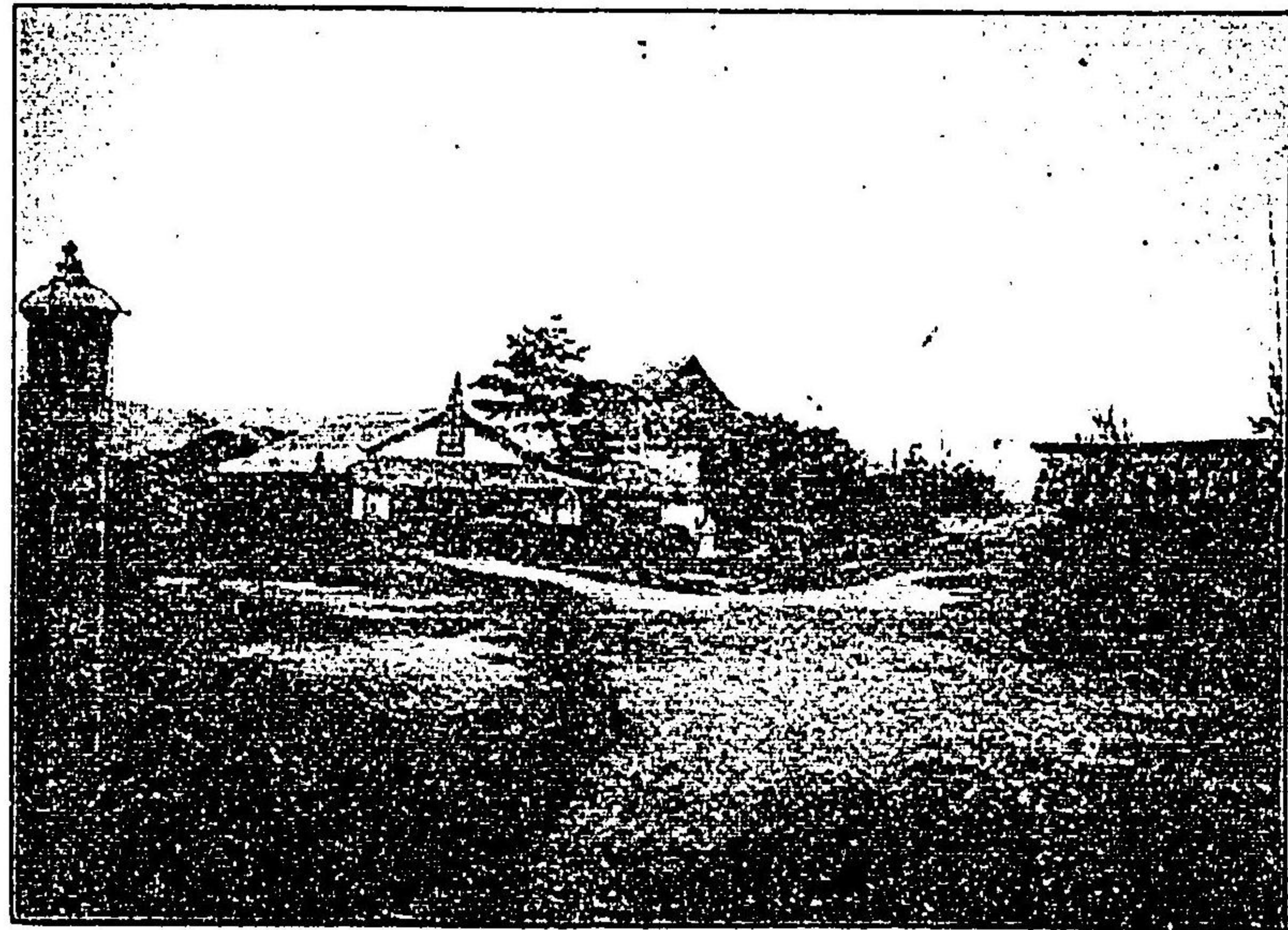
水香ナヒヒ香水ノ崎大 阪大



水香人天ノ店商木々佐 筋堂御町瓦阪大



樓海望 浦歌和



館浪男片 浦歌和

25-800

紀伊名所案内目次

和歌山市

和歌山の名の由来

和歌山城

招魂祭式場

岡公園

岡の宮と松生院

岡東離宮の来歴

休賀町の由来

天王の森と傾城ヶ淵

高野寺と嘉家作町

目次

魚市場と青物市	一	傳法橋	二
和歌山港	二	小野町と正字ヶ辻	三
長覺寺	三	吹上寺と光明院	四
吹上の濱	四	寺町の寺院	五
明王院と万性寺	五	兵營の設置	六
兵營の設置	六		



本書を著述するに就て援助を與へられし、縣會議員岩橋喜次郎、全島元豐太郎、伊都郡九度山郵便局長野口己之助、海草郡巽村川久保孝和、當市古田吉兵衛、那賀郡粉河町恩賀忠楠、生地茂兵衛諸氏に對し深く感謝の意を表す、

大川墨城頓首

東番両廓

二八

城址の多き海南

六八

電鐵沿線名所

二九

名士の屋敷跡

六九

辯護士住所

三一

藤白關屋址、藤白松

七〇

公証役場

三三

小南の梅、加茂の蜜柑

七一

和歌山市の旅館

三三

鹽津と冷水

七二

海草郡

和歌浦

三五

岡崎御坊と満願寺

七五

鷹の巢の奇巖

五七

木種を布き給ひし神

七六

紀三井寺

六二

矢田の傳法院

七七

名草山と名草濱

六五

籠山神社と了法寺

七七

内海灣頭の名邑

六六

誕生の井、閑居の址

七九

栗林八幡宮、得勒津宮址
幡降寺と高橋神社

八一
八二

大屋都比賣神社
大同寺と圓明寺

九八
九八

岩橋の千人塚

八三

法照寺と慈光寺

八七

那賀郡

高御前神社

八八

法然寺と九品寺

一〇一

夢妙庵寺縁起

九〇

大宮と阿闍井寺

一〇二

吉田の聖天宮

九一

根來寺と粉河寺

一〇四

梶取總持寺、榮谷行宮趾

九二

長田觀音と富士崎

一〇六

木本八幡宮

九四

光恩精舎

一〇七

松江濱と加太浦

九四

龍門山と飯盛山

一〇七

淡島神社と糸切八幡

九五

報恩講寺

九七

伊都郡

妹脊山と文覺堰	一〇九
應其寺と小田堰	一一〇
隅田八幡と落合不動	一一〇
高野麓の名所	一一一
真田庵と龍王溪	一一二
高野山	一一八
附 繁昌なる和歌山	一二二

紀伊名所案内

一市三郡名所舊蹟誌

大川 墨城 著



南海の大都會たる和歌山、及び其四周に散在するところの名所舊蹟を世に紹介し、
 觀光の客をして和歌山及び其附近に於ける風光的趣味と靈蹟的趣味とを解せしむる

は、是れ著者が年來の希望あり、今や是の希望を果し得る機會に遭遇せり、いでや
 著者が見たる和歌山及び附近の名所舊蹟を書き出さんか。

和歌山

(一) 和歌山の名の由来

……弱山は和歌山……昔の吹出の濱……

和歌山、及附近の名所舊蹟の事を記すに當り、第一着に和歌山なる地名の来由を記すの要あり、和歌山は上古今の城廓のあるところより西は悉く海中に没在したり、さればこそ神武の帝東征せられし時、海中より吹出でたりとて吹出の濱と稱せられたりとかや、其后弱山と稱へたるも、遂に和歌山と改稱するに至れり、(和歌浦も亦昔し弱浦の名ありしと同一) 最初弱山の名を得たるは、古事記に「國稚くして浮脂の如し」ごあり、即ち潮水次第に沖遠く去り其後に凝脂の如く土地を殘せり、當時地は稚くして弱かりしより、此處に弱の字を冠せしものあるべし、尙ほ和歌山は岡山を廻じて丘陵を傳ひ和歌浦に連絡せるを以

て和歌山とも稱したりといふ、何れにしても上古は弱山といひ亦弱浦と稱したりといふは殆んど一致せる説の如し。

(二) 和歌山城

……虎伏山竹垣城……五十五万石の記念物……

……築城の縁起……

神武天皇東征の御途中熊野の地に入らせられ、遂に雄の水門に上陸し名草戸畔を誅し、大和の長髓彦をも半げ給ふ、茲に於て全く賊の巢窟を撲ひ終り天下皇化に沾ひぬ、天道根命(神皇産靈命五世の皇孫、今の日前國懸神宮宮司紀家の祖先)を以て紀の國造とし給ふ、以后國造家の勢威漸く衰へ、源平時代に入り郡司莊司を置きたるより分裂割據の姿を呈し紀伊全部を統轄する者なく、兵亂相踵げり、下りて足利氏の代に至り、應永十五年義持紀伊を畠山尾張守滿家に與へらる、滿家封よ就き今の海草郡大野の地に城を築きて國內の亂を治ひ、其后尙ほ根來の宗徒跋扈甚しきより、織田内府、兵を起して討伐し、太閤秀吉

び來りて宗徒を征す、此の時に至り寺領社領及郷士の所領も悉く沒收して殆んど餘燼を留めず、禍亂此處に靜止せり、大和大納言秀長大閤の命を受け始めて吹上の峯(今の和歌山城のある所)に城廓を築く、その繩張りを爲したるは秀長の老臣桑山法印重晴あり、重晴は天正十五年より此れに住へり、是れ即ち和歌山城を築きたるの始めあり、其后慶長五年十月淺野氏紀伊の領主となり、幸長及び長晟相繼いで和歌山城に居す、元和五年に至りて南龍公(藩祖徳川頼宣)封せられて入國し、勢州と紀伊の兩國を併有したり、其高五十五万余石、葵の紋章の威勢尤も盛んありし時代なりき、弘化二年雷火の爲めに城樓炎上したるに依り、再び築造したるは今の城廓あり、樹木竹藪は城壘を擁して晝尙ほ暗く頗ぶる陰森たり、城樓に登れば紀の川は帯の如く、その源は霞の中に没し、其の末は溶々雄の湍に瀉ぐ、川の北方山岳の連れるは葛城にして、南方は長峰の山脈あり、山と川との海に趨るところ、平坦の地に突起せる此の虎伏山、山上風颯々として老松の枝を拂ひ、歴史を語り、海を隔て、阿波淡路を臨むべく、南海鐵道に属する鐵橋は長蛇の如く瀛車は時毎に孝

子の隱道に其の体を没し、官鐵紀和線は紀の川に沿ふて大和に走り、和歌の海、藤白の峯又陣中に潰れる、居然として蓋し南海の重鎮たり、廢藩置縣の後陸軍省の所轄となり更らに和歌山縣に借下げて公園とし、城廓を中心に濠を限りて和歌山公園と稱す、濠中蓮多く夏に至れば紅白の花、清香を送り、美觀心を清くす、城廓の東方平坦の地を御殿山と稱す藩主の起居せる殿のありしどころ也

不明門 從來開門せず、故に不明門といふ、明治三十九年頃開きて公園に入るの便道とす

櫻園義臣氏歌ふて曰く、

鷓鴣の空音も聞かぬ世なれども
不明の門は明けてけるかな

鶴の餌鉢 是鶴の谷(和歌山中學校裏手)にあり
仙人の硯 仙人ヶ谷又仙境山といふの奥にありといふ
扇の芝 西の丸門外にあり、今は人家建て並べり、

(三) 招魂祭式場

……古今の書籍と内外の物産……

招魂祭壇 城內東隅の廣場に設け、戦病死者の英靈を追薦す、明治十三年より岡公園の天妃山上(紀念碑前)に於て執行せしを、數年前和歌山公園内に移したるあり、

縣立物産陳列場 明治三十四年十二月廿二日開設、本館には紀伊の物産悉く網羅し盡せり加之 各府縣、及び海外の参考品をも按排し、賣店に於ける物品は即時取引し得るの便あり、縣内商工業家の出品頻りに加はり來れり、

縣立和歌山圖書館 明治四十一年四月より開館せり、目下館長として和歌山中學校長成富信敬氏兼務せり、開館日尙は淺く圖書の購入未だ充分ならず、閱覽者をして隔靴搔痒の感を懐かしむるは遺憾あり、

和歌山聯隊區司令部 城內物産陳列場の東方に設置す、現司令官は陸軍歩兵中佐末永質氏なり、

(四) 岡公園

……天妃山……紀念碑……二儒の筆蹟……
……錯落たる奇巖……

●岡公園●天妃山を擁せる地の総稱あり、明治廿七年公園と爲す、山上曾て辨財天女の祠ありしより天妃を以て山の名とす、此處も亦往昔海岸に沿ひたる地なるらし、巖層の處々に波濤の痕跡を留む、山上青銅製三角銳尖の紀念碑は屹然として立てり、是れは明治十三年藩主徳川茂承侯、縣令神山郡廉氏等發起し官民に募り得たる義金を以て佐賀熊本臺灣等の戦役に命を殞せし忠魂義魄の爲めに建設せしもの、碑銘は有栖川宮熾仁親王の御染筆なり後明治二十八年征清役の紀念碑を建つ、山上山下櫻樹あり、花時紅雲飄舞として士女の足を聚む、高からずと雖も天妃山上又以て市の三分の二を臨むに足れり、月なき夜、此處に登れば晃々たる電燈の光は市街を飾れり、岡東館は縣所有の公會場にして、千秋齋は個人所有の料亭あり、其他聽雪庵、遊月庵、天香軒は亦貸席に充てらる、悉く山下を繞りて建

築せり、遊月庵の後方山中に入れば、突兀たる巖の中央「山靜如太古、日長似少年」の二句を彫り出さる、筆者は藩儒伊藤蘭嶠先生にして、又仁井田南陽先生の筆に成る「山壽仁人徳、水清廉士風」の二句あり、地街區に接して尙は靜寂、殆んど深山の趣あり、錯落たる巖石亦奇なり、山の南麓に池あり、水淺けれども鯉魚棲めり、公園としての趣味は和歌山公園よりも勝れたりといふを得べし、
●岡公園●片岡の里●岡公園附近、岡の宮一帯の地を昔は片岡の里と稱したることは諸書の中に散見するところあり、

(五) 岡の宮と松生院

……珊瑚寺は衰へ……原見阪は名のみ……

●岡の宮●とは俗稱にして、縣社刺田比古神社あり、岡の谷にあるを以て岡の宮といひ傳へ居れり、祭神は九頭大明神なりとも亦刺田比古大神なりともいへり、然れども延喜式神名帳には刺田比古神社、本國神名帳には從四位上刺田彦神社と記しあるより考へ來れば、岡

を見る、故み原見の名を附せしものか、此の地は淺野家の臣澁谷文治郎に關する夢幻的情話あり、口碑遂に忘らるゝに至れり（紀伊名所圖繪お詳記せり）

(六) 岡東離宮の來歴

- ……宮の壇と大橋……吳五官の墓
- ……大立寺……

岡東離宮の遺址（ひがしとこやま）東紺屋町の河岸に沿へるところ、往昔聖武天皇紀伊に行幸し給ひ、離宮を此處に造營し給ふと言ふ、寛永の頃までは八幡の小祠ありしが、今は岡の宮に移し、唯だ宮の壇と稱し其の址さへも知るもの少なくなり來りぬ、

大橋（おほはし）廣瀬通り丁より橋向丁に通ずる藻屑川に架せる橋にして、京橋を除きては和歌山市橋梁中の大なるものなり、

吳五官の墓（ごんごんのむす）西田中町大立寺境内に明國福建省の歸化人吳五官信顯の墓（延寶六年午年正月廿四日と記せり）あり、信顯の住みし宅は西田中町北側中程にありしといふを以て、后

の世まで其の處を吳五官小路といふ、

廣瀬山無邊院大立寺（ひろせのやまむへんいんたいりつじ）淨土宗鎮西派に属す、本尊は惠心僧都作の阿彌陀佛、鎮西派の中市内に於ける大道場たり、

時鳥の松は大橋東詰北の川岸にあり、今尚は枝葉繁茂せり、新通二丁目にありし感應寺は今堀道村に移轉せり
宣經寺（毛革屋町）樂師寺（坊主町）は現存し、休賀が淵は南休賀町にありしといへど、今は人家軒を連ねてるの淵の名さへ知る人もなし、橋爪氏の倉庫の處即ち是なり、

(七) 休賀町の由來

- ……眞光寺の移轉……林泉寺……龍源寺
- ……法蓮寺……万精院……

休賀町（きいかまち）今は南北両町に分る、昔此處に平塚休賀といへる隠士棲めり、此の人那賀郡小倉光恩寺の開基信譽上人に歸依し、住める町に久しく祝融の災あからんことを請ふ、上人即ち木片を以て鉦の形を造りて休賀に與へ六時念佛を行せしむ、以來同町には絶へて火災あることなし、今に至るまで木鉦は町内に傳へありといふ、當時は御材木町と言ひしを休賀

隠士の名に依りて今は休賀町と改む。

光明山法泉院眞光寺 新中通四丁目にありて由緒ある眞宗興正寺末の寺院ありしが、明治

四十年に至りて、海草郡雜賀村大字宇須字打越の懸所に合併したり、

瑞龍山林泉寺 林泉寺町にあり曹洞派禪宗なり、

瑞雲山龍源禪寺(臨濟禪宗) 浄利山光臺院法蓮寺(浄土鎮西派) 及び、東嶺山万精院

鈴丸寺(古義眞言宗)とは何れも鈴丸町にあり、

(八) 天王の森と傾城ヶ淵

……駐輦の遺跡? ……牛頭天王の祠

……三辨財天女 ……五行の辻 ……

天王の森 中の島村の盡くる處にあり、往昔聖武帝紀伊行幸の砌、鳳輦を駐め給ひしより

天王の森と名づけしといふも虚あるべく、森林中牛頭天王の祠ありしを以て、斯くは名付

しといふ説眞に近し、天正の兵火に觸れて鬱葱たる樹木を焼き盡し、今は唯名のみ残り

傾城ヶ淵は地藏の辻の堤防下なりといふ、

三辨財天女 岡公園天妃山より吹上明王院境内に移したるは嚴島辨財天女にして、海草郡

盤屋村の南端甲崎に祠れる天女は竹生島辨財天、海草郡中の島村の猿田彦神社内に合祀せ

る天女の祠は江の島辨財天にして、此れを紀伊三島といふ、

五行の辻 教仙橋を渡りて東に突當りたる所中の島と紀和町、金屋町の辻あり、

(九) 高野寺と嘉家作町

……白鷺の棲家 ……朝涼の松

……鷺の森の御堂 ……

遍照山覺樹院高野寺 本町七丁目東方にあり、(古義眞言宗)本尊は弘法大師にして、大師

四十二歳の時、自ら彫みたる靈像、世に是れを厄除大師と稱し、信仰する者多く、月の二

十一日賽者陸續、廣き境内に充つ、

嘉家作町 昔は欠作りと稱し旅宿軒を並べて賑やかなりしところなりと傳ふ、今は紀念す

へき松並木に近きところ、片側町を爲せり、
 住吉神社（住吉町にあり）元和年間三木町堀詰より此處に移轉したるありといふ、
 鷺の森（本願寺別院を中心として）宇治部に亘るところ、総稱して鷺の森と言ふ、此處に昔
 柳の大木あり、白鷺群り來りて棲めりといふを以て、后世地の名を鷺の森といふ、
 朝棕神社と松（本願寺別院の北、單に鷺の森神社ともいふ）祭神大己貴命あり、命、稻羽
 （因幡）の八上媛を婚ひ給ひしたため八十神の怒りに觸れ滅び給ひしも、復活し木の國に遁れ
 來給ひたる時、恰かも天未だ明けず、物色を辨する能はずとて朝暗と名じ給ふ、後朝棕神
 社と稱し奉るといふ（社傳）、神前に盤踞する老松、枝は高く亦低く、雲を招き雨を呼ぶの
 概あり、蓋し幾百年のものあり、
 鷺の森御坊（西本願寺に屬す）鷺の森御堂といふ、此の御堂は眞宗十世顯如上人の創立に
 かゝる、以前八世蓮如上人海草郡加茂村の了賢を得度せしめ、自畫の像を與へて本尊とす
 後永正四年實如上人加茂より同郡黒江に移し、天文十九年証如上人同郡和歌の彌勒寺山

に移す、終よ永録六年二月に至り、顯如上人今の地に移す、天正八年石山戦役の事あり、
 上人大阪を去りて此の坊に住ふこと四年、本尊を奉じて洛に歸る、後信徒雜賀孫一、海草
 郡榮谷八幡祠に安置せる彌陀佛を移して本尊とす、今に此の御堂に安置する親鸞、蓮如二
 祖の影像と、九字十字の寶號及び六字の名號等は長く什寶として秘藏せり、
 鷺の森殿者踊の由來を聞くに、織田信長天正年間大阪石山寺を攻む、顯如上人と教如上人は退きて紀伊に入り、顯
 如上人は鷺の森に、教如上人は彌勒寺山にありて、信長勢に抗戦したるが、時恰かも明智光秀、信長を洛の本能寺
 に襲ひたるため、信長遂に自盡せり、此の報、鷺の森御坊に達するや、門徒の面々相喜びて踊れり、此れを后世鷺
 の森の跛踊といひしと云、

(十) 魚市と青物市

……西の店と萬町……

魚市場（萬町にあり）青物市場は西の店以東にあり、車に鮮魚を載せて和歌浦、加太、
 より集るもの、野菜等を積みて、宇治、野崎、山東、より來るもの悉く萬町と西の店に集
 る、朝々の賑ひいふばかりなく、人は肩摩し、車は激撃す、賣聲高く、殆んど鼎の沸くが

如く盛況を呈せり、

(十一) 傳法橋

……地名傳法の由來……傳法の稻荷

……水天宮……

傳法橋 湊紺屋町より市驛に通ずる橋あり、天正年間根來の僧徒、秀吉の爲めに討伐せらる、此れにより堂塔多く破却せられたるを、洛西紫野大徳寺住僧、秀吉に請ふて大傳法院の残りの堂を此處に運び、此れより大阪に積み行かんとしたるに、秀吉大に怒りて是れを差留めらる、傳法院の木材を此處に置きたりといふを以て、後世傳法と稱し、今は橋の名さへ傳法橋と命せらるゝに至れり、
傳法稻荷社 水天宮は、南海鐵道和歌山市驛の車輛停止區域の西、紀の川の堤防尖端のところであり、昔は賑かありしも、今は唯だ漁笛の聲の響くのみあり、

(十二) 和歌山港

……荒濱……青岸……燈籠堂

……野子神社……

和歌山港 一に雄の港といふ、神武帝の皇兄彦五瀬命、孔舍衛阪(大和草香嶺)の戦に痕を受け給ひ、廻りて紀伊に入り此の地に於て、最後の雄語し給しとて、雄湊と名付しと傳ふ、此の港灣は紀の川口に當れるがため、年々歳々土砂を流出し、川底を埋め港口を塞ぎ船の出入困難を極む、明治三十六年七月より、浚渫船を購入して、今に至るまで尙は姑息ながら、港口の土砂を浚渫せり、その事業の経過を記せば左の如し、(市の有志は港灣期成同盟會を設けて盡力せり)

和歌山港浚渫事業沿革及効果

和歌山港は縣下海草郡湊村所屬紀の川口に位し其輸出入貨物の重要なるものは、棉花、木材、米、建具、雜穀、石炭の類にして、其價格一ヶ年平均五百拾參萬八千七百四拾四圓を算し、潮汐干満の差七尺を有するも、往年に比し港口土砂堆積著しさを以て、是れが浚渫

の必要を認め、去る明治三十六年七月「さんど、ばんぶ式」浚渫船一艘を新造し、港口現在突堤端より沖合に直線を以て進み、漸次彎曲して西北に向ひ、水深最干潮面以下十尺に至る、長さ五百四十間、底幅廿間、最干潮面に於ける上幅を五十間とし、水深十尺を保たしむる計畫を以て浚渫事業を開始せり、而して本浚渫船は操業一時間に對し、土砂量約七坪を浚渫し、之を干潮面以下三十尺の深處に航行して投棄するに、往復四十分を要するを以て、一日十時間作業し、約四十二坪の浚渫力を有し本事業開始以來、明治四十年十月卅一日に至る期間、即ち千五百八十三日に於ける浚渫量三万二千〇四十一立坪、浚渫費貳萬四千五百九拾七圓貳拾八錢、外に船舶購入費壹萬八千圓（何れも半額）和歌山市寄附）を支出せり、右計算に依れば浚渫費一坪七拾六錢八厘弱に相當し、其の浚渫事業開始に於て水深二尺内外に過ぎずして、河水又は風波の作用に依り海底土砂の流動する事甚しく、尤も濬筋維持困難なる箇所も今や最大干潮に於て六尺内外の水深を見るに至り、既に去る三十七年以前まで滿潮時に於てすら入港するを得ず、沖合に於て貨物を

瀨取りたる西洋形帆船の如きも、現今は大抵、港内に於て荷役し得べく運賃の節減を見ることが多く、就中其積荷も比較的多量なる石炭の如きは見込高一ヶ年約九千万斤に對し凡そ貳萬圓の運賃を節減し得るあり、

以上の如き有様あるを以て、完全なる港とするには至つて困難なるは事實上、見易き道理と云ふべし、

青岸（かきづみ） 船宿のあるところ、突堤より橋までの間、今は人家十數戸、軒を並べ、後には松林鬱茂せり、

荒濱（あらいし） 遠淺の磯にして、夏時海水浴場として好適の地なり、年を逐ふて漸く多く浴客集る翠松の下、白砂の濱、貝拾ふ子、網曳く漁夫、波は灣を洗ふて緩やかに、松江の濱を右よ

小浦を左りに、淡路島を霞の中に控へ、眺望佳にして神爽かあるの地あり、昔も尙は吹上の沙干として、貝拾ひして遊びたりといふ、相當の設備せば盛なる海水浴場とあらん、

燈籠堂の趾 昔比丘あり、此處に燈籠堂を建つ、後、燈臺を置き、船舶出入の目標とす、

蛭子の社古へ、外濱の御前松にありしを湊小野町に移し、蛭子神社と稱す、伊達神社と相並べり、十日戎の日には賽者四集し、混雜名狀すべからず、さればにや年々警察官出張道路の中央に鉄線を張りて限界し、往復の道を分つ、

(十三) 小野町と卍字が辻

……海善寺……雄天神……西岸寺……

小野町は昔小野朝臣の住せしところとて、後町の名に小野を冠せりといふ、卍字が辻とは小人町と道場町の間ある四辻にして、海善寺門前を東に二町のところ、殆んど卍字形を爲せるが故に此の稱あり、海善寺山號を玉降山といふ、浄土宗西山派に属す、境内にある王船大権現社は寺傳に依れば神功皇后三韓を征伐し、凱旋し給ひし時、男の水門に御船を寄せ給ふ、然れば神后の座乗し給へる御船なればとて崇めまつり、御船旗、御熊手を當社に納め、王船大権現といふ、此の御船旗と御熊手は今高野山に秘藏せられありといふ、朝鮮の李眞榮と李梅溪の碑

石は今尚は境内にあり、

雄の天神は小野山安養寺の境内にあり、當社は天曆年間、橘直幹朝臣、西國へ左遷の身とありたるが、常に菅神を信仰したり、程なく赦免せられ歸洛の途中、菅神の靈告を奉じ男水門和出浦(和田川の末)に安置す、後今の地に移せるものなりと、安養寺は時宗に属す、此の宗派に属する寺院は縣下に甚だ少し、孤圓山淨秀院西岸寺小人町にあり浄土宗鎮西派に属す、當寺は弘治年間長谷川右衛門大夫の草創せる所にして、善賀和尚を開祖とて、什寶善導大師自筆畫像、贊は宗祖圓光大師の筆、後陽成院御念持ありしを當時の什寶となしたりといふ、

(十四) 長覺寺

……北畠具教と准后親房の發心
……天台の道場……眞宗の法燈……

長覺寺本尊春日作の彌陀佛、北畠中納言具教の開基あり、具教得道して超覺法印清光と

いふ、其先准后北畠親房、曆應二年紀伊に來り、和歌浦の北の山中に草庵を結び、世の喧
 塵を避け、自ら林鶯軒憶西と號す、故に長覺寺の山號を林鶯といひ、院號を憶西といふ、
 天台止觀の行所たり、天正八年四月十日眞宗の顯如、教如兩上人、大阪石山を退き、土橋
 氏の鶯の森別業を留る、信長追尋急あり、門徒等超覺法印に救を求め、彌勒寺山に移る、
 教如上人和義を講せんとて出づ、敵兵集り既に危く、漸く身を以て免かれ、海草那鷹の巢
 に隠る（鷹の巢の奇巖の條下を見よ）後信長弒に遭ひ、敵兵悉く都に引き歸る、兩門主は
 鶯の森に留り、天正九年の末此の長覺寺に移る、超覺法印、教如上人の説教を聞き眞宗に
 歸依し、法號を清光と改め、長覺寺を眞宗の道場とす、今や漸く衰へ來れるは慨すべし、
 什寶には赤檀の彌陀如來、北畠顯家所持の長刀あり、

(十五)

吹上寺と光明院

……夕霧伊左衛門の墓……連理松

……測候所……

天年山吹上寺は男芝丁にあり、禪宗臨濟派に属す、本尊聖觀世音ハ行基菩薩の作、始め
 當寺は淺野長晟の室、正清院御茶毘の地たる車坂に建立ありたるもの、何時の程にか今の
 ところに移りたりといふ、昔此の地を千本松と言ひしと、夕霧伊左衛門の墓は測候所西手
 小丘の下にあり、

光明院は松龍山光明院普門寺といふ、有田屋町にあり、古義眞言宗に属す、嘉家作の觀音
 を下の觀音といふに對して、光明院を上の觀音といふ、本尊聖觀世音菩薩は弘法大師の作
 厄除の觀音と稱して信者甚だ多し、名高き連理の松は光明院の境内にありしも今は枯れて
 名残だになし、

和歌山測候所は明治十二年七月創設したる所にして高燥の地に、樓を築けり、

(十六)

吹上の濱

……砂山は浪打際……吹上の白菊……

吹上の濱は今の城の西南、砂山と稱するあたりをいふ、此の地西南の風激しき時、白砂を

吹き上ぐ、故に吹上といふ、砂山と稱するところは昔の浪打際のところなるべし、今は人家軒を並べて、風砂を巻かき、昔は月の名所ありしが、多くの星霜を経て今の其の佛を留めず、吹上の濱を詠じたる和歌多し、

攝政大政大臣

法印寂信

月三すむたれかはここに紀の國やふきわけの千鳥ひとり鳴なり
久かたの鹽井をかけて沖津風ふきわけの湖は月三すやけき

吹上の白菊と稱して、昔吹上の濱邊に咲き出でたりといふ、然ればこそ歌集の中に、吹上の白菊を詠めるもの多し、今は唯だ町家も培養せるを見るのみ、蕊は黄にして瓣は白く徑二寸以上あるべし、

菅原朝臣

素性法師

秋風の吹上に立てる白菊は花かあらぬかなみのよするか
秋風の吹上のはまの白菊はなみの寄るか花のさけるか

(俗説) 仁徳帝、熊野湖畔に行幸し給ひ御船を吹上の濱に寄せらる、時恰かも新羅國より五色の菊を獻す、此處に於て白菊を此の濱邊に植させ給ふ云々、

(十七) 寺町の寺院

……寺町は名の如く……伽藍相臨む……

白雲山報恩寺 日蓮宗に属す、南龍院殿の夫人瑤林院殿寛文六年正月廿四日江戸に於て逝去と、遺骨を吹上の要行寺に納む、後二世光貞卿、母君の追福の爲め要行寺の地を收め、法華の精舎を建つ、即ち今の報恩寺是れあり、開山は日順上人、本尊は多寶佛と釋迦佛、當寺の什寶は日蓮大士消息四幅、曼荼羅大小二幅、吉宗公自筆和歌、光貞卿自筆堤婆品並に畫等あり、其他珍什甚だ多し、

善曜山蓮心寺 日蓮宗に属す、本堂は頼宣卿の造營にかゝる、

廣徳山妙法寺(日蓮宗)法性山本光寺(同宗)大寶山惠雲禪寺(禪曹洞派)照福山地震院三光寺(浄土西山派)龍門山慈容寺(禪曹洞派)増上山仙境院護念寺(浄土西山派)曹源山大泉寺(禪曹洞派)松玉山延壽院竹林寺(新義真言宗)無量光寺(浄土真西派)は相對せり、

深信山大恩寺 開基は聖譽玄恕上人にして、國王頼宣公の願命に依り、遠州横須賀撰要寺

より此寺に移住す、上人幼時鵬の難に逢ひしとき、守袋に入れありし閻浮檀金の聖觀世音の靈験によりて難を免れ、法縁熟して出家得道したるありと、故に此の靈佛を爲觀世音と稱す今所持者審かあらず、大智寺の廢寺とあるや、本尊其他の佛像佛具は悉く大恩寺に納めたりといふ、

赤十字社支部、武徳殿は何れも小松原通り、師範學校下にあり、

(十八) 明王院と万性寺

……山王社……今福の神明……梅ヶ原

……袖摺の松……

明王院 海草郡今福の西にあり、天台宗に属す、本尊藥師如來は傳教大師の作ありといふ
山王社 明王院の境内にあり、和歌山城の守護神ありといふ、
白道山万性寺 幡隨意院 淨土宗鎮西派に属す、當山開基は幡隨意上人なり、上人の墓碑は本堂の西にあり、本尊阿彌陀佛(安阿彌の作)、

今福神明社 新堀の西にあり、祭神は天照皇大神にして末社甚だ多し、

梅ヶ原 城代屋敷の邊なるべしといふ、昔梅樹を多く栽ありたるより此の名を附したるからんと、

袖摺の松 今福神明社鳥居前にある老松あり、土地の人は是れを業平袖摺の松といふ、數百歳を経たるものと思はる、

西要寺 淨土宗鎮西派に属する西要寺は尾崎町にあり、寺内清酒にして佛殿巍然たり、

(十九) 兵營の設置

……縣會の建議……地所の買収……

明治三十九年の和歌山縣會に於て、兵營設置の建議案出づ、越へて四十年市價を起して、和歌山市金龍寺町以南、海草郡湊村の耕地十數万町歩を買収し遂に兵營を設置することとある、明治四十二年三月中旬六十一聯隊第卅二旅團司令部を濱寺より此處に移轉す、されば市民は擧つて歡迎の赤誠を表したりき、今や兵營を此處に置かれ武夫訓練の場と化しぬ

是れより以後和歌山の繁昌は随ふて南漸すべしといふも不可あけん、

(二〇) 東番兩廓

……川岸の柳……紫雲英の花……

……老妓と雛妓……和歌山美人の巢窟……

●●市ちちの中央ちゆうちゆうに架かせる京橋きやうきやうを渡わたりて南みなみし、更さららに郵便局ゆうびんきょくに附つき東向とうかうすれば番廓ばんかくなり、此

の地は、明治六年五月内川堤うちがはづつみを開ひらきて妓樓きりうを置おきたりといふ、

●●番廓ばんかくを去さり三木橋みやまばし、鍛冶橋かぢばしを渡わたり、林泉寺町りんせんじまちを経て東とうに進すすめば上新地しんあちにして、數十

歩また北きたすれば下新地したあちなり、此の上下新地じやうじゆうしんちを合あして東廓とうかくと稱なづす、

されば柳暗りゆうあんとは春はるの内川柳うちがわななの煙けむる意味いみにして、花明くわめいといふ春はるの吉田田圃きちだんぼの紫雲英むらさきうばなの花はなの咲

き出いでたる意味いみかりけらし、兩廓りうかく少數すうすうの老妓らうきと雛妓ひなき、一は姥櫻うばざくらの殘のこんの香かほりを止め、一は

芳蕾ほうらい將まさに綻はなびんする趣おもむきあり、其その中間ちゆうかんある中詰ちゆうつめ藝妓げいきは其數そのかず多く紅花粉陣こうかふんじんの觀くわんあるものと

いふべし、老おいたると弱よわさを問とはず、兩廓りうかく藝妓げいきの總數そうすうは正ただに壹百六十いちひゃくろくじゅう余名めい確たしかに兩廓りうかくは和

歌山美人の巢窟といふを得べし、

市内遊賞入境

花 漣

河岸露柳

柳から垂る、小舟の葉かな

水神夕櫻

川端や櫻と水に暮れゆとる

東廓流螢

闇の夜や螢は人目忍ばれず

京橋涼月

月涼し團扇取らる、橋の上

雄湊晴嵐

出る真帆に入る片帆あり香風

城濠荷花

朝月の消ひ込む蓮の最中かな

宇治出韻

出鳴くや月も届かぬ草のやみ

公園積雪

埋れぬは池ばかりなり雪の園

電鐵沿線名所

(官衙、公署、學校等)

和歌山水力電氣株式會社の經營にかゝる電氣軌道は明治四十二年二月上旬、南海鐵道和歌山市驛より海草郡和歌浦(壹里半)に通ず、今便宜のため沿線名所と舊蹟を記し置く、

和歌山停留所 梶取總持寺、加大要塞隊、淡島神社、松江濱、木本八幡宮、
 山吹町停留所 高野寺、下の觀音、鷲の森御堂、朝棕神社と松、
 本町三丁目停留所 元寺町、ぶらくり町、築地、(市中繁華の地)、吉田聖天宮、住吉神社
 和歌山銀行、紀陽貯蓄銀行、三井銀行支店、
 京橋停留所 和歌山郵便局、四十三銀行、和歌山警察署、和歌山稅務署、番廓、東廓、
 一の橋停留所 和歌山、岡両公園、物産陳列場、市役所、地方(區)裁判所、米株取引所、秋
 月日前宮、夢妙庵寺、和歌山中學校、和歌山水力電氣株式會社、農林學校、
 縣廳前停留所 和歌山縣廳、鶴の谷、吹上寺、測候所、雄天神(安養寺内)、小野町姪子神
 社、市立商業學校、農工銀行
 扇之芝停留所 岡山、師範學校、武德殿、赤十字社支部、高等女學校、雄ノ湊、荒木内科
 産婦人科院(東長町三)へ三丁、
 兵營前停留所 歩兵第六十一聯隊、第三十二旅團司令部、憲兵分隊、明王院、今福神明社

德義中學校

車庫前停留所 高松寺、電車部事務所
 高松停留所 根上り松、高松茶屋、
 秋葉山停留所 秋葉大權現、愛宕大權現、狛口石、龜遊巖、五百羅漢寺、顯如上人舊蹟、
 彌勒寺山岩址、縣立農事試驗場、
 和歌浦口停留所 片葉蓋、養珠寺、妙見堂、雜賀城址、鶴立島址、
 和歌浦停留所 玉津島、片男浪、望海樓址、(玉津島ノ上隴山)、不老橋、總竈神社、妹背
 山(多寶塔、三斷橋、觀海閣)、鶴駕飛降碑、和歌の宮(權現社)、南龍神社、天滿宮、和
 歌出島、和歌の松原、御手洗池、雲蓋院、法福寺、和歌浦郵便局、和歌浦町役場、紀
 三井寺、布引の松、甲崎、キヌエ渡、等

辯護士住所

森 懋氏 七番丁(一の橋前)

阪本彌一郎氏 屋形町貳丁目(杉原佐一郎氏と合同事務所を設く)

杉原佐一郎氏 廣瀬中ノ丁

川口龍太郎氏 雜賀屋町東之丁

高松元楠氏 中ノ店中ノ丁

吉本久隆氏 廣瀬通り丁貳丁目

山本佐一郎氏 東紺屋町(八軒町)

橋由太郎氏 三木町中ノ丁

津田藤麿氏 三番丁

天野得三氏 本町一丁目(京橋北詰東)

安藤勇氏 屋町形二丁目

海野勳氏 湊通り丁南一丁

西川之捷氏 海草郡岡町村字盤道

公証役場

芳賀毅氏 廣瀬通り丁二丁目

粟飯原榮氏 三番丁

和歌山市の旅館

風月庵 (會席料理) 十一番丁

和歌山俱樂部 (電話二二七番) 九番丁

有田屋 (會席料理) 十三番丁

富士屋 (電話二六五番) 本町三丁目

小早川 (電話四七三番) 本町一丁目

牧野本家 (電話二一五番) 福町

吉野屋 (電話三二三番) 京橋南詰

中村屋 (電話三二三番) 表橋北詰一丁西北

介では甚だ感興が薄いから、名所の興廢變遷を記して行くことゝしやう。

▲高松寺 電鐵車庫前にある寺はそれである、境域廣くはさいが、寶篋印塔は高く街道に臨み、往時を偲ぶことが出来る、

▲根上松 高松寺から高松茶屋までの間、道の左手にあるのが根上松といふのである、龍蛇の蟠つて居るやうに、或は高く、或は低く、幾本の松があつたさうである、けれど今では一株の松だけで、危ふく此の名所を維持して居る、茶店が一軒、その右手に建られてゐる（電鐵高松停留所の傍にある）

常盤なる松は久しく聞なへに千代は根毎に現はれにけり

源 安 足

▲高松茶屋 根上松から少し進むと、道の両側に四五軒の家がある、それが昔の高松茶屋の名残である、今では電鐵の道敷とあつて、家を引ッ込まされて、止むらく廢業することとあつたが、左手に新たな茶屋が出来て、名物松露餅を賣いで居る、

▲親口石 此れは高松茶屋から先きに行くと、松並木の中程、道の左方の叢の中に埋められて居る、石上の題字は李梅溪の筆であるとのこと、人車や電車に乗つて驅けて行くと、全く見落される、少しく名所らしくしたいものである、（電鐵秋葉山停留所から少し引き返へるねばあらぬ）

▲龜遊岩 此れは羅漢寺の手前、秋葉山の下にある巖の名である、形ばかりの竹の垣を繞らし、龜遊岩と彫つた標石を建ててゐる、

▲愛宕大権現 今の愛宕権現は山の麓にある、それは明治二年ころまでは、矢張圓珠院の上の山嶺にあつたが、大林區署の管轄となつて、さしも莊嚴であつた宮殿も取り押はれて、餘儀なく圓珠院の境内に引き移つたといふことである、圓珠院は昔から愛宕権現の守役の坊であつた、祭日は六月二十四日で、昔は千日參と言つて近郷近在から參詣者が多く花角力もあつて、甚だ賑やかであつたといふことである、が今では頗ぶる寂寥たる有様とあつた、権現社殿のあつた山の上に登つて瞰ると、和歌の海の半面、和歌山城、四國の一端が眼に入る景色の佳いところである、

▲御坊山顯如上人舊蹟　これは愛宕山の峯嶺に、南に當るところ、彌勒寺山と言つて、昔は岩を設け信長勢を拒いだといふことで、有名を雜賀合戦の場所である、山の上に佛殿があつた、それは永祿六年に鷲の森に移したといふことである、今では千疊敷といふ名が残つて居る、山は甚だ高く海と山とが眼に集る、和歌山城も真下に見ゆる、

▲秋葉大權現　羅漢寺の裏山にあるのがそれである、權現社は其頂上で、花崗石の礎に鎮座して居る、青い苔は境内を封して静かである、老木の楓が十四五株、紅葉の名所で、春と秋とは人の足が絶ない、

▲五百羅漢寺　禪宗曹洞派に属する寺で、山號は護國山といふ、釋迦佛を中心にして、五百の羅漢木像が前後左右に並んで居る、境内は廣く、物寂て居る、

▲鶴立島　此れは既に廢滅して畑とあつて居る、和歌浦名所の隨一であつたもの、今では縣立農事試験場が設置せられてある、

▲蘆邊寺　鶴立島の嶺に、和歌の入江に近いところよ建られてあつたが、今では和歌山市

片岡町に移して昔の儘に松生院と言つて居る、詳しく言へば向陽山松生院芦邊寺といふのである、昔の芦邊寺の址は矢張り畑にあつた、

▲宗祇の瀬　今のキヌメの渡のことである、それを何故に宗祇の瀬といふかと聞くに、昔宗祇法師が海草郡吉原に閑居えて、其處から玉津島明神に百日詣をした時、此の渡場を通行したので、宗祇の瀬といふ名が残つたのである、世俗は禪の渡とも言つて居る、

▲片葉の蘆　今ではそれかと知る人が少くなつた、總体和歌浦の蘆は片葉である、それは潮風に吹き煽られるので自然に片葉にある、別に不思議ではないが、是を宗教上かゝる靈蹟として斯言つて居る、教如上人が彌勒寺山の岩を忍び出たが、敵勢に追ッ立られ和歌の入口(和中金助氏邸前)にまで來た、ところで危難が上人の身に刻々に迫つて來る、止を得ず其處に生い茂つてある蘆原の中に身を潜めた、すると情なき蘆の葉が上人の身を包んだ、それで難を免れて雜賀崎の鷹の巢に落ち延たといふので、その時から片葉にあつたと言ひ傳へて來たのだ、

▲蘆邊浦 和歌の入江から蘆邊屋附近の處を總稱して、蘆邊浦と言つて居る、此の邊の昔全体に蘆原であつたからである、

▲名物蘆柄團扇 昔、和歌の浦人が蘆の莖を柄にして製したものだといふ、今でハ全く和歌山で製造して居る、

▲和歌の入江 和歌の入口から布引浦の此方、紀三井寺前、蘆邊浦を包む廣い區域の總稱である、

▲妙見堂 昔の和歌浦名所の中の妙見堂は「峯に欽つ」と言つて、今の養珠寺の裏山にあつたものだが、何時の頃からか養珠寺境内へ移されて、今でもありし昔の紀念のために石の鳥居が山の上へ残されてある、近い中に元の山の上に移さうと有志者が意氣込んで居る

▲養珠寺 徳川時代には堂塔多く結構壯麗であつたさうだ、それが今では殆んど庵寺のやうに縮られて見る影も無い有様である、當寺の山號は妹背山と言つて、承應三年に建立したもので、堂坊は駿州の御館養珠院殿の御坐御殿であつた、養珠院殿といふ方は頼宣公の

母君で三寶に歸依深く生前佛堂建立の心願があつた、けれどその素懷を遂げられず逝去せられたので、御坐御殿を此の和歌浦に移し佛殿としたが、世の變遷を免れることが出来ずいと見えて、今日の養珠寺となつたのである、(昔の圖面が同寺にある)

▲望海樓の遺址 これは玉津島神社の裏手麓山亦奠供山の巔にある、その昔 聖武、稱徳兩帝が此處に建築してあつた望海樓に行啓せられ、歌舞雜伎を饗はしたといふことである、猶ほ聖武帝は羽の浦の風光を此處から御覽遊ばし明光浦の名を賜はつたと承はる、

今は唯だ一片の硯を留めてあるばかり、昔の面影の尋ねべき名残も無いことになつて居る、シカシ此處は和歌浦の全景を雙眸の中に集めるに於て尤も適した處である、料理兼旅館、望海樓は此の山の下にある、三層樓を新に建築してある、球戯室もある、

▲芦邊茶屋 今の芦邊屋のあるところが即ち昔の芦邊茶屋のあつた處で、領主の休茶屋であつた、今では芦邊屋と言つて料理屋兼旅館となつて居る、さかく盛んである、同じとさにあつた朝日屋といふ茶屋は芦邊別荘のあるところがそれである、

▲行春の句碑 芦邊屋の北の方に名高い芭蕉翁の行春の句碑がある、曰く、

行く春に和歌の浦にて追付たり

▲三斷橋 芦邊屋の前、妹背に行くところの石橋である、一見すると三つよまつてあることが解る、これは支那の杭州西湖の六橋の面影であるとのこと、これと不老橋と相對照して見ると、善い一對である、

▲下り松 此の橋を渡り右に廻ると、直ぐ頭の上に手を差し延して居るやうな松の梢が人の眼に着く、これこそ下り松である、が木造の所謂「三に下り松」ではないとのこと、

▲觀海閣 これは妹背の多寶塔の下、海に突出した建物である、古い建築で木理が高く、何處となく古色を帯びて居る、此處は雪、亦は花の紀三井寺を望むに尤も好い場所である殊に花の時などは頗ぶる美觀である、

▲妹背の多寶塔 この妹背山といふのは昔からの名ではない、最初は郭公山と言つた、それは郭公の聲を聞くに善い山であるといふ意味から附けたものらしい、五月の頃、山上月

まさき夜、吟想湧き來るとき、帛を裂く郭公のその一聲を聞くときは、如何に趣味が深いだらうか、其後辨財天女を此の山上に祠つてあつたところから亦辨天島と名附けられた（この辨財天女の祠は今蛸の宮に合祀された）昔寶塔建立の砌、竹本丹後といふ人が、此の海中で奇石を得た、シカモ二ツ、それを女夫岩と名づけ、その雄石に東照神君の法號を書いて、塔中に納め、雌石に題目の梵語「曩謨薩達磨芬陀利伽蘇多觀」と彫んで山下に建た、それは經王堂と言つて三斷橋を妹背に渡ると、直ぐ眼の前にある小祠の中の碑石がそれである、けれど、今は「曩謨薩達磨」でばかりで以下は磨滅して居る、此の頃まで此處に鹿を飼ふて居つた、で此の因縁で郭公山を妹背山に改稱したといふことだ、此のあたりから出島へかけて、昔海中にあつたので、浪に巖が洗はれて、宛然伽羅の木理のやうに見ゆる、それで今の芦邊屋の裏山を伽羅山といふのである、それから多寶塔の石の玉垣、これは一枚の石を彫り抜いたもので、正面右手は三枚左は四枚の石で出來て居る、土地の人でもチヨト氣が着かぬ、多寶塔は此の妹背山の下に東北に向つて建立されて居る、本尊は釋迦牟尼

尼伊と阿難、迦葉の二尊者である、加藤清正が、朝鮮征伐のときに持つて廻つた佛像である、それを東照神君三十三回の追福のため、小石に法華題目を書いて、其數二十一萬、それを寶塔の下深く廻つて收めてあるとのこと、此の多寶塔の造營した時代は慶安二年で、開山は日講僧都である、亦藩祖顯宣公の夫人瑤林院殿の遺骨を納めてあるともいふことである、ここにも芦邊屋の別荘もあり、球戯室もある、鶴も伺つて居る、

▲鶴駕飛降碑 多寶塔の下、少し南の方にある碑がそれである、これは新たに建られたもので、去る明治三十六年十月のこと畏くも 皇太子殿下には和歌山に行啓あらせられ、妹背山下の別荘に駕を駐めさせられた、光榮限りなく、明光浦はますます異彩を加へられた次第で、縣民の歡喜譬ふるに物はあひ、そこで芦邊屋主人數清一郎老人は、長き御蹟を紀念し奉るため、此の碑を建たものである、篆額に當時の縣知事伯爵清接家敦氏で、文は碩儒倉田績翁の謹撰したものである、

鶴駕飛降碑

明治三十六年十月 皇太子行啓南海七日到和歌山縣九日御懸巡溪路由長港驟登還而憩蘆邊簡前蓋依古之聖蹟也謹按
聖武天皇神龜元年冬十月辛紀伊甲午到玉津島頓宮詔曰登山望海此間最好萬葉集載山部赤人詠蘆邊鶴鳴者即此當大
政維新百事復古以主器之尊執軍務官職吾邦崇武之風可以觀矣簡主數清一即立石於庭上記其歲月囑余爲之銘

銘曰

浦稱明光 神靈所在 聖蹟千歲 儼然不改 皇德遠被 縣治和悽 鶴駕飛降 地生華彩 英俊輩出 此其有約

といふのである、實に結構な紀念碑ではないか、

▲興洗岩 これは不老橋の南手の入江の中にあるのが、それである、玉津島明神の神輿を洗ふたといふことである、

▲興の窟 其の上の佐羅山にあるのが興の窟といふのである、これは昔玉津島明神の祭禮の時に神輿を此處に昇ぎ込んだ、所謂御旅の跡である、

▲鹽竈神社 は此の窟の中にある、

▲龜岩 は觀海閣の前、左手の海の中に突き出ている岩で、龜の形に似て居るといふので此の名稱を附けたものであらう、干潮のときには浮いて出る、満潮のときには全く姿を没

して仕舞ふ、

▲不老橋 芦邊屋から、片男浪の濱邊に行くところに架け渡たされてある石橋である、これの一名太鼓橋とも言ふさうだ、

▲玉津島神社 は朧山、即ち望海樓碑のある山の麓に鎮座します、此の神は和歌の靈に衣通姫を配祀してあるのだといふ、衣通姫は和歌三神の一柱である、昔は三月九日、二の卯の日に、禁裏御所から勅使が立つて祭典を行はれたもので、それは古式の祭典であつたといふことである、今でも祭典は行はれて居るが、昔の盛式は終に見られぬやうなつた衣通姫の御歌に、

立ち歸りまたも此の世にあとたれてうの名うれしきわかのうらなみ

この玉津島に就て和歌が多い、それで著者は和歌浦を稱して、文學的であるといふのである、玉津島は昔玉出島といつた、その証據の歌がある、

をばつかな立ち寄る涙のなかりせば玉出るしまといかぞ知らまし

(伴 従)

今の玉津島は、此の玉出島の轉訛したものであるともいふ、後西院天皇勅使を給ふた時(寛文四年三月九日)の御製に、

おもふらよ霞ははれて玉津島ひかりにわたる和歌のうらなみ

玉津島神社々殿の頽廢したのは維新後のことで、更らに神殿を再營したのである、昔此の浦邊から玉か出たと言ひ傳へられて居る、

むかし今ひるへる玉もかすくに光りなうふるわかのうらなみ

といふ歌もある、これで玉津島が、もと玉出島といつた因縁が解るであらう、

▲御旅所 東照権現社の祭典(和歌祭)のときに、神輿が此處に渡御する、片男浪の南、不老橋を渡つた先に鳥居がある、それか御旅所である、

▲和歌祭 東照宮の祭式を和歌祭と稱して居る、此の祭式は日本に數の少ないものである三十九年までは四月十七日(舊曆)であつたが、それから後は五月十七日に改められた、此の祭典は封建時代の儀式である、大体は雜賀廂の形を繼だものである、名高い百面の出る

のが此の祭禮だが、雜賀踊といふのは眞宗の顯如、教如両上人が織田信長に對抗して和歌
 附近で大合戦をした（彌勒寺山の岩は顯如、教如両上人が楯籠つたところである）其の時
 に顯如上人は戦利なく鷲の森に逃げられ、教如上人は雜賀崎の鷹の巢の窟に遁れた、その
 時小雜賀村に雜賀孫一といふ人が上人に味方して信長勢を打ち退けた、そこで佛法に楯を
 突く悪魔を打ち拂ふたといふので、戦雲が収まつた後に踊つたものである、これが雜賀踊
 の原因、それを和歌祭に組み入れたので百面の中に鬼面を被むつたのがある、それは信長
 勢に擬したもので、佛敵たる鬼に向つて、法螺、太鼓、鉦の聲に連れて責る形にあつて居
 る、するご鬼の面を被つた者が謝罪をするといふ体で、戦争の名残を此處に止めたもので
 ある、総体和歌附近は此の戦争に就ての古蹟が多いやうである、で雜賀村に属する御坊山
 に今も現に岩跡のあるのを以て証明して居る、そればかりでは無い玉津島にも甲崎にも
 雜賀にも亦岩のあつたといふことである、その紀念は今にも和歌祭の中に残つて居るので
 ある、戦争と宗教の紀念も少くはない、年々此の祭禮の日よあると、遠きは他府縣、近き

は近郷近在、數万の男女で、山紫水明の和歌の浦は黄塵万丈の巷と化するのである、此の
 祭禮は日本で有名なものであるといふことは知ぬものはあるまい、尤も此の時には御手洗
 池の畔から出島、濱の並木の間、御旅所の此方まで棧敷を連ねて賑やつて居る、（和歌祭に
 百面の外、母衣、サ、ヲ磨り、薙刀振、棒振、連尺、餅搗踊等がある尚片男涙に船舞もあ
 る）

▲和歌出島 は和歌浦の南西の端で、少し行くと田の浦に續いて居る、ここは奇巖突兀、
 急に深いけれど、海水浴に善い、此處に米榮の別荘がある、料理と旅館とを兼ねて居る、
 魚市場は亦此處にある、漁船の出入はさか／＼頻繁なものだ、

▲御手洗池 これは前に記した如く権現社の下にある池で、その水は湖の満干のために水
 満か違つて来る、

▲望海山大相院 天台宗に属して、大相院山の下に大きな屋根を見せて居る、法福寺も其
 附近にある、今大相院は雲蓋院と名が改つて居る、大相院山は麓山よりも少し高く、亦嶮

しい山である、

▲和歌の松原 これはその昔天満宮の下から玉津島あたりまで續いてあつたのだが、

では御手洗池畔に紀念の老松數十株を残して居るばかり、

▲東照権現社 今の和歌浦小學校の上、數百級の礎を登つたところ、輪奐の美、いふばかり

りなく、莊嚴なものである、これは元和六年に頼宣公の建立したものである、今は縣社に

あつて居る、祭禮は五月十七日で、即ち和歌祭はそれだ、

▲南龍神社 権現社と天満宮との間で、藩祖頼宣公を祀て居る、明治九年の創建で、矢張

縣社で祭日は四月十五日、

▲天満宮 南龍社の左手に在る、縁起によると、菅公が太宰府に謫された時、船をこの浦

に寄せたので、後に橋の直幹が造營したものだと、その後天正正年間に火災に罹つたのを、

國主淺野紀伊守が再建したといふことである、この三神社の前に立つて下瞰すと、磯馴松

にかゝる片男浪、沖の島山は遠く、和歌の半面は近く、なか／＼眺望が善い、

▲片男浪 これは萬葉集にある、いは満ち來ればカタオナミといふのとは違ふ、この濱は

潮流の都合で、打ち寄する浪の、まだ引かぬ間に又もや打ち附けて來る、男浪ばかりで

あるから、それで片男浪と言ひならはして來たのである、この海は遠淺で海水浴場として

は尤も適當のところである、ここにある料理屋兼旅館は片男浪館といふのである、松吹く

風と、浪の音とは、何れも人の心の塵を拂ひ、幾曲折の長汀曲浦、松は青く、砂は白く、

昔は石に蒸し、眼に入るものは、すべて趣味のあるものばかり、

▲昔の瀉子無 ここでチヨト昔の瀉子無のことを書いて置く必要がある、

わかのうちらしはみちくれはかたをなみわしへをさしてたつなきわたる

といふ和歌の中のカタオナミといふのは和歌の入江のことで、芦邊屋の前のところ、其處

が満潮あると、于瀉がなくなる、それで餌を獲つて居る田鶴が、蘆邊、蘆の生むて居る

洲の方に飛んで行くといふ、叙景の歌である、であるから昔と今のカタオナミの場所がス

ツキリ違つて居る、

▲妹背海苔 昔の名である、今は和歌海苔といふ総体の名詞をまつて居る、妹背海苔の時代は妹背山の周囲で採取したばかりであるから、此の名が附いたもので、今は和歌の入江全体、布引の此方まで範圍を擴めて採取する、年々極めて多量である、

▲和歌の牡蠣 これも和歌入江から採取するのである、今では縣費で以て養殖して居る、その味はさかく宜しい、これも産額が少くない、

▲岩根の萱 これは紀伊名所圖繪にあつて、昔は名高いものであつた、場所は玉津島神社の左手の櫻の木の間にあつたが、惜いことには今は枯れて仕舞つた、

玉津島岩根のすゝきはに出で、まねけばかへる和歌の浦浪

源 兼 昌

▲小町袖越の塀 和歌浦はその名の通りに文學に因縁の深いところである、それは和歌浦を詠まれた和歌が多いから解かる、さてこの風光明媚のところであつたから、女流歌人として當代は名高かつた小野の小町も此處に來た、といふのは但た景色の佳い土地ばかりであく、玉津島明神は前に書いてある通り和歌三神の一柱である、それで小町もその流れを

擲んで居るので、明神の和歌の徳を慕ひ此處を參詣したものであると思はれる、上藤菱の小町姫が、行き疲れて、花の振袖か否かは解らぬが、兎に角袖を塀に打ち懸けて憩んだものらしい、その塀は何處にあるかといふと、玉津島神社の前の黄よ塗つた低い土塀がそれである、

▲蜆の宮 これは養珠寺の鬼門除の社で、宗祇の渡に近いところにある、今では小さい祠となつて、老木の松も哀れ枯れてあきあり、祀る氏子もあき雨露風雪に曝されて居る、

▲甲崎 海草郡雜賀村大字盤屋にある、昔は有本といふ藩士の下屋敷のあつたところの上に突き出た山で、峯嶺さではないが、丁度御坊山の尾とも見ゆる、

▲法師ヶ谷 今の和歌浦避病舎の上のところかそうである、圓光寺といふ寺の趾地も此處であるとのこと、此の谷の頂上を小町ヶ峯といふ、

▲宗祇の松 これは前にも書いて置いた通り、宗祇法師が吉原から玉津島へ參詣の途、キヌエの渡を往來した、松はその渡場の附近にあつたが、枯れたので、その跡へ小松を栽む

てある、これへ法師か禪をヒツ掛けたといふ俗説もある、

▲辨財天社。今の妹背山、昔の辨天島の頂上に祀られてあつた、その祠を多寶塔建立の時に蜺の宮に合併したものである、

▲雑質の城址。養珠寺の尾ざきにあり、今は其の城址として認むべきものが多い、けれど土地の人は尚ほ城山と呼んで居る、

▲テンボ蟹。和歌の名物で、形の小さい、色の白い、片爪が至つて大い、和歌に來た人は必ず此の蟹を見るであらう、(紀三井寺前に多い)

和歌浦の旅館 蘆邊屋、望海樓、片男浪館、米榮別荘、島田別荘、総じていふと和歌浦の名所と舊蹟は、この山紫水明の間に散ばつて居る、その上に、遠く淡路島のあたり、近くは大崎、冷水、鹽津、琴の浦(毛見)、紀三井寺、三葛、手平、中島

海に走る山々の遠景等が都合よく配合せられて居る、此れを一望の中に集めやうとすれば望海樓址の臙山に登るのが第一である、此等の名所舊蹟を包むで居る、和歌浦の風光を見

すに、片男浪邊、蘆邊あたりを巡ぐつて、和歌浦はこんなものかと言はれては甚だ不満足である、それで和歌浦に勝を探る人は是非とも此の山に登つて御覽をさいと勧めねばならぬ、此處の山嶺に立つて四邊を見渡すと、晴天の時ときには天光水色、其色彩は鮮やかに自然が抽いた大パノラマを觀て居るやうなものである、如何に精巧を盡しても、人間の筆鋒では此れだけ壯大な風景を寫し出すことは出來なからう、そこで藪野椋十氏の「上方見物」和歌浦の巻の一節を借つて來て証明をして置くまゝとする、

「上方見物」

二五一頁

大きく切つた砂浜、處々の松原、村里、田圃、川、橋、寺、社、丘、山、峰と数々の景が都合よく散ばつて見ゆる丁度自然の大きな繪屏風。俺が見物をした諸國の景色の中に此れ程手の込んだものを、一目に見られる様、寄せ集めた處は無かつた。

既にこう言はれて居るじやないか、紀州の人が和歌浦を佳いとあるのであるといふばかりでは無い、それで年々歳々和歌浦、紀三井寺に多く來るやうにあつたも當然ではあるまいか

今は南鐵和歌山市驛から和歌浦へ電車の便がある、大阪難波から和歌浦まで聯絡切符も販賣せられて居るから尙ほ便利である、

△片男浪即興

潮みち來れば片男浪

なみ打ち寄せてかへらしど

日毎夜毎にくりかへす

憂き世のことは白波の

いくらねりするばかりにて

塵も止めぬ磯の邊に

○

うらふししげき人の世を

のがれてこゝに片男浪

いろうつ波と松かせの

けがれぬ聲を聞くのみぞ

心にかゝるちりひぢを

洗ふには善きわか油

松かせに涙のをとさへとりろへてうきよのちりも止めざりけり

ぬしと手を取り濱邊に來ればなみがりんきでするぬらす

ぬしと二人で氣樂な世帯としもいつまで和歌の浦

▲鷹の巢の奇巖

……教如ケ箱……真宗の靈地……

……雜賀崎の漁村……朴訥の漁人……

海草郡雜賀輪村は勝區あり、鷹の巢の洞窟とす、昔、教如上人(眞宗)の難を避られしとて、村民の今に至るまで、此の窟を神聖視し、その靈蹟を口碑に傳へつゝ、敢てこれを穢すを容さず、人の此の靈地を訪ふれば、朴訥粗野の漁人、喜び船に乗せてこれに導く、和歌山より約一里半、道を水軒川の畔に取りて小浦に抵り、急阪を上り亦下れば雜賀崎の漁村に達す(電車に乗り和歌浦下車し、出島より船を備ふて行くも可なり)急阪を上下したる苦みの忽ち船上に忘る、此の奇巖を見るに夏より秋の間を好とす、清爽の海氣は人の襟を拂ひ、浪は船を緩く動かして心地快し、或は大きく或は小さく、或は扁く或は尖れる、幾十の岩礁の間を縫ふて行く、船の進むに従ひ奇巖ますます顯はる、巖の若は靜かに浪を嘗め、浪は幾度も貝殻を浸す、岸に逼るところ、潮水は高低を加へ、船亦動揺を數々す、海を壓する巨巖の、その尖端に従ひて一轉すれば、山を負いたる數百仞の高さを巖は深く内面に抉り去られ、其の下に岩石累々たるを見る、鷹の巢の奇巖は是れなり、奇勝蓋し和歌山附近に求めて此處にあるのみ、船を棄て、扁平の巖上に立つ、庭石の間隔を

保てる岩を飛び、更らに亦飛び越ゆ、寄せる浪は低き岩を洗め、亦人の足を洗ふ、斯して巖の凹處に到り、身を斜にし巖角を攀て進み、遂に洞窟を形作れる巨巖の下に達す、巖石層々相擁し亦相倚るところ、即ち教如ヶ窟にして、仰げば巨巖の懷は深く、俯せば窟内は暗色を帯ぶ、曾て教如上人の詔住居の跡、今は神靈の氣満ち、夏と雖も尚ほ冷氣身に逼り塵界を距ることの遠きを覺ゆ、磯打つ浪の餘響、長嘯の聲、共に窟中に反響す、教如上人信長の兵に逐はれて身を此處に隠したる時、和歌に意を述ぶ、曰く、

鷹の森に身をひろめたる親鳥はたかの巢に住む子さへわろし
 顯如上人(親鳥)は同じく信長に攻められて鷹の森(和歌山燈の森別院のところ)に隠れ、教如上人(子)は鷹の巢に潜む、當時の事を想起すれば、尚ほ矢叫びの聲、彷彿たるものあり、

我は斯く歌ひぬ、

ひしり住むろの鷹の巢に今暫しうき世のことを忘れぬかな
 洞窟を出づれば艦輻の浪の音、松吹く風の音、來りて耳と心を洗ふ、窟の前、一尺四方の凹地に清水の濼滴するを見る、是れ蓋し滿湖の名残あるべし、両側は斷崖攀べからず、巖

層の間、所々小凹凸を成す、鬼神の斧の工かど疑はる、此の窟に近きところ、夏は尙は釣客の影を見る、船に歸り、洞窟を離れて是れを看る、峨々たる奇巖は世の総ての物を呑まんとし、松のみ情なく点々其の周圍を守る、洞窟を擁せる山は海に對し、海潮は其の山脚を洗ふて涼しく、幾歳月を送り亦迎へつ、浪と語り、風に撲る、蒼海は底深く、山容屹として高し、往年教如の歴史は、この窟中より流れ出で、人の耳に口み語り繼ぐ、雜賀崎の漁民の神聖視するところ、舊時の面影を偲へは尙ほ心を清からしむるものあるあり、

鷹の巢を観るには、船よりすると好とす、されど亦雜賀崎の後方、山を巡りて下るも可なり

▲鷹の巢を観る▼

教如の住みし鷹の巢に
船を送寄せ訪なへば
松吹く風と浪の音は
幾春秋をかたるらん
昔むす處に牡蠣殻の

のこれる跡も寂びて行く
名もなき漱草潮水に
ながく伸つゝ洗はれて
憂世の外に白浪の
よせてはかへす幾うねり
ぬれにぞ濡れし沖の石の
昔層々の色ふかく
寄する浪はへ花と咲き
四季にかはらぬ眺かな
廣き海原かさきよく
見るもの奇しく聞くものも
わゝ絶れにし此の洞窟
眞に繪の島を今ここに
うつして見するものごとは
行き見し人の語るなる
残れよ長の歴史の上に

▲紀三井寺

- ……西國二番の札所……多數の堂塔……
- ……瀑布と龍燈の松……開山の由來……
- ……海上の龍燈……千日詣……

◎紀三井寺 といふのは普通に稱する寺號であるが、全く言へば紀三井山金剛寶寺護國院といふので、名草山の半腹に位置を占て居る、宗派は古義眞言宗である、本尊は十一面觀世音菩薩（開山爲光上人一刀三禮の靈佛）西國順禮、第二番の札所である、それで遠國から參詣するものが絶ぬ、名所の和歌の浦を控へ、三葛の盤燒く煙の眼の下に昇るのが見える、堂塔は樹木の間に見へ隠れして居る、櫻の木が多いから花咲く春にあると、満山全く紅雲が棚曳いて居るやうなもの、建築物の立派なことは流石に大伽藍であることを証明し

て居る、山内は高燥の地であるから、空氣清淨で、穢れた人の心を拂ふに適して居る、山内には開山堂、二重塔、鎮守祠、經塚、札納堂、鐘樓堂、大師堂、其他山内の小寺院等がある、小さいけれど瀑布が三ある、南のは楊柳水、中は清淨水（表阪のところにある）北は吉祥水といふのである、仁王門は古色を帯びて居る、仁王の姿もまた鏢として居る、石磴を登ることは數百級の高さである、本堂の北に千手ヶ谷といふところがある、其處に龍燈の松がある、今當院開山の由來を尋ねると、文那は唐の代宗皇帝の時に、碩徳の聞々高い青龍寺の爲光上人といふ僧があつた、佛敎東漸の機に乗じ、我朝光仁天皇の御宇寶龜元年に來朝して、道場を開く靈地は何處かにないものかと探つて、遂に當名草山に來た、此の山は勝れたるところであるから、伽藍を造營し、法燈を掲げ、佛陀の福音を傳へるお善い處であると、此處に錫を留められ、終つて千手觀世音菩薩の靈像を得て、最初は草庵を結んで行ひ濟して居つた、それを聞き傳へ僧とさく俗とさく、自然に、四方から集つて來て、遂に此のやうな莊嚴の法城を建立することゝあつた、經塚には上人の手づから寫された大

般若經六百卷を納めてある、上人の教化日に盛んにあつて来た、龍女があつて上人の説法を聞き、上天の妙果を得たのを感謝するため、毎年七月九日の夜、海上に淨燈を献じて上人の徳を耀やかすことゝあつたとのこと（尤もこれは寺傳である）、それで七月九日は千日詣と言つて、遠近から多數の男女が參詣する、龍燈を見るためよ參籠するものも少くはない、此の夜は和歌山から紀三井寺の間翌朝まで人の往來が頻繁なものである、前に書いてある通り、山内の三つの瀑布の水を汲んで三密灌頂の阿伽とするのである、三の瀑布で三井といひ、紀伊にあるから紀三井山と呼ぶことゝあつた、名高い應同樹は表阪の中段左手にある、

宗匠の句碑が山内に多く建てられてある、この中で、芭蕉翁の句はこうだ、

見上ぐれば煙しまふて紀三井寺

行春の句碑は和歌蘆邊にあるが、紀三井寺の開山堂の前にもある、本堂の横の繪馬樓から見渡すと甚だ佳しい、和歌浦を抱き廻して居る海の上に、眞帆片帆、電車と連絡して居る

鹽津曳船と巡航船、摺焚く烟の風情、井然たる鹽田、得も言はれぬ景色である、尙ほ當寺は林道春の叙景文、花山院法皇の應同樹の歌、六々山人（石川丈山）の「養寧」の額等がある、

紀三井寺の旅館 名草館は尤も大なるものなり、

▲名草山と名草濱

……布引の松……濱の宮……
……琴の浦……布引の西瓜……

◎名草山 これは紀三井山の本名である、この名草山が、和歌浦に臨んで居るので一段の趣を添へて居るのである、

◎名草の濱 布引浦から毛見濱までの稱である、名草の浦と言つても同じことである、

◎布引の松 紀三井寺の開山爲光上人が、和歌の海から青龍の捧げた梵鐘を得て、浦人と

共に白布を濱の松に繋ぎ海から引き上げたといふことである、それで、布引の松といふ、

うち出で、玉津島よりながむればみどり立ちうらふ布曳の松

秀吉公

◎布引の西瓜 承應年間から此の地に栽れたものである、今では名物とあつて居る、

◎濱の宮 毛見浦にある、昔崇神天皇の御世に 天照皇大神の御靈を大和の笠縫邑に齋ま祭られたが、尙は御宮として善き土地がよいものかと、豊劔入姫命に仰付られ諸國を廻らしめられた、命は御靈を奉して此の地に留り、御靈を鎮め奉つたといふことである、その時に此處に日前宮も齋ま祭つたともいふ、年々盛んを祭式が行はれて、遠近の士女の参詣が絶へぬ、例祭は九月二十三日、

◎琴の浦 毛見の浦を亦琴の浦といふので、此處も風景の佳いところである、くれぬとてとまりにかゝる夕浪にことうらしむる海士のいさなり

法印幸清

▲内海灣頭の名邑

……漆器と傘……日方と黒江……

◎日方と黒江 内海灣頭に臨める名邑を日方、黒江とす、両町は各戸數二千に近し、黒江は漆器、日方は傘、年々の製産額頗ぶる多く、大部分は是れを各國に向け輸出す、何れも紀伊あける物産中の有名なるものあり、近時に至り黒江の漆器は大に販路を擴め、製造に思ひを凝し、海外にまで名を轟かせり、日方の傘もまた一段の進境を示し、取引ますます盛なり、

◎日方と黒江濱 何れも遠淺なれば、潮干の時には貝拾ふに適せり、小波の寄するところ女男の童の嬉々たる、實面白き眺めといふべし、日方は昔干瀉浦といひしとぞ、

◎辨天山正定聚院永正寺 日方町にある古刹にして、淨土宗鎮西派に属し中本寺たり、境内亦廣し、

◎黒江御堂 黒江町にあり、永正四年眞宗の實如上人、冷水浦の御坊を此處に移轉したるなりとて由緒ある寺院あり、山城を天王山といふ、

▲城址の多き海南

……山名、北畠、畠山の古城址……

◎草山駿河守の城址 日方池崎の山上にあるのがそれである、明徳年間に山名修理大夫義理の弟、草山駿河守の築いた城の址だといふ、

◎北畠の城址 大野村の春日神社から北一丁程のところにある、これは天正年間に、北畠具親が家臣を率ゐ紀伊に来て、此處に城を築いたといふことである、

◎大野の城址 これは大野村大字大野中の南の山中にある、西の城と東の城の二がある、畠山尾張守満家が足利義持に紀伊の領主を命ぜられ、此處に城を築いて居つたが、満家はその後泉州堺ヶ浦で戦死したので、遊佐豊後守が城主にあつたといふことである、山名義理も亦暫らく城主と爲つたこともあるさうだ、

◎岡田の城址 畠山義深が其家臣の遊佐といふものに守らしめた城だといふことで、龜川村大字岡田の山中に址が遺つて居る、

◎井松原古戦場 へ名高浦にある、

▲名士の屋敷跡

……鈴木三郎と龜井六郎の舊居……

◎鈴木三郎重家の邸 この鈴木三郎重家といふのは、九郎判官源義經の家臣で、所々の戦に従ひ功があつた人である、後に奥州衣川の戦に討死をした、その屋敷は今でも藤白權現の東手、藤白峠の下にある、さか／＼大きい建物と広い庭前とであるから、昔は如何に盛んであつたかといふことが偲ばれる、子孫は今に絶へぬ、著者の友人鈴木三郎氏は其後裔である、今でも古文書が多くある、

◎龜井六郎重清の邸 この重清は鈴木三郎の弟であるところから、三郎と共に義經の家臣

にあつて居つた、龜井の屋敷は藤白権現の北手にあつたが、今では血族が絶へたので祀をするものがない、屋敷も全く後形もなく畑地となつて居る、

鈴木、龜井兄弟の碑は藤白淨土寺の前山にあり、赤山名修理太夫の墓も同じところにある、

◎藤白権現社 鈴木屋敷に近く、藤白山の麓にある社はそれである、

▲藤白關屋の址と藤代の松

……藤代の松は懸れる沖の浪……

……金岡擲筆松は枯れたり……

◎藤白關屋の址 今では但だ關垣内と字に残つて居るばかり、それを知る人もない、これは文治年間、熊野往來に當れるところから關守を置いたと傳へて居る、

◎藤代の松 昔は藤白峠の北麓にあつたが、琵琶歌（大塔宮吉野落の條）に所謂、色紫の藤白の松にかゝれる沖の浪、とあるのがそれである、シカシ今では知る人もない、

◎金岡擲筆松 それは藤白峠を加茂谷に下るところにあつたといふ、が枯れた後は何處にあつたものか、此れも解らぬ、

▲小南の梅と加茂の密柑

……田道間守の碑と裏見の瀧……

◎小南の梅 加茂村小南にある梅林で泉州の金熊寺に對して客を引き寄せる力がある、こゝに行くには電車と聯絡して居る鹽津曳船亦是は巡航船に乗れば直に鹽津に着く、それから約八丁行けば善い、

◎加茂の密柑 これも小南の東十二三丁のところ、加茂村大字橋本の山島は一面に柑橘を栽培して居る、即ち垂仁天皇の御世、田道の間守といふ人が常世國から其の種子を持つて歸つて、先づ此の地に栽ねたといふことである、

◎田道間守の碑 これは岩屋山の境内に建られて居る、それには柑橘栽培の由來を書いて

ある、その下の方に橋王権現社もある、それで以て考へると、柑橋に就ての因縁はあか
か深い土地であるに相違ない、

◎裏見の瀧 加茂村大字 橋本に属する、岩屋山福勝寺の裏手にある瀑布が名高い裏見の
瀧である、山は静かで谷は深く、懸崖數丈の上から白玉を砕いて投げるやうに頗ぶる奇觀
である、それで巖の空になつた處に立つて裏から見ると尙は一層お趣がある、それで裏
見の瀧の名を得たものである、岩屋山には老木の櫻が甚だ多く、観るには場所が善い、亦
楓樹も多し、

海中の長保寺は(鹽津より二十四五丁)天台宗に属して居る寺であつて長保年間慈覺大師の開基したといふことで、
海濱主徳川侯爵家代々の壘城がある

▲鹽津と冷水

……良港と蓮如上人草創の寺院……

◎鹽津港 三方に巒形を爲し、風波を避るに適せる良港なるを以て、船舶の出入多く、民
家は港を歴し、山を負ひ層々建て並べり、亦此處は漁利も少なからずといふ、

◎冷水港 鹽津港と相併べり、小さけれども亦良港あり、
飯盛山丁眞寺は冷水浦にあり、蓮如上人の草創にかゝる由緒ある寺院なり、

▲官幣大社日前國懸神宮

……紀國造家の事……太田城水攻のこと……

◎日前國懸神宮 海草郡宮村大字秋月に鎮坐します、日前大御神は御鏡、國懸大御神は
日矛を御靈代と云、和名の 天皇は伊勢大廟に亞ぎ崇敬し給ふ、昔は境内廣かりしも大
正の兵亂に當り縮少するの止むを得ざるに至りき、今其の因縁を記さんに、天正十二年東
照公小牧山に出陣の時、宮司紀忠雄朝臣は東照公に心を寄せ、家臣に命じ郷民を促し、根
來の僧徒と謀して泉州に向ふ、秀吉是れを聞さ大に怒り、遂に天正十三年紀伊來襲し、

根來を滅し、國造家の太田城を水攻めにす、此の時畏くも神宮境内を破却し、神領を沒收したるを以て、忠雄朝臣、兩宮の御靈代を奉じて高野山の麓に通る、秀吉の退陣後、再び兩神宮を此處に鎮め奉れり、後藩祖頼宣公再び造営したるを以て、社殿は殆んど舊觀に復せり、境内ふ八十八の末社あり、什寶は彦五瀬命の納め給へる御弓、御矢、允恭天皇の納め給へる古鏡あり、老樹枝を交じ、篠林晝尚は暗く、森嚴にして神靈長に鎮りませり、境内坪數は一万八千四百四十餘坪祭日は九月廿六日、南海鐵道和歌山市驛より約三十町

◎紀ノ國造家 官司紀家の遠祖は神皇座靈尊の第二の御子天道根命にして、神武の帝の御時、紀の國造に定め給ひ、紀姓の祖とある、紀俊秀氏は男爵を授けられ、現に貴族院議員にして、紀俊氏は兩神宮々司たり、我が紀伊に於て比類なき名家あり、邸は秋月にあり◎太田城水攻の事 海草郡宮村大字太田の東南一帯の田地は即ち是れなりといふ、此處に城を築きたるは、當時の國造紀俊連朝臣、神領を失はんとことを恐れ、延徳年中所々に城壘を築き防禦に備ふ、秋月城には飯垣周防守、忌部山城(井邊山)には村垣因幡守、三葛郷城

には田所平左衛門を防禦に當らしむ、而して太田城は國造家の居城たり、信長兵を起して雜賀を攻むるや、國造家は青侍をして雜賀を援けしむ、小牧の戰に當り忠雄朝臣は家臣、社家、郷士、根來の僧徒と結び遙に家康に款を通じ、先づ秀吉が小牧山に集め居れる兵を割き勢ひを殺がんとし、大阪城を攻むべく、進みて泉州に入り、岸和田城を攻む、秀吉是れを聞き大に怒り、天正十三年三月遣兵を提げ和泉に入り、長驅根來を焼き滅し、更らよ國造家の太田城を水攻めにす、(當時紀の川は岩橋村より和田川に流出す、故に秀吉紀の川の水を堰き留めたるなるべし)遂に社頭を破却し、神領をも沒收するに至り、尤も亂暴を極めたりといふ、

▲岡崎の御坊と満願寺

……鷲の森の懸所……弘法大師の創立……

◎岡崎御坊 岡崎村大字小手穂の講堂山の上にある、本派本願寺派に属して、和歌山鷲の

森別院の懸所である、山號を威徳山と言つて大きな寺である、

◎満願寺 山號を弘誓山、院號を天王院といふのである、岡崎御坊と同大字にある、此れは古義眞言宗で、弘法大師が弘仁三年に創建した靈場であるとのことである、

▲木種を布き給ひし神

……五十猛命……抓津姫命……大屋津姫命……

◎都麻津比賣神社 は西山東村吉禮に鎮坐せり

◎伊太祈曾神社 は同村伊太祈曾に鎮坐せり

◎大屋都比賣神社 は紀伊村宇田に鎮坐せり

此の三神は木國に木種を布き給ひし神たり、三神は素戔嗚尊の御子なり、我紀伊に木種を布き給ひしより國號を始めて木の國と命せられたるなりと云、

◎伊太祈曾祭禮 伊太祈曾神社の祭禮は十月十五日あり、當日は東山東村大字矢田の丹生

神社の下、傳法院境外御旅所より三神輿渡御の式あり、日前宮祭禮に次ぐべき盛式なり、

▲矢田の傳法院

……山東の松茸……

◎傳法院 矢田山明王寺といふのである、東山東村大字矢田にある、新義眞言宗、傳教大師覺鑊の開基で、根來の大傳法院と前後して創建せられたといふ事である、此の寺も亦

天正十三年三月、根來寺焼亡のときよ兵火に罹つて、今では昔の三分一にも足らぬことにかつて居る、

◎山東の松茸 名産山東松茸は、東西山東村の松林から出る、毎年秋にあると茸狩りで賑つて来る、泉州の孝子の茸と共に、和歌山の青物市場に香氣を放つのである、

▲竈山神社と了法寺

……血沼の海……雄の湊……

……涅槃の釋迦……千体佛……

◎竈山神社 三田村大字和田の竈山に鎮座せり、祭神は神武天皇の皇兄彦五瀬命にまします、始め命は御弟豊御毛沼命（後に神倭磐余彦命）と日向國高千穂宮に在す、西國既に皇化に霑へども、中州未だ平定せず、茲に於て議り給ひ、海路御軍を進め給ふ、遂に浪速の崎より流れに溯ぼり、河内の白肩の津（今の牧方）に到り給ふ、茲に大和登見山（鳥見山とも書す）の長髓彦、饒速日命を奉じて皇軍を孔舎衛阪（今の草香嶺か）に邀ふ、皇軍利なきのみならず、彦五瀬命流矢の爲めに御手に傷を負ひ給ひ、痛み甚しく在せしかば命詔ふやう吾は是れ日神の御子なれば日に向ふて戦ふこと固に良からず、故にこそ賤奴のために痛手負ひぬ、今よりしては日を背に負ひて伐んとて南方に廻幸まし、和泉の海を航し給ひ、其處にて御手の血を洗はせ給ふ、故に血沼の海といふ（後茅渟海と改む）かくて紀の國の男水門に入り給ひし時、痛重らせ給ひしかば、命大に怒らせ給ひ、慨哉吾大丈夫

よして賤奴の手に死なんやと詔て男詰に詰ひ給ひ遂に崩御ましぬ、此れによりて其水門を雄湊と言へり、命の尊骸は和田の竈山に葬り奉れりといふ、祭日は九月十三日、

本居 宣長

◎日正山大雲院了法寺 三田村大字阪田にあり、天台宗よして、本尊は釋迦佛、脇士は千体佛、閉山は行善上人あり、涅槃堂には涅槃の釋迦尊像、諸尊者群生の像は悉く是れ木像あり、毎年二月十五日涅槃會に當り四方より善男善女多く參集して法益を受く、山號と寺號は藩の老臣三浦長門守の考、左近太夫邦時の法號了法院日正居士といふに採りたるものありと云、

▲誕生の井と閑居の址

……武内宿禰……宗祇法師……

◎誕生の井 武内宿禰の誕生の井は安原村大字松原の柏原といへる松林中にあり、宿禰は

本朝大臣の始にして、亦壽を數ふること三百、長壽此の人に過るものなし、景行天皇より仁徳天皇に至る五朝に歴仕し、精忠奉公す、維新前までは徳川家（將軍家）に誕生のことあるときは必ず此の井水を掬取りて初湯に用ひしと、是れ其の子の壽ならんことを冀ふ意なるべし、仲哀天皇崩御の後、皇后息長足姫命（神功皇后）に供奉し三韓を征し功勞頗ぶる多き大臣なり、

◎開居の址 宗祇法師の開居せしところは安原村大字吉原の西山にあり、法師は有田郡の産にして和歌を善す、曾て此處に由縁を求めて開居し、和歌浦玉津島明神に百日間參詣したりと聞く、亦俳句に於て詠むべきもの多し、

筑紫に下りしに染川のはどりにて

ろめ川はしぐれし山のしづくかな

宗 祇

▲龜池と龜川

……周回堂里の大池……灌溉の功大也……

◎龜池 巽村大字阪井にあり、殆んど盧の湖の小なるもの、灌溉用として堀鑿したるなり其の遺利は今や顯然たり、池中に小舟を泛べて遊べば趣深かるべし、

◎龜川 阪井より且來を経て毛見に入る川の名にして、水源は龜池より發す、此の水よよりて數万石の田を灌溉す、

▲栗林八幡宮と得勒津宮址

……鶴ヶ岡八幡の正体……仲哀帝の行宮……

◎栗林八幡宮 栗林村にあり、此の八幡神は相州鎌倉鶴ヶ岡八幡宮の正体ありと稱す、後花園天皇の御宇、將軍足利義教、管領上杉持氏の謀反を征す、此時鎌倉ハ兵亂の爲め騷擾す、鶴ヶ岡八幡宮の別當僧亂を避け、御神体を奉じて紀伊に逃れ來り、鷲の森に社頭を營み齋を祀りしが、後栗林に遷宮し奉れりと（社傳）社前の額は尊純法親王の御筆ありといふ

◎得勒津宮址 四箇郷村新在家の東北にありしといふ、今は耕地の字名として残れるのみ傳へ聞く仲哀天皇紀伊に行幸し給ひしごさの行宮の地ありしも、秀吉國造家を討ち太田城を水攻めとしたる時流亡したるありと、今新在家に得津姓を用ゆる家多し、此の因ある故ちらん、

▲幡降寺と高橋神社

……靈幡降る……高橋姓の祖神……

◎白鳥山教王院幡降寺 栗栖村の南山にあり、本尊は薬師如来なり、寺傳に依れば當寺は弘法大師の開基にして、嵯峨天皇の弘仁七年大師入唐し、歸朝後靈地を諸國に求め此地に來りしとき、蒼天に光明を放ち、靈幡降下して松の枝に懸れり、大師思へらく是れ有縁の地なるべしと、伽藍を造營し、幡降の二字を取りて寺號と爲す、此寺も亦天正の兵燹に罹り焼燼し今は唯奥の院のみと爲れり、

◎高橋神社 西和佐村大字岩橋に鎮座す、祭神は饒速日命、高橋姓の祖神あればとて高橋神社といふ、境内甚だ廣く樹木陰森たり、明治四十一年社寺合併の令出で附近の小祠は悉く此社に合祀せり、

▲岩橋の千人塚

……栗柄の一ツ物……天平寶字岩……
……紀の川の變遷……安藤家の別第……
……狐塚と天王塚……石棺と石廊……
……石廊門扉の文字……坪井博士と千人塚……

◎岩橋の千人塚 或は百塚とも千塚とも云ふ、それは塚の數の多い意味であらう、著者は特に千人塚と名づけて置く、此處は西和佐村大字岩橋に属する、共有山であつて、官鉄の舊紀和線田井の瀬驛から約二十町ばかりもあらう、道、岩橋を通る、字高柳の西の辻に

「刈萱堂」といふ小さな堂がある、これは高野山の麓の刈萱堂の本案であるといふが、實際はどうであらうか、昔、七堂伽藍があつたといふ、それで著者を千人塚に導かれた岩橋村長、縣會議員岩橋喜次郎氏の三世の祖が耕地一反半を寄附し講社を結び年に三回法會を行ふことゝなつて居る、此の岩橋といふところは昔海濱であつたといふ、それは此村の西に海神社があるからである、何處でも海に近いところに必ず此神を祀つて居るから、引証したものだとのこと、シカシ昔紀の川が此村の西を流れたといふのは事實らしい、序に書いて置くが名高い「栗栖の一ツ物」といふのは岩橋の西に當る栗栖の社家の稱で、西和佐村助役栗栖庄太郎氏は其末孫である、昔は岡崎、宮村から和歌山に行くまでの間に領地があつたさうである、この栗栖家は粉河祭の際に祭主とある定めで、七度まで使が粉河から來て、最後の使が岩出あたりまで來た時に、ヤット發足する、所謂七度半の迎を受けて行くといふ、當時は頗る威張つたものであつたといふことである、「天平寶字岩」は岩橋の字字田の田中に横はつて居る、長さ八尺横七尺、厚さ三尺位の岩である、何故天平寶字岩とい

ふかといへば、即ち現に岩の表面に「天平寶字三年」と彫まれてあるからの名で、此の岩は岩橋の西の花山といふ小山の上に建られてあつた伽藍の礎であつたといふ、それから舊藩の時代に此の村は國老安藤帶刀の領地であつたから、峯の池に其の記念碑が残つて居る、岩橋山の西（中筋牧牛舎のあるところ）は安藤家別第のあつた處である、それで庭の風致を添ゆるために置いた多寶塔もあつたといふ、ところで、廢藩置縣の砌、安藤家から岩橋へ此の地を興へた、それで共有山としたのである、千人塚といふのは此の山の中に散在して居る塚のことを言つたもので、尤も大きいのは「天王塚」で、狐塚と其他の塚は殆んど同じ大きさである、明治三十三年の頃始めて發掘せられた、塚の中から刀劍が出る、勾玉が出る、甲冑が出る、植輪が出るといふので、一時はさかくの騒ぎであつた、遂に東京の文科、理科大學から學士連が來て大に研究したものだ、塚の多いこと、塚の構造の堅固なところは驚くべき程である、此れは石廓である、石棺も一個所にある、此の石棺から甲冑と玩具が出たとのこと、石廓の構造は皆同一の様式で、扁平石を積み重ねて四方を固め、

天井に大きな青の自然石雜賀崎石で梁として居る、セメントの古い時代に此のやうな建築をしたといふのが、なか／＼のもので、確かに工學上の参考に値するであらうと思はれる。天王塚は凡そ五坪ばかりもある、なか／＼奥深く見ゆ、火の光がなければ進むことが出来ぬ、著者が行つた時は七月のことで、暑さに堪へられなかつたが、此の塚の中に入つて、三十分も経たぬ間汗が蒸發、凝結して白く見え、冷氣は膚を犯して寒さを感じ、久しく居られなかつた、これを利用して冷蔵庫としたらば利益があるに相違ない、そこで學士連の説に依つて考へ合すと、何んでも此の岩橋山の古墳の主は上古時代の民族で、それが多く棲んで居つたといふことが立証せられる、深く探究して見ると、どうも始め大和に國を成して居つた民族が、吉野川の流に沿ふて紀州へ來て此處に落ち着き住居したものであらうとも思はれる、すると天王塚は當時の酋長の墓で、他の小さい塚は村民の墓であらう、すれば此の千人塚に葬られた人は岩橋村民の先祖かも知れぬ、天王塚の外は悉く出入するに困難で、繩を傳ふて降りねばならぬ、尙ほ此の發掘せられた石廓中の門扉に鑿の痕

と見ゆるものがある、それは文字であるとか、ちいとか議論が喧ましかつた、そこで岩橋喜次郎氏は此の塚から出た埴輪と勾玉と鉄丸とを持つて東上し、人類學の泰斗たる坪井理學博士に鑑定を請ふた、博士は鉄丸を研究して古代民族の用ゐた乘馬用の靴の裝飾品だと言つて居る、それから埴輪と勾玉とは古代種族の用ゐたものであるから、岩橋山の千人塚は頗ぶる研究すべき値がある、人類學上の好資料を提供せる處であると言つて喜ばれたと云だが、また來臨するの機會が來ぬのは惜しいことである、その上に岩橋山にはまだ堀らぬ塚が多いから、何時どのやうなものが發見せられるかも知れぬ、人類學者であくとも一應見て置くのも善からうと思ふ、

▲ 法照寺と慈光寺

……蓮如教化の跡……兵燹靈地を焼く……

◎ 觀池山法照寺 東派本願寺に屬し、西和佐村大字岩橋字高柳にあり、當山は文明十八年

蓮如上人當村湯橋氏に錫を止め教化と、道俗の歸向甚だ多し、遂に道場を峯の池の畔に建つ、故に觀池山といふ、其後天文年間兵火に焼かれ、後今の地に移轉す、

◎清涼山慈光寺 同村にあり、本尊は十一面觀世音菩薩、古義眞言に屬す、昔は和佐山觀音寺と言ひしと云、此の寺は和佐八幡宮の別當たりしが、元弘建武年間(後醍醐帝の御宇)和佐山合戦のことあり、兵火のために本堂を殘して諸僧房悉く烏有に歸す、寛文年間高野山新別處の快圓和上再建を圖りしも成らず、玄忍和上に傳ふ、此時今の寺號に改む、如圓和上に至り檀越に諮り、其淨財に依りて再建全く成る、當寺は律を持して清淨の界あり、

▲ 高御前神社

……和佐山合戦……

……四條中納言を畠山義深の對陣……

◎高御前神社 和佐村大字禰宜の東の山、即ち和佐山に鎮座ましますのが此の神社である

俗に是れを高御前と言つて居る、祭神は高津比古神、高津比賣神、氣鎮神の三座である、

此の神は魔神降服の神であるから甲冑を召され矛を持ち給ふ、それで亦軍の神ともいふ、惡風邪氣をも拂ひ給ふといふので小兒痘瘡の患を免れしめ給ふといふ(社傳)

◎和佐山合戦 和佐山は、和佐村での第一峯である、和佐山城はその頂上よあつたといふことである、此の山に登ると、岩出、根來、山口、川邊、小倉の各村は眼下に、紀の川を界して並んで居る、遠く和歌山市と加太町とも見ることが出来る、對岸の連峯は葛城山脈である、

南朝の四條中納言隆俊、紀伊の勢三千餘騎を率ゐ、最初ヶ峯(南畑村)に陣を張つたといふことが足利家に聞へた、延文五年四月三日畠山入道道誓は其弟尾張守義深を大將として、白旗一揆、平一揆、諏訪、祝部、千葉の一揆、杉原が一類、彼此合して三萬餘騎を最初ヶ峯へ差向けた、それで此の三萬騎は敵の陣地に對して此の和佐山に上り三日間進まなかつた、先づ己の陣を堅くし後に通る勢ひを示し、塀を塗り櫓を起したといふことである(大

平記の意

◎城址 といふものゝ此れも餘り取り立てゝいふ程のものであり、けれど數年前に此處から兵器杯を發掘したことがあつたさうだ、亦俗説信を置くに足らぬけれど、此の和佐山に黄金千兩、朱三石を埋めてあると傳へて居る、

△和佐臺八郎 貞享三年四月二十七日、京都は三十三間堂で八千三十三本の通し矢を射た射術の名人和佐臺八郎(紀州家の臣)は此の和佐村の出身である、

官鐵紀和線布施屋驛より南方約十五丁、

▲夢妙幢寺の縁起

……政子の嫉妬……丹後内侍の都落……

◎金鼓山觀音院 世に單は夢妙幢といひ、觀音院といふものあり、海草郡大田村、市内東死町より秋月に至る間、道の左方にあり、本尊は妙幢菩薩にして夢の吉凶を掌る佛あり

此の靈佛は昔攝津住吉社の後にありしといふ、此處に文治年間丹後内侍といへる女あり、源右大將に寵せられ妊娠す、夫人政子嫉妬に堪はず、本多次郎をして内侍を誘ひ由比ヶ濱にて殺さしむ、次郎是れを憐み内侍を熊野路に追れしめんとし、攝津住吉神社の附近に來る、内侍産氣附きたるより神佛を祈念し遂に男子を分娩す、是れ即ち住吉明神及び當時此處にありし妙幢菩薩の加護なりとし感涙に咽びたりと、後建久元年頼朝上洛の時、次郎此の事を頼朝に告ぐ、頼朝政子を憐り此男子を島津家に於て養はしむ、長じて島津三郎忠久といふ、其後此の妙幢菩薩は兵乱のために、縣下海草郡鳴神村鳴神社の社地内に移轉し、更らよ今の地に移る、今は境内寂寥として昔日の面影を見るに由なし、

▲吉田の聖天宮

……法輪寺の變遷……

◎吉田の聖天宮 と言へば密嚴山大聖院法輪寺といふよりも世に普ねく知らる、境内に歡

喜天を祠れるを以て爾名づく、法輪寺は古義真言宗、本尊は不動明王なり、歡喜堂は本堂の東南にあり、弘法大師入唐の際、惠果阿闍梨より歡喜天の像一軀を附與せらる、今洛南東寺に安置す、法輪寺中興本明和上は京都御室の頼遍僧正より分身の歡喜天を受け歸り、堂を營みて安置せり、信徒多く、殊に東廓藝妓の信仰淺からず、婀娜姿を境内に見ぬ日はなし、

◎法輪寺 境内廣く、老松枝を交へ佛堂其の間に隠見す、當寺は昔有田郡垣倉にありて、弘法大師の開基、嵯峨天皇の勅願所なりしも（護良親王熊野に落ちさせられしとき、法輪寺に止宿せられしといふ）天正年間烏屋城没落の時、當寺も亦兵火に罹る、然ば其地に草庵を結び居たるが、本明和上靈夢に感じ、終に宮村大字吉田の地に遷し諸堂を營み、今尙は森嚴の靈場たり（官鐵紀和線和歌山驛より東方約十二町）

▲ 梶取總持寺と榮谷行宮址

……勅願の寺塔……駐蹕の址……

◎受陽山知足院總持寺 野崎村大字梶取にある、それで梶取本山と呼んで居る、本尊は阿彌陀如來で、淨土宗西山派の本山である、此の寺は後花園天皇の寶徳二年に建立したもので、開山明秀光雲上人の赤松圓心の息子であるが、幼ない時分から、淨土教を信じ、剃髮入道して諸國行脚の途中、本縣有田郡で十八ヶ寺建立した後、海草郡野崎村大字福島の善導寺に住つて居られる中に、地を相て伽藍を建て、そこで法益を施して居つた、即ち總持寺である、後奈良、正親町、兩帝から畏くも勅願の綸旨を頂戴することゝあつた、什寶には畫像の阿彌陀如來、法然上人眞身の舍利、同上人色形の御影など甚だ多い（南海鐵道紀の川驛から四五町西）

◎榮谷行宮址 岸村の行宮ともいふ、稱徳天皇の天平神護元年九月、行幸の前に大和、河内、和泉の地に行宮を造らせられ、冬十月遂に御車は紀伊より行幸あらせられて、岸村行宮に入らせられたといふことである、その行宮址は字「ミカド」といふ田の中であらうとい

ふことである。

▲木本八幡宮

……應神天皇願宮址……道風の筆蹟……

◎木本八幡宮 木本村にある神社である、祭神は神功皇后、應神天皇、姫太神の三座であつて縣社となつて居る、此の神社のある處は應神天皇願宮の址であるといふことだ、昔、華表に掲げてあつた額(八幡宮の三字)であるとして秘藏して居るのは、名高い小野道風の書であるといふ、此の宮は神靈いやちこであるから參拜者が絶へない(南鐵紀の川驛又は市驛より約壹里)

▲松江濱ご加太浦

……青松連なる灣……淡路に面す……

◎松江の濱 紀の川口(雄の湊)より西方本脇の濱に至る間の總稱あり、昔は和田御前松、東湖、和田浦等の名ありき、此地は風景頗る佳く、東和歌山城を臨み、西加太浦を控へ北青巒を負ひ、南大洋に向ふ、磯馴松は濱邊を擁し、漁利に富む、鱈は尤も有名なり、◎加太浦 海草郡加太町の稱にして、山を負ひ海に面す、加太海峡の海は常に高けれども淡路に通ふ便船あり、漁獲の利多く、松江の濱と連絡と、此處も亦風景佳く、深山要塞大隊は山上にあり、蓋し南海重要な關門たり、

▲淡島神社と糸切八幡宮

……加太和布と糸切餅……

◎淡島大明神 加太の濱に近きところ、正殿には少彦名命、相殿は左方月讀命、大己貴命、全右方息長足姫命なり、少彦名命は大己貴命と力を競せ中州を辟き平げ、病災を攘ふ法を傳へ、遂に淡路の跡を垂れ給ふ、神功皇后三韓を征し凱旋し給ひし時、偶々忍

熊王謀反の事起る、皇太子を武内宿禰に託し木の水門より浪速に向はせらる、途此の浦を通過せり、時風起り濤立ち騒ぎて御船を進むるまを能はず、皇后即ち苦を投じてその流るゝに随ひ針路を進められ、今の苦ヶ島に着き給ふ、此處に神社あり、拜し給ふに少彦名命にて在ましき、皇后並に妊娠の御身を以て遠征し給ひ、山療海氣に觸れさせられ、御分身後遂に赤白帶下に惱ませ給ふ、即ち少彦名命は醫藥の祖神さればとて祈願し藥草を管み給ひしに、御病全く愈させらる、後皇后皇太子と會し忍熊王を誅し皇統を全くし給ふ、其後仁徳天皇淡路に遊獵し給ひし時、此神祠を加太に遷し、皇后の神靈とを齋ぎ祭り給ひしといふ、されば病難、災厄を攘ひ、且つ安産守護の神として、今も參拜するもの絶えず、神寶の八咫瓊勾玉、神功皇后の御鏡、全御太刀、綾巻物、神樂太鼓、大塔宮の御兜、同御太刀等あり、(南海鐵道和歌山市驛より三里)

加太和布 は加太の磯邊より採取す、同處の名産物なり、

◎糸切八幡宮 本脇村にあり、淺野紀伊守國主たりし時、其家臣中村善等、慶長年間に創

建するところありといふ、

糸切餅 八幡社境外に茶店三軒あり、此處に名物糸切餅を賣居れり、
友ヶ島 又は苦ヶ島といふ、加太より海上短距離のところであり、此の島は地の島、神島、沖の島より成る、詳しくは後日に譲る、

▲ 報恩講寺

……法然上人念佛の道場……

◎報恩講寺 泉南郡大川にあり、世に是れを大川の圓光といふ、本尊は元祖圓光東漸惠成大師にして、淨土の開祖法然上人なり、大師後鳥羽院の逆鱗に觸れ、讃岐に左遷せらる、承元二年冬の初、赦されて土佐より船よ乗り難波に向ふ、此時風波に障へられ大川浦に着す、浦長阿闍梨孫石衛門大師を請じて崇敬と、有信の徒來りて亦聞法の益を享く、大師親ら一体分身の像を彫む、其後大師洛陽に歸る、衆人相議り報恩のため堂宇を建立す、報恩

講寺は即ち是れあり、什寶は大師自筆の六字名號、御自製櫻木の念珠等あり、南海鐵道深日驛より二里、

著者言ふ大川の慈恩講寺は和泉に属すれども、本縣に信徒多ければ特に此處に掲ぐ

▲大屋都比賣神社

……木種を布き給ふ三神の一柱……

◎大屋都比賣神社 紀伊村にあり、中央は大屋都比賣命、左は五十猛命、右は抓津姬命の三座なり、此の三神は前に記せる如く木種を紀伊に始めて布き給へる神あり、今は縣社たり、昔境内廣かりしも、今は漸く縮少せるは惜しむべし、

▲大同寺と圓明寺

……後鳥羽院御陵……佐野隱山の墓……

……鳴瀧……川口男爵の別荘……

◎南叡山大同寺法華院 六十谷にある大伽藍はそれである、此の寺は大同年間に傳教大師の創建で、平城天皇の勅願所である、本尊薬師如来は傳教開山の自作であるとのこと、昔は寺坊が多くあつて壯麗であつたそうだが、天正の兵火のため焼かれたので、漸く昔の面影を一片に留めて居るばかりである、此寺は天台宗比叡山に属して居るところから南叡山といふのである、

後鳥羽院御陵 といふのは大同寺の後の山中にある、

佐野隱山の墓 園部の柳谷といふところにある、隱山は性質が至つて淡泊で、古の聖賢を友として世の中より遠れて終に此の山中で一生を終つたといふことである、

◎鳴瀧山圓明禪寺 園部村の山手にある、臨濟禪宗に属する寺院である、此の寺もまた、天正年間までは佛堂が山の半腹に建つて、ちかく宏壯なものであつたが、兵火の災があつてから、十分の一に足らぬ有様とあつた、

◎鳴瀧 といふのは圓明寺から西北小川の流の稱である、昔はその名の如く瀑布があつて盛んに落ちて居つたので、夏でも雪を降して居つた、けれど今では川底が高くあつて來たため瀑布の面影も失せ、唯少しの水が三尺位の、巖の間から落つるばかりである、これ新瀧を前の山の半腹から落すことになつて居るが、水は灌漑用の池水を引くのであるから何時でもといふわけには行かぬ、瀧の圍にあるのが不動堂、金剛童子の祠、辨才天の祠等で、何れも昔は深く礎を埋め、古色蒼然たりとも言はうか、甚だ趣の深いところである

鳴瀧の楓樹 此れは亦多いことで、圓明寺の裏山から鳴瀧に行く道、瀧の四面、老木若木の楓樹、霜に飽いて來ると錦を織り出したやうなみの、土橋の邊に立つて見上げ見渡すと、紅葉の水に映つて居るところは、丁度新瀧の美人が鏡に向ふて居るとでも言つて善いだらう、楓の名所としては確かに秋葉山以上であるといふのは偽りでない

(南海鐵道紀の川驛から約一里半)

川口男の別荘 男爵川口武定氏は藩藩士である、維新後に朝に事て官職頻りに進み、海軍主計總監、宮内次官等に歴任せられ、男爵を授けられたが、老年に迫んだので、骸骨を乞ふて鳴瀧の別荘に歸つて、風月を友とし俳句に思ひを遣り、楽しく老を養つて居られる、此の別荘は不不庵といふのである、男の句に

風呂吹きふふふツと吹く風味かな

那賀郡

▲法然寺と九品寺

……孟子不動瀧……國主の淵……貴志の大飯……

◎月光山勢至院法然寺 中野上村大字沖野々にあり、淨土宗鎮西派の中本寺たり、宗祖圓

光大師聖蹟を止めし地なりといふ、

◎如來山蓮臺院九品寺 南野上村大字九品寺よある、法然寺の末寺なり、信徒の詣するもの甚だ多し、

◎不動の瀧

北野上村大字孟子の孟子山不動院那賀寺の右に懸れるもの、孟子の不動瀧といふ、數丈の斷崖より瀉下する水勢は鞆鞆として空山に反響す、境内寂として人寰を遠ざ

かる、寺は眞言宗古義派、京都勸修寺末に属す、

◎國主の淵 中貫志村大字國主の國主神社の前、貫志川の深淵の稱あり、年々三月一日國主神社祭禮の時、神供を神前に捧げ、亦は此の淵に投ず、是れを貫志の大飯といふ、甚だ賑やかある祭典あり、

白岩谷 中貫志村大字尼寺に属するところの名なり、白色の奇石は涇流を挟んで散点せり、昔此の山上の窟に土賊(土蜘蛛といふ)住みて人を傷け、財を奪ひしを討伐したりと傳ふ、此の白石の赤色を帯べるもの、即ち土蜘蛛の血なりと稱す、何れにしても奇石たるを失はず、

此の白石の中に夫燼石、盤石、烏帽子石等の稱を付せり

諸井堰 は國主の淵の上にして、其上に架れる

諸井橋 に立てば風景極めて佳なり、

▲大宮と阿闍井寺

……塔の芝……虎の車塚……櫻池……

◎岩出の大宮 岩出町字宮にあり、本社は三部大権現、熱田大明神の両社あり、日本武尊

の尊靈を尾州熱田より勧請したり(社傳)といふ、毎年八月三十一日の夜、齋刺の神事を行ふ、ちかくの盛式あり、此の時官鐵紀和線によりて參詣する士女、境内境外に填咽す

(岩出驛、舟戸驛より各七丁許)

◎天龍山寶珠院阿闍井寺 岩出村清水にあり、新義真言宗に属する古刹あり、

◎八光山醫王院國分寺 池田村東國分にあり、天平年間の創立にして、田園中に區劃を爲したる法城あり、今は但昔時の半に足らぬ有様とされり、然れども法燈尙は未だ輝けるを見る、

塔の芝 國分寺の西方、金光明寺の廢址なりとて礎石尙存せり、以て佛堂の巍然たりし當時をしのぶに足るべし、
虎の車塚 曾我十郎父の跡を復して富士野の邊と消ゆ、その妾、大磯の虎、尼となり十郎の冥福を祈らんとして熊野に詣で、此地(池田村北大井)を経て身まかりぬ、後の人、虎の乗りたりといふ車を此處に埋め芳魂を吊す名けて虎の車塚といふ、

櫻池 池田村北志野にあり、藩主頼宣公時代、聖さし大池にして灌漑の利頗る大なり、
經ヶ淵と餘岩 は紀和線岩出鐵橋の上流にあり、

▲根來寺と粉河寺

……兵火伽藍を焼く……紅雲満山……
……四靈地……趣味ある庭前……重盛塚……

◎一乗山根來寺大傳法院 新義真言の本山にして、境内に大塔、不動堂、御影堂等あり、松林中に隠見せり、森嚴の氣境外を壓す、不動堂は名高き「錐鑽の不動」あり、櫻樹は境の内外に多く、花時紅雲全山を籠め、士女多く來遊し、池邊樹下觀摩滿つ、巨刹と櫻花好配合といふべし、開山は傳教大師覺鑊、天正十三年三月廿一日豊臣秀吉のために焼かれ多くの堂塔を灰燼せしめ、今は唯大傳法院の一廓を存するのみあり、岩出驛より二十丁、
◎粉河寺 補陀洛山施音寺といへば知る人少く、粉河寺といへば知らぬものあり、西國三番の札所として賽者遠近より集まる、開基は大伴孔子古、草創年代は寶龜元年、孔子古は武夫にして毎に風猛山中に狩す、一日機縁熟して光明を見る、此處において佛寺を建立せんことを發起せ、童男行者來り千手觀世音の像を造る、今現に本殿深く藏せるは此の靈佛なり、

り、その後星移りて漸やく輪奐の美を加へ、伽藍ハ竹林松樹の間に相臨めり、境内御池房の傍に出現の池あり、是れ童男行者出現のところなりと傳ふ、本殿のあるところは光明地といふ、粉河驛より五丁、

傳へ聞く粉河のみづはいかばかりもどのひかりの月もすむらん

家集

◎十禪律院 粉河寺の右手にあり、寶鐸地と稱し大なる青銅の寶鐸は今現に本殿に至る廊下に懸けあり、門額の「寶鐸墜」の三字は藩王治寶卿の筆蹟なりといふ、堂内古佛像あり什寶亦少からず、殊に前栽は小規模なれども趣味頗ふる深きものあり、粉河寺に賽するものは、また十律禪院を遺るべからず、

粉河山内の四所靈地 光明地(粉河寺本殿の地) 斷木地(本殿の右の樟樹) 孔子古光明を感得したる地(出現地) (御

池房の左方、童男行者出現の處) 寶鐸地(十禪律院の地) なり

重盛塚 根來村大字今中の田中にある小丘は小松内大臣重盛の塚なりといふ、尙は同村に重盛愛用の長刀を藏する家あり、此れに就て参考とすべき文書も少なからずといふ、

粉河の祭禮 鎮守二社(若一王子と丹生大明神)粉河寺の後方にあり、例祭は六月十八日にして山車(車樂ともいふ)は各町より出で頗る盛なり、
粉河町旅館 の大なるもの金茂旅館あり、亦藝妓置屋二三あり、

▲長田の観音と富士崎

……厄除観音……怪石に倚る古岳庵……

◎長田の観音 如意山蓮華院観音寺は、粉河の西、長田村にあり、礎は緩く長く大門に連れり、堂塔は松林中に隠見す、厄除の観音と稱し、二月初午に當る日、參拜するもの多く盛なる會式を營む、粉河驛より三丁、

◎富士崎 官鐵粉河驛より約十五丁、紀の川の左岸にあり、奇巖怪石其下を繞り、清流また其の脚を洗ふて行る、老松枝を重ねて辨財天女の祠を掩ひ、古岳庵は奇巖に倚りて紀川に枕せり、古岳禪師隱栖の地、また節齋森田翁の讀書の處なりといふ、禪師の墓は後方山

上にあり、川中にある石を富士石といふ、富士崎の名、此の石に縁る、風光頗る佳あり
夏時涼を納るゝに最好の地といふべし、此地今は陸奥伯の所有に属せり、

森田節齋の碑 龍門村大字荒見に建てあり、節齋翁の門下生は伊部那賀に甚だ多し、

▲光恩精舎

……信譽上人開基の靈場……

◎懐岳山正清院光恩寺 小倉村大字大垣内にあり、淨土宗鎮西派に属し、中本寺たり、當寺は天正年間信譽上人禿翁惠傳和尚の開基にして、堂塔壯麗ありしが、風害と火災に罹りて全く靈場も寂寞の郷と變じ、礎石のみ徒らに雨露に打たれ草莽中に散在せり、飯堂中本尊と開山上人を安置し、常行念佛の聲、四邊に徹す、近時再建の舉あり、

▲龍門山と飯盛山

……古戦場の址……龍門の風穴……

……蠶種の貯蔵……飯盛銅坑……

◎龍門山 長峰山脈の高峯にして、其形富士山に似たりとて紀州富士といふ、粉河驛より富士崎の渡を越へ、勝神を経て登るを順路とす、山上に登れば紀川は帯の如く、近く粉河名手、橋本、岩出の名邑を臨み、遠く和歌山の市街を瞰ることを得、葛城連峰と川を隔て、相對す、山上の風穴は關西第一と稱せられ、蠶種貯蔵所に充てらる、此の山は南北朝時代に於ける戰場たり、城壘山腹にありしといふ、

◎飯盛山 其東方に連れる山にして、此れ亦北條高時の一族が壘を築きて守り、楠廷尉に滅されし處ありといふ、

銅山 は此の山中にあり、鑽石を鐵索に依りて紀川に運ぶ、山下の水は黄色を帯ぶ、亦赤沼田銅山といふ、



伊都郡

▲妹背山と文覺堰

……紀川の名所……文覺の遺徳……

◎妹背山 笠田驛より數丁の下、紀の川南岸にあるを妹山といひ、北岸にあるを背山といふ、其中間紀の川にあるを船岡山と言ひ、小島の形を成す、緑樹蔭暗くして、風景尤も佳かり、瀛車に乗りて行けば、唯一瞥を與ふるのみあるを憾とす、

◎文覺堰 笠田村にあり、此地昔、山城高尾の神護寺の領地たり、文覺上人高尾に住みたるが、後紀伊に來り、高野熊野に詣で、其途中笠田邑に暫し錫を留む、地、灌漑水に乏しきより文覺是れを拯はんとし山手に堤塘を築き堰と爲し、以て田園に灌ぐ、毎年七月廿二日加世田神社に於て、上人報恩のため法華會を修すと云ん、

▲應其寺と小田堰

……紀伊の大堰……木食上人の開基……

◎應其寺

中興山普門院といふ、古義真言宗に属し、木食應其上人の開基せる寺院あり、

◎小田堰

小田村よりあり、元祿年間大畑某の修築したるところ、伊都那賀二郡に亘り、數

百町の耕田を潤す、蓋し紀伊に於ける大堰あり、

▲隅田の八幡と落合不動

……橋本……名倉……

◎隅田入幡宮

隅田村大字垂井にあり、應神天皇行幸の址ありと傳へ、附近村民の崇敬甚

だ深し、

◎落合不動

橋本の上、吉野川の末流、紀の川の上流、巖に彫める不動尊は千古不磨の靈

像あり、地、風塵を避け、風物觀望に値す、

橋本驛 人口多く、繁昌の地にして、旅舎相臨あり、橋本館、高梁館等は大なるものなり、大和路より來る
登山客は此處よりす、

高野口驛 名倉村、官鐵高野口驛といふ、附近に家建ち並び、漸く賑へり、旅舎大なるもの東雲館といひ、葛城
館といふ、和歌山より高野山に登る者は此處より九度山を過ぐ、

▲高野麓の名所

……天野神社……慈尊院……刈萱堂……

……袈裟掛石、捻石等……

◎天野神社

丹生津比賣命の鎮座まします社で、高野山の鎮守である、境内に高野御子神

氣比大神、嚴島大神も祀つて居る、寶藏には寶物が甚だ多い、

◎高野麓の名所

矢立峠から高野山の大門を行くまでに、袈裟掛石、捻石、涙川、押上石

鏡岩等の宗教上の名所が多い、高野村大字西郷字神谷に赤穂の家臣村上兄弟營討の處があ

る、不動阪は神谷からの上り口であつて、阪の両側は杉檜が生ひ茂つて晝でも暗い、

神谷の旅館 花市を始めとし花本館、花の家が盛んである、

◎川萱堂 學文路村にある、名高い川萱物語りで知らぬ人があゝ、石堂丸の止宿した玉屋も亦此村にある、

◎慈尊院 慈尊院村よある、弘法大師の母君、暫らく住居せられた處である、それで此處に慈氏寺(慈尊院)を建てられたといふことである、

千石橋は河根にある、長い橋が山川に架つて居るところ、時ならぬ虹のやうである、

▲ 眞田庵と龍王溪

……池中の蛟龍……大阪陣の名將……

……幸村手植の松……眞田淵……

……龍王溪……龍王祠……

……奇石怪巖……溪流玉を砕く……

◎眞田庵と龍王溪 これは伊都郡九度山村の名所と舊蹟である、龍王溪は高野登山者が必ず見るであらう、けれど是れが龍王溪であると、知る人が少あゝ、眞田庵は九度山の片邊にある、これも知る人は餘り多くあるまい、龍王溪は清き響を立て、流れてゐる、眞田の松は古英雄を吊ふ聲を立て、欝つ、溪と松、二つのものは九度山を美化して居る、尤も善い教化の物件である、

▲眞田庵の清閑の室に座して居ると、幸村が植ゑた、故阿波守昌幸墓側(小竇篋印塔)の松は歴史を語り、坐に古英雄隱遁の事蹟が偲ばれる、眞田庵は伽羅陀山善名稱院といふので、本尊は地藏菩薩、鎮守の社には地主権現、稻荷明神、金毘羅權現、天滿天神、住吉明神を祀つて居る、庵王眞出智教尼は律を守つて行儀止しい、阿波守の遺品六文錢の船蒸、幸村作木製鐙、これは幸村が水馬を眞田ヶ淵(龍王溪の下流)に試みた時に用ひたもの、阿波守作木製の犬、これは息女お市の方の翫弄印で緞襖を彫刻である、幸村父子の遺品ばかりで

さい、亦楠公の飛馬の印といふのがある、黒檀に細く馬を彫刻したもの、楠公は午歳の生れであるから、此印を使はれたものだといふ、楠正成公の位牌もある、それは古いもので表面に「贈正三位左近衛中将橋朝臣正成尊靈」として右に「丙建武三曆」左に「子五月二十五日」としてある、豊臣家に忠を盡した真田と、後醍醐天皇に奉公した楠と、その忠義には大小があるけれど、道は同じである、何故真田庵に楠公の位牌があるかといふに、開山大安上人は楠家の裔であるからたこのこと、忠臣義士當年の面影を遺品に、亦是位牌に見たものは、蓋し覺はす襟を正すであらう、高野山の井村真琴翁、真田庵の縁起を書かれた、末に、

雲をよぶ松にむかしをしのびけりうさなだが住みしあとの庵に

眞 琴

著者も亦此れに倣ふた、

雲をよぶ松にむかしをしのびけりうさなだが住みしあとの庵に

寺内に開山大安上人の廟所もある、上人加持の砂を収めた土砂堂もある、それから地藏尊

の石像は小さい厨子に入れ昌幸墓所の傍に安置してある、真田は代々信州上田の城主であつた、阿波守父彈正忠幸隆は武田氏に属した、信玄が死んで勝頼の代になつて、武勳の多い真田一家は跡部、長阪のために隔てられた、勝頼は遂に天目山の露と消ぬる、真田は上田城で防戦した、後に織田家と和を結んで豊臣家と結托する、秀吉薨去の後、關ヶ原の合戦にあつた、此時真田の向背は至極難義であつた、そこで幸村の兄伊豆守信幸、弟隱岐守信尹は徳川公に歸し、昌幸と幸村は石田に味方して上田城を守つて居る、此時に徳川公の石田と上杉を前後に控へて進退谷つた、そこで信尹等に父兄を説かした、けれど阿波守父子は義に仗つて聴かぬ、シカシ石田が脆くも滅びた後に、阿波守父子は相談して上田を立ち退き、天下の動靜を見やうと紀州高野山へ來た、それは慶長五年の十月九日のことである、暫く菩提寺である、蓮華定院に居つたが、何時までも此寺に居るといふわけに行かぬから三里麓の九度山に小やかた家を建て、閑居することゝあつた、時を待つ蛟龍、池中に潜む形とは此のことである、真田庵のあるところは閑居の址である、昌幸父子は此處に、

家臣は九度山に、昌幸の夫人は丁の町に各々分れて住んで居つた、丁の町の平岡姓は眞田家の子孫であるといふほどだ、九度山の松山又兵衛方は眞田が来た時の宿であつたので今にも福島正則から眞田へ贈られた書状がある、大助幸安は九度山で生れたのである、眞田紐は生計費を得るために製織したものである、豊臣秀頼遂に關東と戦端を啓くに當つて、眞田幸村父子を招いた、それは慶長十九年であつた、シカシ時利から幸村は茶臼山の露と消ぬ、大助は大阪城内で秀頼に殉死した、豊臣家と眞田家とが滅亡して百餘年の後に、大安上人が此地に来て、靈夢に感じ草の中に埋れてあつた、安房守の碑を掘り出して、佐羅陀山善名稱院を創建したのである、

▲▲▲ 眞田庭で古英雄を偲び、幸村水馬の眞田ヶ淵を見て、更らに其の上流、即ち龍王溪を見たならば、如何に趣味が深いであらうか、溪は高野街道(九度山より惟出に至る間)の下、善女龍王の小祠がある、そこで逝れた粉河の兒玉翁が龍王溪と名づけられたのである、眞田ヶ淵の深碧、風が來るとさきは繪具皿の藍を揺ぶるやうで、龍蛇潛んで居るかど

疑はれる、淵に落つる水は聲を立てず、物凄いはかりである、それから上流に行くと、奇石怪巖縦横錯落、苔は滑かで水が清い、即ち水落ち石出づるの趣がある、七月のころにあると此の溪間が杜鵑花の花盛りで水を染めて居る、石を形容して見ると、高く立つて居るのは虎のやうで、扁いのは臥牛のやうで、井戸のやうで、倒れさうな屏風のやうで、千態萬状あか〜面白い詠である、景色は確かに九州の耶馬溪のやうであるといふ人がある、

▲ 龍王溪を見る ▼

明治四十一年七月上旬

眞田ヶ淵は底深く

龍王祭る社寂び

奇しき巖は苔むして

杜鵑花、花咲き紅に

色に染め出る川水に

流れの力わとめて
岩に堀井の敷多く

わらひつゝ行く水の聲

清きひびきは長へに

奇しき工をたへつゝ

九度山の旅館は森劫を第一とす、夏時紀川の香魚膳に上る、香氣味ふべし、

▲高野山

……八葉の蓮峯……密宗の大道場……

……古文書の淵源……靈光末世を照す……

◎高野山 伊都郡の東南部に聳へたる法嶺にして、實に海拔三千尺、夏尙は清涼の氣境内に満ち、世の塵を留めず、大小の峯巒をその脚とし、内外八葉蓮華峯はその上に居然たり山嶺廣潤なるところ、金堂、御影堂、金剛峰寺其他精舎を以て充せり、殊に金剛峰寺の内

陣の如きは、その莊嚴海内に比をしといふ、當山には實に千有餘載の什寶と古文書とは寶庫に充溢せり、近時考古の資料を此の山に求むるもの多く、大家の登嶺隨を接げり、歴代帝王の宸翰、繪旨、院宣、令旨、大師の眞蹟、經卷、公卿武將の墨痕等枚舉に遑わらず（詳しくは寶簡集を見よ）、弘仁八年宗敎界の偉人空海此の地を相して、密敎の本源道場とす、誠に故あるあり、さればにや法燈高く末法の世を照し、大師の遺徳を瞻仰するもの、時に來りて靈地を踐み、法縁の熱せるを喜ぶもの、如し、境域は東は摩尼嶺より西袈裟掛石に至り、南は相の浦より北廬生の峯に至り、約二里半に迨べり、山内には西院谷、壇場南谷、一心院谷、五之室谷、千手院谷、本中院谷、小田原谷、蓮花谷、奥の院、谷上、東谷の稱あり、女人結界の禁嚴重なりし爲め、大師の母堂、内親王殿下、攝家の姫君も此の靈域に入るを得ざりき、明治四十年に至り山規弛み、女人登嶺の自由を得るに至れり、亦山内管絃を禁せらる、尙ほ商工業を營むをも禁せられしが需用者加はり、遂に今日の如く店舗を駢ぶるに至れり、眞言宗大、中學林を設け、學徳扶植に勉めつゝあり、碑石は境内

老杉の間に累々たり、其中、駿河大納言の墓碑は尤も大なり、

あかつきを高野の山に待つ程やこけの下にもありあけの月

寂蓮法師

亦杜鵑の落文といふものあり、

落し文開き見られてはとゞきすこのはつかしき音をや泣くらん

高崎正風男

山上に立てば、阿波、淡路を霞の中に臨むべく、金剛山を見るを得べし、高野口の村落、森漫たる南海をも雙眸中に聚むることを得べし、

和歌山よりすれば高野口より、大和路よりすれば橋本驛より、何れも紐の川を渡りて登るを順路とす、高野口、橋本驛より四里

著者言ふ、高野山の記事甚だ簡なるは限りある紙上に盡すを得ざるに依る、



本編には一市三郡の名所と舊蹟と出せるのみなるも、有田、日高、東西牟婁の四郡に就ては目下調査中なれば此れ亦遠からず出版の期に會すべし、四郡を後編とすれば、此れを前編と言を得ん、發行の時來れば、幸に併せて一覽を給へかし、(墨城謹白)

附 錄
繁昌なる和歌山

繁昌なる和歌山

我が和歌山は人口約七萬を有する地あり、此處に店舗を張れる商店、宏壯なる會社、銀行、醫院、新聞社、料理店、劇場、其他一般に互れる繁昌の模様は左に略述す、此れは唯だ著者が見たるところの一端なるも、事實に於ては、より以上の繁昌を呈するものあるべし、嗚呼盛なるかな、南海の大都會、

雜貨店 富美屋

▲▲富美屋の名は開店と同時に喧傳せらる、舶來品の眞價を解せる紳士、淑女は其店に集るを以てあり、文房具、化粧品、洋酒食料品、舶來煙草、庖厨具、銀器、グラス其他の雜貨に至るまで、悉く歐米製造品の粹を蒐めあり、物品の排列に意を用ひ、信用ある輸入品を撰擇しあれば他店の企及し能はざる所、開店の日尙は淺しと雖も信用日に厚し、

至らしめたるは、久島頭取の力ありとは言へ、亦以て浦野取締役の與りたる力少なからず且つ行員一致預金者に満足を與へ、取引上に於て頗る手堅しとの評判なり、

池田舶來雜貨店

電話三五〇番

池田雜貨店は本町二丁目にあり、主人は着實熱心にして、秩序的に其の業を經營し居れり全店にて販賣せる雜貨は特に精撰せるは言ふも更あり、店主店員は一致して、客に接し親切の力、能く客足を延けり傍洋服、トンビ裁縫を爲す、

小笠原時計店

小笠原時計店は和歌山市に於ける時計商の先鋒たり、隨ふて老舗たること言はずもがな、位置は本町二丁目の東側にして、店頭装飾、其の微も至るまで注意し、金銀時計、指環其他美術的的金属製品は光輝燦然たり、蓋し市の時計店中信用の第一位を占むるものといふべし、

宮崎商店

宮崎醬油醸造場は本町五丁目にあり、店頭「丸傳」の商標ある菰樽は山積し縣内に販賣する

は言ふまでもなく、支店を大阪西區北堀江(高臺橋北詰)に設け陸海軍に上納を爲し、且つ遠く清國、韓國に出張店を開きて盛んに輸出販賣せり、既に全國名産博覽會に於て、一等賞金牌を受領したり、然れば縣下醬油醸造地たる有田郡湯淺の製品を凌駕するは、蓋し其品質の佳良なるに於て証明せり、年々醸造高は當市に於て最多額を示し、益々品質の改良と販路の擴張に勉め居るは、皆人の知るところなり、

島村清酒醸造場

電話四九番

醇良清酒天長の名を口にすると同時に、和歌山市本町七丁目島村醸造場を聯想せずんばあるべからず、場主島村安次郎氏は内に清酒醸造に力を用ひ、外にありては公共事業に盡せり、現に和歌山水力電氣株式會社社長として、其の附設の電鉄經營に熱衷し居れり、島村醸造場にて製造する、清酒は年々に多額に上り、其輸出先は内國は言ふまでもなく海外にも及ぶ、芳味佳良、優に灘産と角逐するも劣らざる精製酒たり、本町七丁目を過ぎれば忽ち黒色の屋瓦は双眸に入る、是れ即ち島村氏の醸造場にして、信用厚きと共に清酒の賣行も年次を逐ふて、多額を示しつゝあり、四十二年春、和歌山縣清酒品評會に於て、清酒天長は就て、一等銀盃を受く、

旅館 富士屋

電話二六五番

一二六

本町三丁目に宏壯の構へを爲せる、旅館富士屋は、旅客の信用を失ひし正木氏の後を受けたる、當主近藤宇吉氏は一意専心に旅客の待遇法を改め同時に客室を増築し、親切を旨とし、従來の面目を一新したるより再び旅客の投宿頻々たる盛運に入れり、而して館主は富士屋を經營すると共に、大阪大黒橋畔の旅館壽老館をも管理せり、今や館主が苦心計畫の効、空しからざるは、一誠以て貫けるものといふべし、

三井銀行和歌山支店

長電話六九番

資本金五百萬圓積立金千五百拾萬圓の三井銀行は、明治六年和歌山支店を本町二丁目東側に置く、支店長は慶應出身の川上熊吉氏にして、行務を整理し、縣下經濟界の状態を考察し、國産誘掖の点にも注意し、敢て投資を拒まず、店務日に舉り、遂に従來の家屋の狹隘を感じ、明治四十一年九月工を起し、新築に着手し四十二年四月上棟せり、支店長は温厚親切の人、能く人と交る、店員も亦支店長に倣ひて親切あり、

菊池舶來雜貨店

電話二二八番

菊池雜貨店はアラクリ町と通稱せる米屋町にあり、古くより舶來雜貨の輸入販賣を爲せり、店主萬藏氏は業を義知氏に譲りて退隱せり、營業日に熾にして、顧客時に群至す、同店にては時の流行品は悉く、是れを輸入し來りて店頭陳列し、常に時代嗜好の魁を爲せり、亦店舗修飾法に注意を拂へり、蓋し其の業の盛んなるは當然あり、尙ほ全店にては裁縫部を匠町に置き洋服等の裁縫業を兼營せり、

やまき呉服店

長電話二二〇番

やまき呉服店は菊池雜貨店と相對せり、市内呉服店中の鏘々たるもの、金繡の燦たるものより下りて一尺の布片に至るまで、悉く求めらるべく設備極めて巧あり、染織上の技備は言ふに及ばず、同店より直接京都の染屋、或は機元に命じ華主に満足せしむ、近き頃益々店舗を擴張し、接客の禮は至れり盡せり、支配人長谷川佐太郎氏は熱心着實の人、率先店員を導きて倦まず、是れを以て店頭益賑へり、

紀陽貯蓄銀行

電話二二番

(橋向丁支店二二〇番)
中之島支店二四二番

紀陽貯蓄銀行和歌山縣内に於て貯蓄銀行として成功したるは紀陽貯蓄の外にあり、全銀

一二七

廣伊商店

電話二四五番

廣伊商店は橋向丁にあり、紀州土産附油の本来にして、廣伊といへば直ちに芳香郁々たる鬢附油と、精製せる香油のまへ香とを聯想せしむ、同店は更らに支店を設けて益々擴張の方法を執れり、本支店主は着實の人、店員亦客に接して親切あり、同店の信用あるは即ち此れが爲めあり、

岡崎時計店

和歌山市本町一丁目(駿河町入口)に店を構へ居れる岡崎時計店は、時計の外貴金屬の製作品をも商ふ、店主清次郎氏は親切にして商品は確實あり、さればこそ日々顧客店頭は満つ

島村油店

電話一四〇番

新通四丁目名産鬢附油製造所あり、島村本店是れなり、精製せる鬢油は以て和歌山市を世に紹介するに於て有力なるものあり、鬢附油と紀州、蓋し好對の言辭をらすや、店員は親切に客に接し、年々の賣上高甚だ多額を上げりとの評あり、フョー香油の名亦高し、

前田清酒醸造場

電話三八番

前田清酒醸造場は橋向丁の北、柳町にあり(場主前田龜之助氏)高き屋根は先づ普通の商家をらざるを標榜し、李白をらぬ人も亦鼻を撲つの香氣、覺へず垂涎せしむるものあり、同醸造場にて製する清酒「福正宗」春光等芳味掬すべく醇味舌を鼓するに適すとの評あり、

竹中糸店

電話二四六番

竹中糸店は鍛冶橋西詰南即ち三木町中の丁にあり、紡績糸を販賣し居れるが、年次を重ねて華主縣下に多く、糸荷出入、日に幾百回あるを知らず、店主竹中源助氏は今や店務を擧げて、嗣子兵四郎氏に譲りたり、兵四郎氏亦摯實に其業を守りて、商運日に啓け行き、家庭融々春の如く、店員着實にして、分家せしもの多數あり、源助氏は市會議員たり義侠心に富み、公共の事に盡す、家運の隆盛、商況の繁賑は蓋し積善の餘慶にあらずや、

和歌山商業會議所

電話三番

和歌山商業會議所は元和歌山市役所の參事會室を使用せしが、明治三十九年二月祝融の災に罹り、三木町堀詰の共濟會に移りて事務を執れり、會頭は垂井清右衛門氏にして、書

記長は小池氏あり、會議所は曩に和歌山電話交換局設置に盡力し、遂に其成功を見たるは多とすべし、亦市の商工業に就て貢献すること多大あり、明治四十一年の秋元山崎銀行跡に移轉せり、

旅 館 九 橋 館

電話三五八番

九橋館 城櫓の如き客室ふ入れば、市中の九橋を双眸に集む、故に館の名とす、館主は旅客に接して親切に、亦義侠に富めり、九橋館の前は表橋にして、花岡醫院と相對し後に新築地を負へり、

淺井寫眞館

元寺町一丁目の淺井寫眞館は明治十三年十月十七日の開業にして四十一年に至り三十周年に當れり、同館の寫眞は優美高尚にして殊に最新式高等器械を完備し、晴雨を論せず、撮影の設備成れり、技術者は亦熱心にして且親切なり、

登録商號

名方パン製造所

電話六一五番

名方パン製造所 山蔭町にあり、持主は名方吉兵衛氏、日高郡の出身あり、明治二十二年に渡米し、米國ローサンゼルスのレストランホテルに於て、パンの製造法を研究して歸朝し、明治三十四年現在の處に開店したるが、店務日に擧り以て今日の盛況に臻れり、明治三十六年秋十月、皇太子殿下和歌山に行啓徳義社を御旅館に充てさせられし砌、パンの御用を拜したり、去れば吉兵衛氏は一代の光榮として謹んで恩命に酬ひ奉らんため、自ら沐浴齋戒、其製造に従事し、殿下四國へ立たせ給ひし際も御用の御準備として、食パン一箱の御買上を忝ふしたるは光榮涯りあしといふべし、明治三十九年京都に開きたる、第四回内國製産品博覽會に於て進歩二等銀牌を授與せられ、續て全年同地に開きたる戦時紀念博覽會に於ても亦進歩二等銀牌を授けられ、明治四十一年和歌山市物産品評會に於て三等銅牌を授與せらる、全年特に森懋氏の盡力に依り「菱」の商標を登記し同時に「名方パン製造所」の商號をも登記するに至れり、全店の今日あるを致せるは、氏が熱心研究と親切とに基因するものといふべし、登録商標は「菱」の中に「N」あり

小山自転車店

小山自転車店 元寺町二丁目にあり、主人は頗ぶる快活よして熱心に華主を遇し、開業

望海樓△△和歌公園麓山の下にあり、望海樓趾の下あるを以て望海樓と稱す、料亭と旅館を兼ね華客の投宿頻々たるより、舊第の狹隘とあり、遂に三層樓を新築す、樓下に球戯室あり、親切なる樓主は能く客を喜ばしむ、尙ほ同館西手に二階平家の建増を爲し、平屋建を輕便料理店と爲す、

片男浪館

片男浪館△△は片男浪に近き處に建築せる旅館兼料理店あり、海水浴場として好適せる、濱に近きを以て旅客の遊樂に恰當なり、

山東舶來店

電話四六四番

山東舶來店△△駿河町の山東舶來店といへば知らざる人あり、同店にては舶來雜貨の外に各種眼鏡をも販賣せり、價額は正確、品質は佳良にして顧客日に多きを加へ來れり、

和歌山俱樂部

電話一〇八番

和歌山俱樂部△△九番丁にある、料理會席兼旅館にして、庭園の風致に富み、庖丁亦精なり

和歌山城に對し、高樓を駢べり、園遊會場にも適せり、

齒田自轉車店

齒田自轉車店△△元寺町壹丁目あり、修繕は敏速にして巧妙あり、同店の販賣にかゝる自轉車は堅牢ありして、價格も低廉顧客日に多く集る、

栖原時計店

栖原時計店△△十三番丁に開業せり、店主は頗る交際廣き人として開業は淺きも店頭既に購客を以て充つるの盛況を呈せり、時計、貴金屬製品、寫真材料、蓄音器をも販賣せり、

清水吳服店

清水吳服店△△本町一丁目北角(ぶらくり丁入口)あり、同店は老舗として、一定の顧客を有し、店主店員相共に客に接して親切あり、地は市内目貫の所、價格は確實にして、日に繁昌せり、

旅館 中村屋

中村屋||表橋北詰にありし中村屋は、顧客多く家屋狹隘を告ぐるより、舊宅の西北へ入ることろに改築し、諸般の設備完整せり、館主客を遇するに亦親切あり、

原庄右衛門氏

電話四二番

原正組||といへば當市に於ける、土木建築請負業として既に其名高し、主人原庄右衛門氏は十七八年の頃、日本土木會社に入り、軍用工學士三好清之氏に就き實験を積み、以來各地の土木建築工事に従事す、明治三十六年父庄右衛門氏死亡す此處に於てか、父の遺業たる土木建築請負業を經營す、縣内の大小工事を請負ひ、確實よして其効果顯著あるより上下に信用厚し、當主より三代前、既に此業を始む、湊本町一丁目海陸運搬部を置き、海草郡四ヶ郷村大字新在家に煉瓦製造部を設けあり、店員の多き同業者中一冠たり、

西本健次郎氏

長電話四五五番

西本氏||土木建築請負業を営むこと久く夙に其の名を知らる、當主健次郎氏父祖の業を繼ぎ亦盛んに請負業を擴張せり、同氏の設計に成る土木工事亦尠ならず、着々功果を收めつゝあり、

伏虎園

伏虎園||扇の芝に近き、紀州テル組合事務所隣れる百花園の名稱なり、園主は夙に斯業に従事し、經驗を積み、園内珍花、奇草、趣味ある樹木甚だ多く、四時花を見ざる時をし園主は最も熱心に、此業を成効せんと勉めつゝあり、尙和歌浦町に設置せる、和歌浦薔薇園に就て頻りに熱衷し居れり、

麵類商 岡 徳

本町一丁目

岡徳||といへば和歌山市麵類商の首位にあり、和歌山に入るものにして岡徳を知らざるものさけん、價廉あると精製せる点に於て、確かに客足を延くこと頻繁あり、

荒木醫院

荒木内科産婦人科院||東長町三丁目湊南尋常小學校西側通り筋にあり、院主荒木新次郎氏は東京帝國大學に於て、斯學専門大家指導の許に研究し、尙は引續き公私病院及び其他に職を奉じ、良國手たるの名を博すること九年、後現在の地に移り、四十二年一月廿日を以

て開業す、然るに開業日尙は淺きにも拘はらず、患者四來し、氏の確實にして熱心と、多くの經驗とより來れる治療を受くるを喜ぶ、氏人となり寡言にして篤實、信を守りて心を動さず、之れ信念あるにあらざれば能はざるあり、

今井醫院

▲▲▲▲今井醫院—小野町二丁目にあり、院主今井清氏は軍醫として就任中、廿七八年役に參加し功勞あり歸りて小野町三丁目に開業す、更らに三十七八年役に從軍して戰功あり、日露役終り亦賞を授けられ、遂に職を辭して歸市し、自宅に於て診療に従事す、明治四十一年五月小野町二丁目に移轉開業す、氏の特意とするところは内科にして、殊に小兒科、皮膚病に多くの經驗を積り、就中胎毒治療に於ては尤も精しく、該病患者は十里を尙は且つ遠しとせずして集る、氏は頗る温厚にして誇らず、着實にして虛榮を銜はず、刀圭家として推すに足る人といふべし、

吉田内科院

▲▲▲▲吉田内科院—は市内湊本町二丁目にあり、院主醫學士吉田彦一氏は明治三十年三月和歌山

中學校を卒業し、全年第四高等學校に入り、醫科を修學し、三十四年七月同校を卒業し、全年九月京都大學醫科大學入り、三十八年十二月を以て、豫定の如く卒業したるが在學中は毎に優等の成績を示し、好刀圭家の稱ありき、尙は引續き全大學附屬醫院内科部に於て助手として勤務し、内科を専門に研究したり、越へて明治四十一年九月十日現在の所に開業せり、氏が開院せりと聞かや、患者は四來し、氏も亦熱心に治療を爲せり、氏人となり快活にして謙讓の美德内に溢れ、前輩諸氏を推して自ら下る、開業日尤も淺しと雖も、此の盛況を呈するは、蓋し徒爾にはあらざるなり、

丸山醫院

刀圭家としての丸山脩己氏は其術に精しく、紳士としての丸山氏は亦間然するとあるをし術茲に成りて、名亦彼れよ施し、患者の來ること多し、(醫院は三木町中の丁にあり)

花岡醫院

三木町堀詰

▲▲▲▲花岡醫院—院主を花岡芳則氏といふ、外科に於て蓋し和歌山に其の術を較するものあるべし、氏は温厚にして人と名を競はず、世お術はず、熱心よ患者を治療する外、他の念を

し、年を追ふて患者の來集繁くなりたるを以て、病室を新築せり、内川に臨みたる、其病室中、親切なる院長の投藥療治に頼る患者極めて安心に亦幸福ありといふべし、

木下眼科院

三木町堀詰

木下行道氏は夙に眼科専門醫として名あり、年々歳々眼病を患ふるもの多く、皆來りて木下眼科院の門を潛る、治術は精にして、患者に接して親切なり數十の病室、今は全く空室を見ざるの模様あり、以て氏が施術の如何なるものなるやを知るは難からざるべし、

桑原醫院

電話四三四番

▲▲▲桑原醫院は本町三丁目開設しあり、院主桑原祐吉氏は明治十七年東京大學別科醫學卒業、其後元和歌山醫學校教諭となり、後進子弟を訓陶し、宮城縣石巻病院副院長、縣内新宮町熊野病院長を経て、其術を研鑽し、明治三十二年本町に開業せり、氏は温厚の人薄資者には進んで施療し、一般患者に接して親切あり、現に和歌山縣醫會の重鎮たり、

鈴木醫院

▲▲▲鈴木醫院院主鈴木謙藏氏は日高郡の出身にして、三十七八年戰役の際、陸軍二等軍醫を以て從軍し、役終りたる翌年即ち明治三十九年六月元寺町一丁目に開業せしが、氏の術を知り、門に集るもの日に加はり來れり、

神田醫院

電話五三三番

▲▲▲神田醫院は雜賀屋町にあり二十有余年を經過したる醫院あり、

中村齒科醫院

電話三一三番

▲▲▲中村齒科醫院は米屋町濱にあり、院主中村好正氏は西牟婁郡三舞村の人、齒科専門醫學校を卒業せり、氏在京中齒科研究會を設け、副會長兼質議調査委員たり、其術に精しきは、研鑽の効多きに依るあり、明治廿五年歸縣今の處に開業す、縣下齒科醫の先進者として亦齒科醫開業者の嚆矢あり、

高石齒科醫院

▲▲▲高石齒科醫院は福町にあり開業日淺きも、術の精巧なるより、治療を受くるもの日に多くあり、

和歌山紡績株式會社

電話 園六五番
電話 二四番(分工場)

本社所在地

和歌山市傳法橋南ノ丁

分工場所在地

和歌山縣海草郡中之島村字向芝

創立年月日

明治二十年九月二日

資本金

九拾萬圓

諸積立金

貳拾貳萬四千二百五拾圓

錘數

貳萬八千八百七拾貳錘

製糸額

一日 四十玉入 六十俵

製糸用登錄商標

社章 日鳥 三犬兒

重役社長

南 楠太郎

常務取締役

高橋彦兵衛

取締役

石田 庄七

全

松井伊助

全

遠藤美之

監査役

浮田桂造

監査役

宮本吉右衛門

全

北島七兵衛

和歌山織布株式會社

電話 園三三番
電話 三九番(分工場)

明治廿六年二月十六日 資本金貳拾五萬圓を以て創立

全 三十年八月十六日 拾萬圓増資

全 四十年三月十二日 參拾五萬圓増資

計現在資本金額七拾萬圓

本社所在地

和歌山市傳法橋南ノ丁三番地

全 敷地

三千四百廿七坪余

紡績機械

八千五百余錘 英國フラット兄弟社製

織布機

三百三十六臺 英國フラット兄弟社製
ハツタールスマツキンソン社製

一日織布高

約貳萬碼

職工總數

約八百人

分工場所在地

海草郡宮村大字手平

敷地

八千五百余坪

紡績機械

一万八百錘 英國スモーレー社製

織 布 機 四百十六臺 全

分工場は四十年三月廿九日起工、工學士片岡泰氏顧問の下に築造せられたる、理想的工場にして四十二年四月三日竣成し最早機械の据付終り、目下盛んに執業しつゝあり、營業 綿糸綿布製造販賣を目的とす、

三十八年より四十年に亘る六期間は參割の配當を繼續す、四十一年上半季は大勢の悲調と共に年當割六分の配當より視るを得ざりしも分工場を開始したれば、爾後復活の見込なきにあらざるべし、

銀行 兼營 和歌山倉庫株式會社

電話三二二番

和歌山倉庫株式會社 明治廿六年六月故津村重兵衛氏初め實業者の發起を以て和歌山市十番丁に於て倉庫業を目的とし、和歌山倉庫株式會社を創設し、爾來津村重兵衛氏專務取締役となり、倉庫を建築し、物貨の集散に偉大なる便益を與へ商工業者の發達を計れり、明治二十八年五月に至り尙進んで貨主の便利を希圖し、銀行の兼營を開始し、現今の名稱を用ひ、倉庫業と相俟て取引者をして、遺憾なからしめ、今に營業しつゝあるなり、實に和歌山市に於ける斯業嚆矢にして、常に顧客は便利を唱贊して止まざる所あり、而して津

村重兵衛氏は去年死没し、取締役前島十次郎氏以下專務とあり、熱心事務に従事し其責任を盡しつゝあり、支配人宇治田眞作氏は創業より營業事務に従事し、常に取締役の重務を補佐し、全般の處理其當を得、致々業務に努め今尙は現任しつゝあるあり、而して現今の役員は左の如し、

- | | | | |
|-------|--------|------|---------|
| 專務取締役 | 前島十次郎 | 取締 役 | 根來作太夫 |
| 取 締 役 | 津村紀 陵 | 全 | 廣 田 善 八 |
| 監 査 役 | 小澤 阜 一 | 全 | 中 谷 忠 八 |
| 支 配 人 | 宇治田眞作 | | |

和歌山水力電氣株式會社

電話 園七一 六〇六 番

和歌山水力電氣株式會社 岡山町にあり、市内は言ふに及ばず、海草に互りて点燈及び動力の供給多額に上り、且つ電車は二月を以て和歌山市驛より和歌浦に開通し、日々二百圓内外の收入あり、尙ほ進んで黒江日方よまで及ぼさんとする計畫中あり、

辨 天 座

辨天座||和歌山演劇株式會社所有の辨天座は三番丁にあり、宏壯の建物にして二重舞臺あり、されど悲しいかき、南方に偏在するを以て觀客の足を延くに充分ならず、

大黒座

大黒座||は鍛冶橋西詰にあり、構造甚だ宏壯なりといふを得ざれども、觀客を集むるに適當の場所にして、紀國座に亞がり、

琴幸商店

琴幸||といへば福町にある、琴三絃、及び和洋樂器商の商號なり、主人を板原幸吉といふ熱心にして親切、價格確實低廉なるため、華主を多く有せり、

和歌山新聞株式會社

電話七二番

和歌山新聞株式會社||より發行する和歌山新報は、常に勁健の筆致を以て、扶弱控強の精神を發揮しつゝあり、同新聞は六ペーパーあり(十番丁)

紀伊毎日新聞社

電話四〇番

紀伊毎日新聞社||は六番丁にあり、同社より發行する紀伊毎日は趣味豊富にして世の歡迎を受け居れり、

四十三銀行

電話六六番
四三番(重役支配人専用)

四十三銀行||は十一番丁にあり和歌山市銀行中の第一位を占む、資本金壹百五十萬圓、積立金六拾參萬五千圓、頭取は宮本吉右衛門氏にして、總支配人は北代達枝氏あり、亦内田支配人は常に頭取と總支配人を補佐して行務刷新に勉め、基礎日に強固となる、預金者は大に満足し居れり、

農工銀行

和歌山縣農工銀行||は縣廳前にあり、農工業者に資金を貸與し實業の振作に勉む、温厚なる岩橋支配人は謹嚴なる谷井頭取を助けて行務の進行を圖り、預金と貸附に對しては其取扱振り極めて親切あり、

正油店

正油店 寄合町にあり、此店は創業頗る古く、鬚附油、香油の販賣日に多く、紀州名産として恰適の品なり、顧客多く、老舗の稱世に普く、髪油「ひな鶴」の名亦高し、

和歌山電氣治療所

和歌山電氣治療所 十三番丁にあり、所主既に電氣治療に多くの経験を有す、又温浴法を併行す、患者の來りて治療を受くもの日に多し、所主頗る熱心に患者を遇するの喜ぶべし

風月庵

電話一二七番

風月庵 旅館と料理店を兼ねたる風月庵は、紳士の宴會場として恰適せり、庭前の趣味多きは亦四美館と伯仲の間にあり、高樓は番廓の一角を廻り間敷甚だ多く、和歌山城は陣中に入る、市の中央にありて、四邊に便利甚だ善し、割烹に接客法に於て賓客を満足せしめざるはなし、(十一番丁)

大菊樓

電話四五二番

番廓大菊樓 といへば知らぬものなし、藝妓の數は東番廓青樓中の首位を占む、風姿清楚、

且つ技藝に練熟せるものを以て充せり(十一番丁)

四季の家

四季の家 東廓圓福院西の丁にある料理店にして、開業日淺きも既に顧客の來る頻々たるの光景を呈せり、

福元亭

福元亭 十三番丁にある精肉店あり、女將頗る客に接して愛嬌あり、開業日淺きも繁昌せり、

東番両廓の大店

前記の外番廓の龜山、お福、鹿の子、明月、東廓此花樓、阪よし、一ぶく、鶴の家、中川(上新地)、佐武、萬壽樓等は兩廓に於ける大店にしてさうく盛んあり、

和歌浦薔薇園

和歌公園の設備に就ては何人も其急なるを説くも、未だ着手したるを聞かず、茲に於てか
和歌山の有志生駒毛八郎氏發起人となり扇の芝伏虎園主人是れに賛同し、遂に養珠寺の西
側に地を相し薔薇園を設くることとなり、既に着々歩を進めつゝあり、薔薇數百種、其株
數は二千、將に百花燎乱の大花園と化せんとす、和歌公園設備の急先鋒として甚だ稱すべ
き事業たるあり、

吉田盛輪商會

(和歌山市三木町堀詰)

和歌山市に於て最も古く自轉車商を營みしは吉田盛輪商會なるべし、同商會は今より八年
前の開業にして信用最も厚く深切確實にして専ら高尚優美、堅牢快速なる者のみを撰擇し
て發賣し居れば、大に安心して購ふを得べく、總ての点に注意周到にして修繕にも多くの
經驗を有し、發賣車輪は輪界の絶品たる米國製にては横濱石川商會の直輸入に劣れるピア
ス、スチルを、英國製にては神戸横山商會の直輸入に係るコンピンシブル、ペロースの如
き堅牢なる者のみを特約して最も薄利に販賣することにて、各官衙公署銀行會社は悉く同

商會より供給し居れば店頭常に顧客の絶ゆることなく商運日に盛んあり、

江川活版印刷所

電話一四四番

▲▲▲▲▲
▲▲▲▲▲
▲▲▲▲▲
江川活版所は本町二丁目にあり、數臺の印刷機は電力によりて常に輕快に運轉しつゝあり、
熟練なる職工は、鮮明の活字に依りて其手腕を示し、和洋帳簿、其他印刷物も頗ぶる
迅速に且精巧なりとの評あり、加之十數年間確實なりとの信用を得、期日をも守り華主を
満足せしめ居れり、